

BULLETIN
OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.11

CONTENTS

THE AGGREGATIONS OF THE EXCAVATED ORNAMENTS
IN AOMORI PREFECTURAL

THE JOMON PERIOD

March 2006

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

研
究
紀
要

第
11
号

二
〇
〇
六

青
森
県
埋
蔵
文
化
財
調
査
セ
ン
タ
ー

研 究 紀 要

第 11 号

青森県における装身具の集成

縄文時代編

2006.3

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査センター 25年にあたって

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 白鳥隆昭

当センターは、県内の埋蔵文化財の保護と調査、研究を行う専門機関として昭和 55年に設立され、今年度をもちまして 25周年を迎えました。このたび、編集委員会を設け「研究紀要」第 11号を記念特集号として編集し、これまで当センター及び市町村が発掘調査した遺物の中から装身具を選んで集成を行うことになりました。本号にその成果を掲載しましたので、今後の調査研究活動に役立てていただければ幸いです。

さて、県内の開発事業に先立って当センターではこれまでたくさんの遺跡を発掘し記録保存して参りました。既に刊行した発掘調査報告書は 400冊を超え、青森県の歴史を知る上で貴重な資料を提供して参りました。出土遺物については、国民共有の文化的遺産として永久保存に努め、展示等に活用しております。今後の課題としては、学校教育や生涯学習の機関と連携しながら、発掘調査の成果を歴史教育の分野に役立てることなどが挙げられます。また、一方では増え続ける出土遺物の保管場所の確保や、情報化社会に対応した資料のデータベース化、公開などの懸案もあります。

センター 25年を振り返りますと、発足当時 22名の職員であったものが今では 40人になり、施設も旧情報処理教育センターの敷地と建物を取得するとともに保存科学分野の充実を図って参りました。これまで発掘調査した遺跡や出土遺物の中には国、県の史跡や重要文化財に指定されたものもあり、地域社会の文化財の普及、啓蒙活動に寄与しております。

今後とも、縄文文化の宝庫とされる青森県に残された貴重な文化財の保護に努めて参りたいと思っておりますので県内各地の発掘調査に際し、調査指導員・調査員の方々をはじめ関係各位にはご指導、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

青森県埋蔵文化財調査センター 25年の歩み

昭和 55年(1980)

4月 青森県埋蔵文化財調査センター設立。総務課・調査第一課・同二課・同三課。職員数 22名。

昭和 57年(1982)

1月 「埋文あおもり」創刊。

5月 垂柳遺跡の発掘調査開始(~昭和 58年)。弥生時代の水田跡を 656枚発見。青森県における米(稲)の栽培を一挙に千数百年遡らせ、我が県の農業史の上で稲作の開始時期の書き換えを提起した。この年、垂柳遺跡調査会が東奥賞受賞(東北初の弥生期水田跡の立証と研究)。平成 12年 4月、国史跡に指定される。

平成 2年(1990)

3月 八戸市葦窪遺跡出土の狩猟文土器 1点が県重宝に指定される。

平成 4 年(1992)

5 月 三内丸山遺跡発掘調査開始(～平成 6年)。縄文時代前期から中期にかけての国内最大級の集落跡であることが判明。

平成 6 年に東奥賞受賞(三内丸山遺跡の発掘・研究と積極公開)。

平成 7 年からは教育庁文化課内に三内丸山遺跡対策室が設置され、発掘調査継続。

平成 9 年 3 月に国史跡、平成 12年 11月に国特別史跡に指定される。

平成 15年 5 月に出土遺物のうち 1958点が、国の重要文化財に指定される。

平成 5 年(1993)

4 月 専門職員の増員により、総務課・調査第一課・調査第二課・調査第三課・調査第四課に改組。職員数 37 名。

7 月 三内丸山遺跡の整理室として松原分室を設置(調査第四課が勤務)。

平成 6 年(1994)

1 月 第 1 回遺跡発掘調査報告会の開催。

6 月 浪岡町高屋敷館遺跡発掘調査(～平成 7年)。平成 13年 1 月、国史跡に指定される。

平成 7 年(1995)

6 月 六ヶ所村大石平遺跡出土品 198点が国の重要文化財に指定される。

平成 8 年(1996)

3 月 「研究紀要」創刊(「埋文あおもり」は廃刊)。

平成 10年(1998)

4 月 組織の改組。総務課・調査第一課・同二課・同三課・資料課となる。旧情報処理教育センターの土地と建物を取得。

7 月 県・市町村の埋蔵文化財発掘調査機関の情報連絡誌「ネットワーク発掘」創刊。

9 月 旧情報処理教育センターを一部改修後、埋文センターの主要機能を移転。これを契機に出土遺物の保存処理・遺物の収蔵展示・図書室等の設備拡充が図られる。木製品・鉄製品等の保存・修復のための機器と軟 X 線撮影透過装置等の導入。以後、この分野での市町村支援。

平成 13年(2001)

11月 発掘調査を実施している県・市町村教育委員会で構成する青森県公立発掘調査機関連絡協議会の設立。

平成 14年(2002)

7 月 親子体験学習「夏休みに考古学者になろう」始まる。

平成 15年(2003)

4 月 六ヶ所村表館遺跡出土の細隆起線文尖底深鉢形土器 1 点が県重宝に指定される。

平成 16年(2004)

4 月 課制を廃止し、グループ制に改組。総務 G・調査第一 G・同二 G。職員数 40名。

平成 17年(2005)

3 月 青森県教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 406集に至る。(第 1集は、昭和 48年社会教育課刊行)

9 月 情報連絡誌「ネットワーク発掘」にかわって「maibun-net.あおもり」創刊。

例 言

- 1, 本集成は、青森県から出土した縄文時代の装身具を集成したものである。
ただし、頁数の節約のため、本号に弥生時代・下北地方の装身具を掲載した(図版3, 4)。
- 2, 時代については、次のように区分して図版を作成した。
 1. 縄文時代 2. 弥生、続縄文時代 3. 末期古墳時代(飛鳥、奈良時代) 4. 平安時代
- 3, 地域については、1. 下北地方、2. 南部地方、3. 津軽地方に区分して図版を作成した。
- 4, 資料は研究紀要第11号と第12号に分けて掲載することとした。本号には縄文時代の資料、次年度の研究紀要には弥生時代～平安時代までの資料を掲載する予定である。
- 5, 集成の対象は、平成16年度(2005年3月)まで県及び市町村刊行の発掘調査報告書等に掲載されたものである。集成であるために、装身具の可能性のあるものを含め対象を幅広く捉えているが、有孔石製品の一部は頁数の関係上掲載していないものがある。
- 6, 集成作業の担当者名は、下記のとおりである。

資料収集担当者

県刊行発掘調査報告書による資料収集

1～100集：山田雄正、101～200集：岡本 洋、201～300集：平山明寿、300～406集：佐藤智生、野村信生

市町村刊行発掘調査報告書による資料収集

青森市：齋藤 正、弘前市：新山隆男、八戸市：中村哲也、津軽地方：佐々木雅裕、
下北地方：小山内将淳、南部地方：畠山 昇

県外刊行発掘調査報告書、県内外雑誌による資料収集

全国：鈴木克彦

分布図：宮嶋 豊、写真：小笠原雅行、観察表：神昌樹、文献一覧：葛城和徳
時代概説：鈴木克彦(縄文時代)、永嶋 豊(弥生～飛鳥時代)、工藤 忍(奈良、平安時代)
- 7, 素材分類(石製、土製、骨・角・牙・歯・貝製、木製・漆塗製、硝子製・金属製)、名称は、図版にキャプションとして示した。
- 8, 分類や名称について、判断の難しいものは敢えて特定化せず環状石製品などと抽象的に表現した。
- 9, 掲載資料の出土遺跡については、文中に記した。
- 10, 掲載資料の縮尺は、二分の一に統一した。
- 11, 図版の中に(参考)として掲載した実測図は、樋口清之 1940「垂玉考」『考古学雑誌』30-6による。
- 12, 資料の出典及び引用文献目録については、次号に掲載する。
- 13, 各市町村教育委員会には資料の確認・追加訂正等を依頼してご協力を賜った。
- 14, 文献収集にあたり、苫小牧市埋蔵文化財センター工藤 肇氏にご協力を賜った。

青森県における縄文時代の装身具概要

鈴木 克彦

はじめに

集成にあたり、本来は装身具の定義から検討して取り掛かる必要があったが、本集成を単年度で行うという事情により装身具の可能性のあるものまでを含めて孔の空いた遺物は全部収集することとし、それらの中から選択して掲載することにした。その際、偏りが生じないようにしたが、逆にこれも装身具と言えるのか、という類まで網羅した。本集成には、2780点を掲載した。

定義問題は集成を行う際の両刃の剣であり、定義に対する異論が生じた場合に集成自体が恣意的なものを受け取られる恐れがある。実際、石器を含めた各種の石製品、用途不明遺物、信仰祭祀儀礼遺物、未成品、武器武具付属品などとの判断が難しいものもある。

本集成により、青森県から出土している質量共に優れた縄文時代の装身具の全容を明らかにすることができた。それらの資料的意義は高いので、幾つか考古学上の問題点を明らかにしておきたい。

2 装身具概要（時期別の特徴）

青森県で最も古い類例は、縄文時代早期前葉貝殻文土器期の八戸市根城跡、櫛引遺跡から出土している土製品（図版 26-10、28-20,21）である。装身具か否かの判断が難しいものである。次いで、後葉の八戸市赤御堂貝塚から有孔石製品（図版 15-19）、角製玉（図版 31-7）、長七谷地貝塚から青森県最古のけつ状耳飾（図版 5-1）、ヘアピン類（図版 30）が出土している。

前期では、青森市三内丸山遺跡に円筒下層 a,b式期の玦状耳飾（図版 33-14,15）、下層 d 式期の玦状耳飾（図版 33-19）、小玉（図版 41-101）、或いは骨角製の牙玉類（図版 51）ほか（図版 43-28）が出土している。前期の代表的な装身具である玦状耳飾に、むつ市瀬野遺跡で円筒下層 d 式～上層 a 式期（図版 1-3,4）、鯨ヶ沢町鳴沢遺跡で円筒下層 d 2式期（図版 33-6）がある。また厳密には装身具と言いが、平川市大面遺跡に岩版に紐孔の空いたもの（図版 43-26,27）が出土している。

中期では、八戸市熊ノ林遺跡に円筒上層 a式期の玦状耳飾（図版 5-7）、深浦町津山遺跡に円筒上層 a 式期（図版 33-7）、八戸市西長根遺跡に大木 8 b 式平行期（図版 5-6）、八戸市笹ノ沢遺跡において土坑内などに円筒上層 a式期の翡翠（図版 7-10）、玉髓（図版 20-8）、軟玉製（図版 7-20）、滑石製（図版 20-7）の大珠が出土している。後葉には、三内丸山遺跡に榎林式期の根付形大珠（図版 34）が出土している。

中期後半期に石製装飾遺物が急増し、後期前葉にも土製装飾遺物が多く出土するが、階上町野場 5 遺跡の中期末葉の滑車形（図版 27）は、無孔の例もあり装身具かどうか検討する必要がある。

後期では、前葉に五戸町薬師前遺跡から人骨と共に貝製胸飾（図版 32）、黒石市一ノ渡遺跡から翡翠大珠（図版 35-4,5）が出土している。土製の大型滑車形耳飾（図版 26-5～9）、大型腕飾（図版 50-27～32）もある。八戸市風張遺跡の後葉の土製縄文勾玉（図版 22-3,4）は、北海道に類例があるが、本州での初見だと思う。

晩期では、むつ市二枚橋遺跡（図版 2）、大洞 C₁、C₂ 式期の六ヶ所村上尾駮（1）遺跡（図版 9～12）、大洞 C₂、A 式期の外ヶ浜町宇鉄遺跡（図版 37,38）、青森市朝日山遺跡（図版 39）、つがる市亀ヶ岡遺跡（図版 40）に翡翠製を含む縄文勾玉、丸玉、小玉が多数出土している。また、土製縄文勾玉（図版 46）が宇鉄遺跡から出土している。このような連珠にする用法が、青森県以北の特徴である。

その他、土製の耳飾（図版 24・25）、腰飾（図版 27-22,23,28-1～3,50-15）がある。木製では、八戸市是川中居遺跡から漆塗りの櫛、耳飾、腕輪（図版 29）が出土している。

3 まとめと問題点

青森県の縄文時代の装身具は、多量で多様性がある。また、南部地域と津軽地域で地域差がある。形が特徴的な土製分銅形の小玉、耳栓（図版 2-35,38,40～44,48）を出土する下北半島地域は、同じ類例を出土する津軽地域（図版 47-1～27）に関連すると思われる。縄文時代の代表的な装身具である翡翠製縄文勾玉は、津軽地域を特徴づける貴石である。

青森県における珉状耳飾の特徴は、円形と三角形の類型が多いことである。三内丸山遺跡で円形が下層 a, b 式期、三角形が熊ノ林遺跡で上層 a 式期とされている。上限は長七谷地貝塚の類例によって早期末葉、下限は西長根遺跡の大木 8 b 式併行期である。この結果、早期末葉の丸みを帯びた円形 前期中葉の扁平な円形 前期末葉から中期初頭の三角形 中期中葉の長方形の順に変遷すると考えられる。

問題は、これが果たして定説化しているピアスかどうかである。人骨頭部付近から出土する傾向があっても、紐に吊り下げて垂れ飾りとして使われたことも考えられる。事実上、三角形珉状耳飾をピアスとして用いることは、切れ目の幅などから不可能だと考える。

同じく、土製滑車形耳飾とされている類例（図版 3,26,）には直径 10センチを超えているものがあり、耳たぶに孔を空けてはめ込むことは不可能であろうし、直ぐ外れるだろうから、耳飾とすることができないと考える。併せて、分厚い土製の滑車形（図版 27）についても名称や用途を検討する必要がある。

この耳飾りについては、北日本ではほとんど研究されていない。耳飾としては重くて実用性が希薄な石製の類例（46-1,2）は、全国的にみても珍しいものである。その一方で、木胎の漆塗り（図版 29-9）がある。津軽地域に多く見られる型どりではないかと疑いたくなる小型な滑車形耳飾（図版 49-20～41,他）は、華奢で薄い作りで壊れやすいものであり、長時間の着用は無理であろう。両端の直径が違うもの、或いは耳栓など、青森県だけでも従来耳飾ではないかと同定されてきた遺物は、実に多様なものであり、分類、名称、用途などを含めて抜本的に検討されなければならないと考える。

中期の大型な翡翠製大珠について、青森県及び岩手、秋田県以北の北日本の特徴は荒谷型の根付形である。近年、それが三内丸山遺跡などで製作されている可能性がでてきた。しかし、その時期は発掘当時担当者から最も近い所から出土した土器が榎林式だと聞いた以外、一切土器型式に対応した根拠が示されていないため正確な時期が不明であった。ところが、近年笹ノ沢遺跡において円筒上層 a 式期とされる滑石製根付形大珠等（図版 7-10,20-7他）が発見された。その中の 7-10は、本県最古の翡翠製装身具、日本でも五指に入る古さである。そこまで遡るとは想定外の古さで、石材、形態にも多様性がある。しかも、本県最古の軟玉が使われている。軟玉問題は、石材の同定が考古学者が行う

ことができないために等閑視されているが、幾つか類例（図版 41-120）があり、滑石などと共に石材産地と製作地を追求したいものである。装身具に多様な石材が使われていることから、かねてから予測していた非翡翠製大珠（図版 45-13～15）の存在や軽石製などの疑似大珠の存在（図版 21-1～5）が現実味を帯びてきたように思われる。

翡翠製縄文勾玉は、本州では青森県が北陸地方よりも多く出土している。朝日山遺跡の一遺跡での25点という出土量も突出している。津軽地域に多いということは上述した。それらの類例の大半が、頭部を中心に体部上半部に刻み目を持つものである。朝日山、上尾駁(1)遺跡などのように、墓から丸玉、小玉と一緒に出土することが多く、連珠で用いられていたと思われる。

問題はその初現で、中期末葉の大木 10式土器期とされる泉山遺跡の翡翠製の類例（図版 8-19）は再検討される必要があるが、後期後葉の翡翠製の類例（図版 8-13）は異形であり、それ以外では晩期以前の翡翠製の定型縄文勾玉は知られていない。晩期に出土する翡翠製定型縄文勾玉は、大洞BC, C1式期に集中するように思われる。因みに、泉山遺跡の翡翠製獣形縄文勾玉（図版 8-22）は、縄文時代最大のものである可能性が高い。

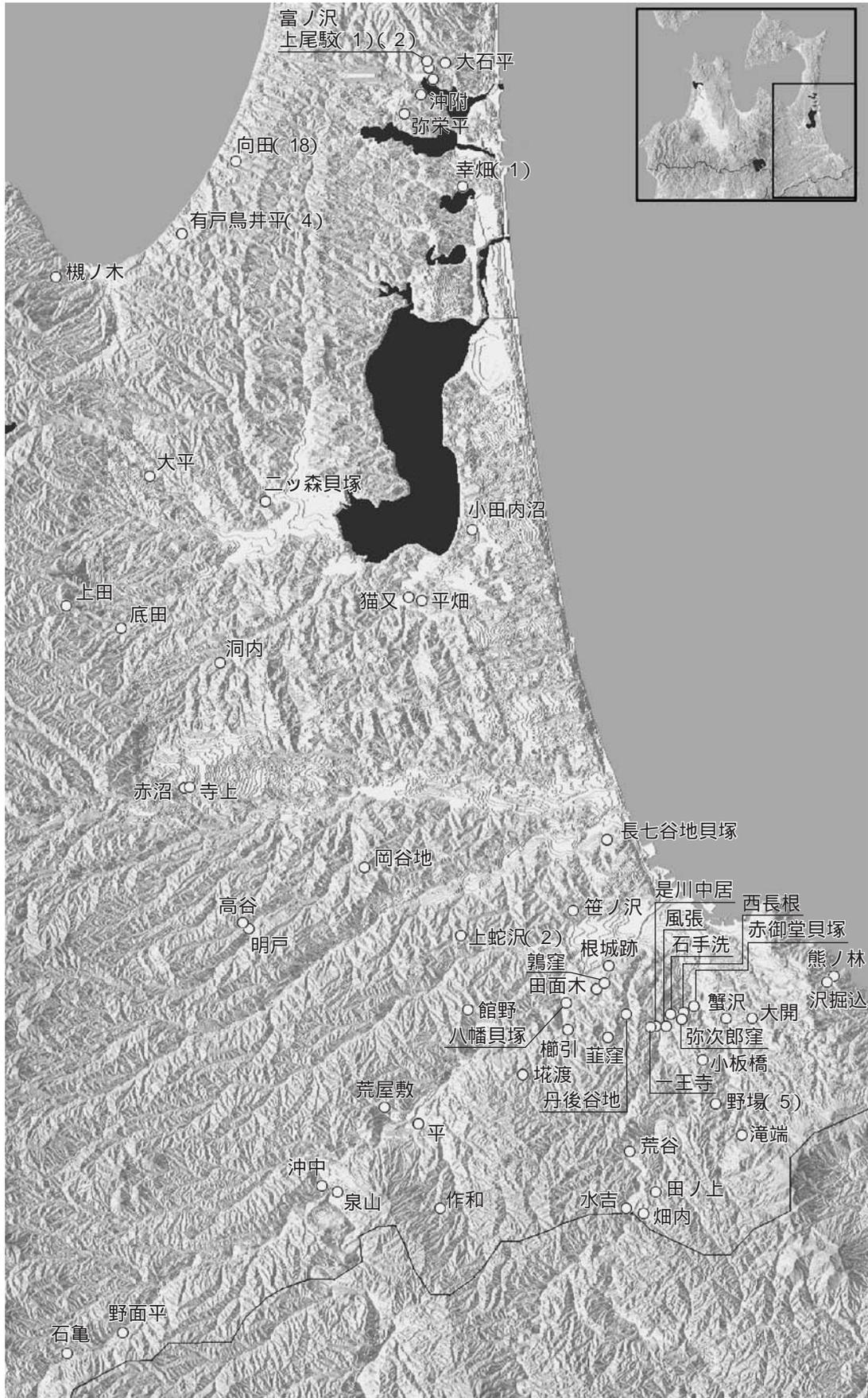
土製の縄文勾玉の中で後期と思われる八戸市風張遺跡の文様が施される類例（図版 22-3,4）は、北海道に存在する。北海道に多く見られるという点では、菊玉とも蜜柑玉とも言う刻み目の入った土製の小玉もまた北海道に類例が多い。

緑色凝灰岩製の丸玉、小玉（図版 40）は、確実に在地生産である。東北地方最大の玉作り遺跡は、工具、未成品が数多出土しているつがる市亀ヶ岡遺跡である。ただこの遺跡で緑色凝灰岩製の縄文勾玉が見当たらないことと、翡翠製の玉類を確実に製作しているかどうかをまだ実証できないことは問題である。

次に、珍しいものを幾つか紹介する。土製の指輪形（図版 27-21）は、石製なら北陸に出土しているが、土製品が他にあるかは不明である。「の」字形（図版 13-7）に類似するもの（図版 42-4）がある。玉斧は2点ある（図版 2-16,13-8）。人形には、石製と土製がある（図版 13-9,28-14）。土鈴（図版 28-4～13）という名称が相応しいかどうか問題があるが、空洞の中に小石の入った是川中居遺跡の類例（13）により掲載したが、滝端遺跡の類例（4～11）は中実、弥栄平遺跡の類例（12）は中空である。稀少材の類例には、琥珀玉（図版 13-4～6）、水晶製（図版 13-3）、大理石製（図版 33-14,15）、化石（図版 31-12）などがある。

名称が付いていないものがある。菱形の類例には、石製と骨製がある（図版 14-2～11,30-22）。最近では、装身具であるか否かが明確にできないものを一括して有孔石製品と呼ぶ傾向がある。

全体を通観してみて分類、名称、観察表の有無、縮尺の不統一さなどの問題点もあるが、発掘で出土したにも係わらず時期を特定できないものが多いことが最大の問題点であった。今や、縄文時代の装身具は、中期とか後期などと同定するレベルでさえ通用せず土器型式に対応した時期の把握が求められている。

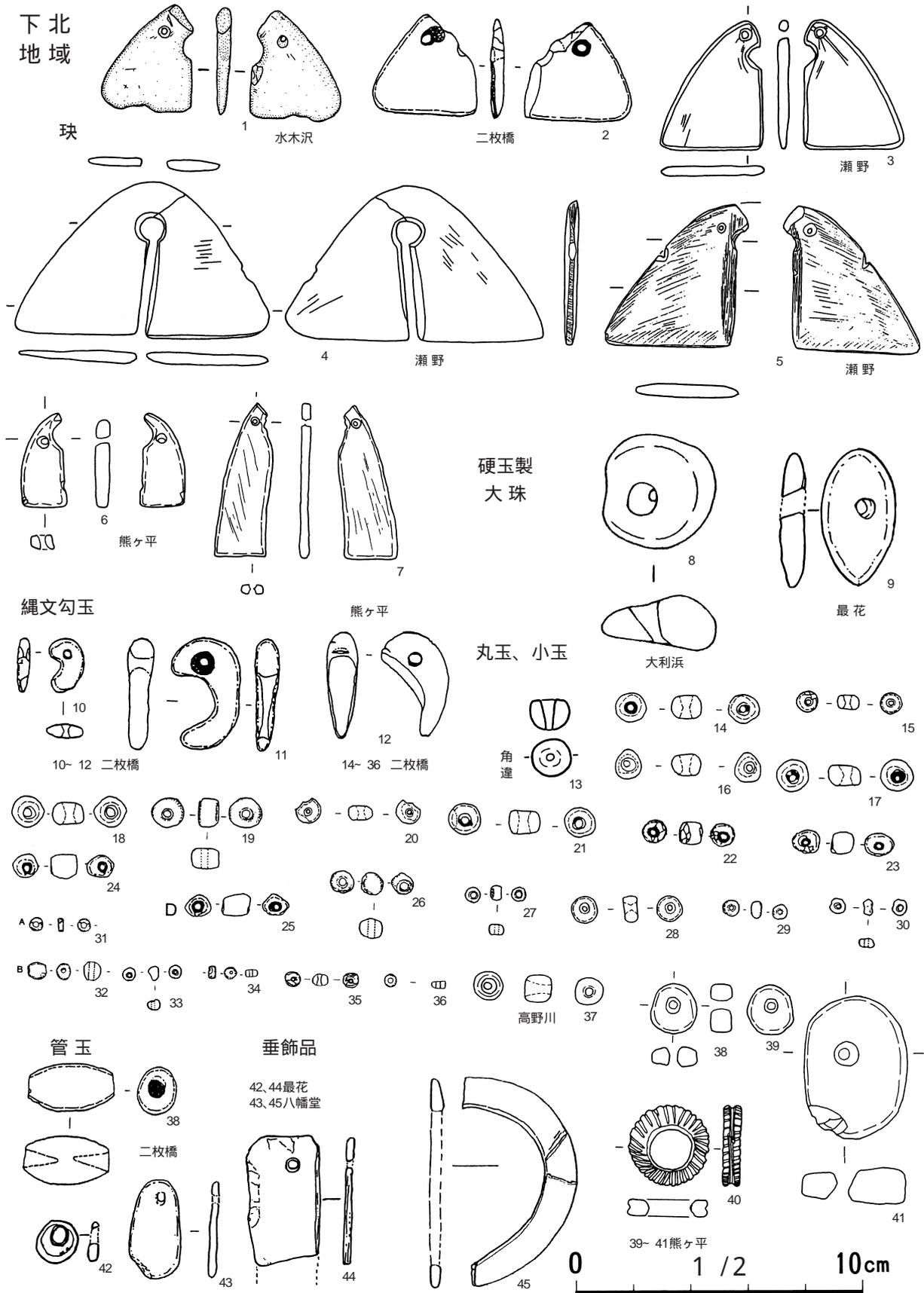


第3図 南部地域の資料掲載遺跡

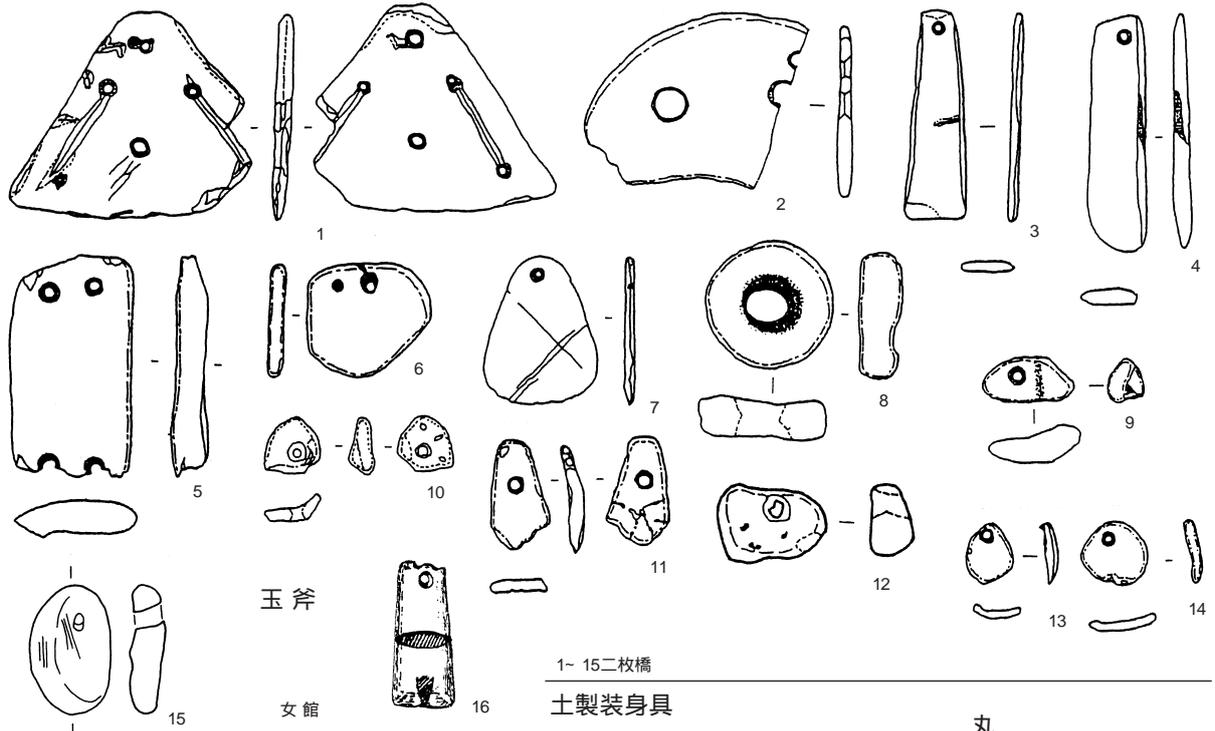
青森県における装身具の集成

縄文時代編

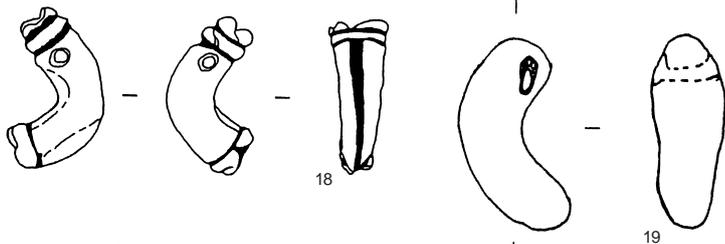
下北地域



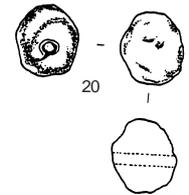
図版 1 (下北地域 1)



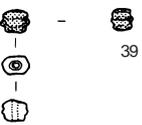
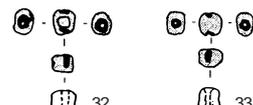
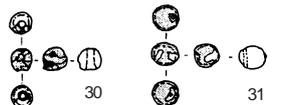
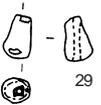
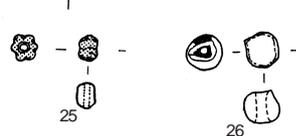
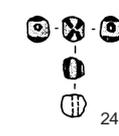
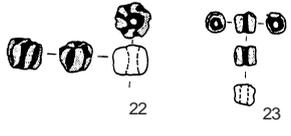
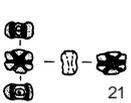
縄文勾玉



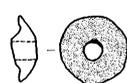
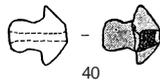
丸玉、小玉



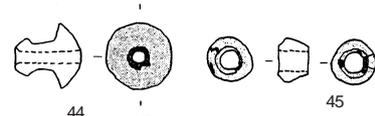
瀬野



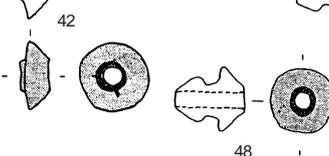
耳栓



18- 49 二枚橋



管玉

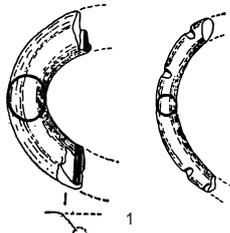


戸沢川代

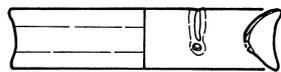
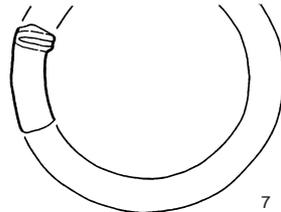
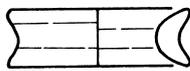
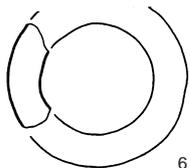
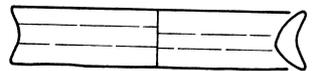
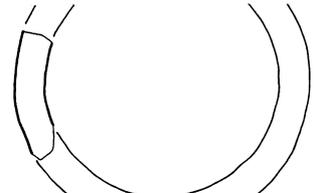
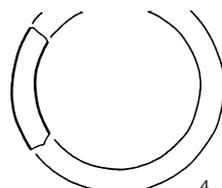
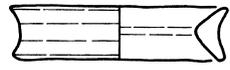
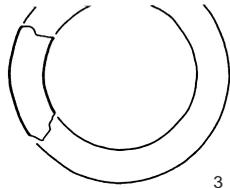


図版 2 (下北地域 2)

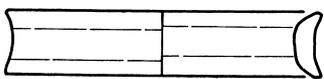
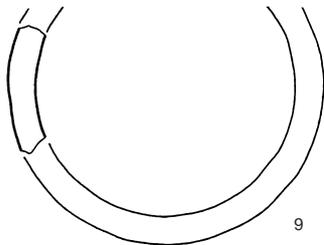
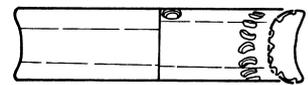
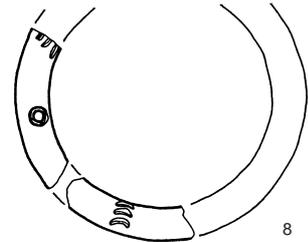
環状品



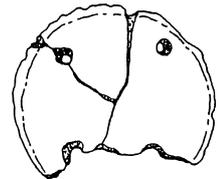
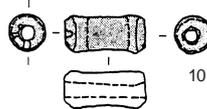
1 2 ドウマンチャ



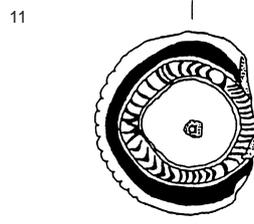
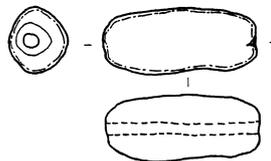
3-9
大湊近川



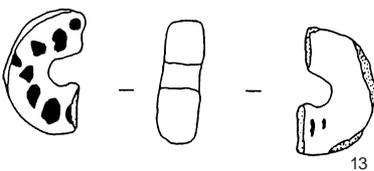
垂飾品



12



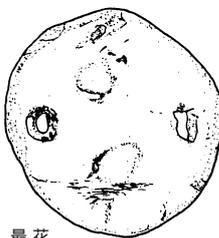
10- 15二枚橋



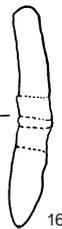
13



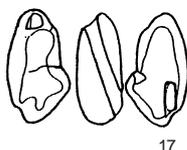
14



最花



16



17

鞍越



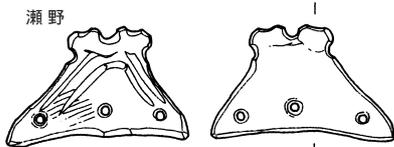
糠森



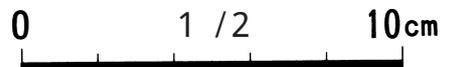
18

弥生時代 土製(装身具)

瀬野

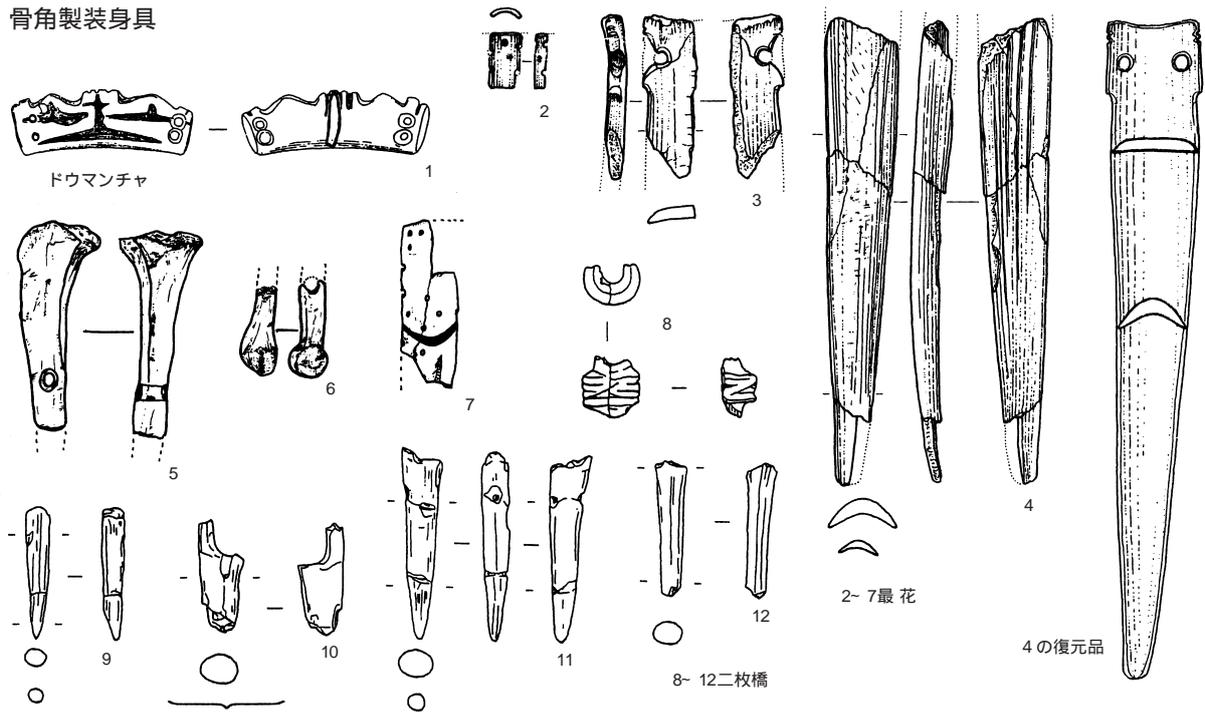


19

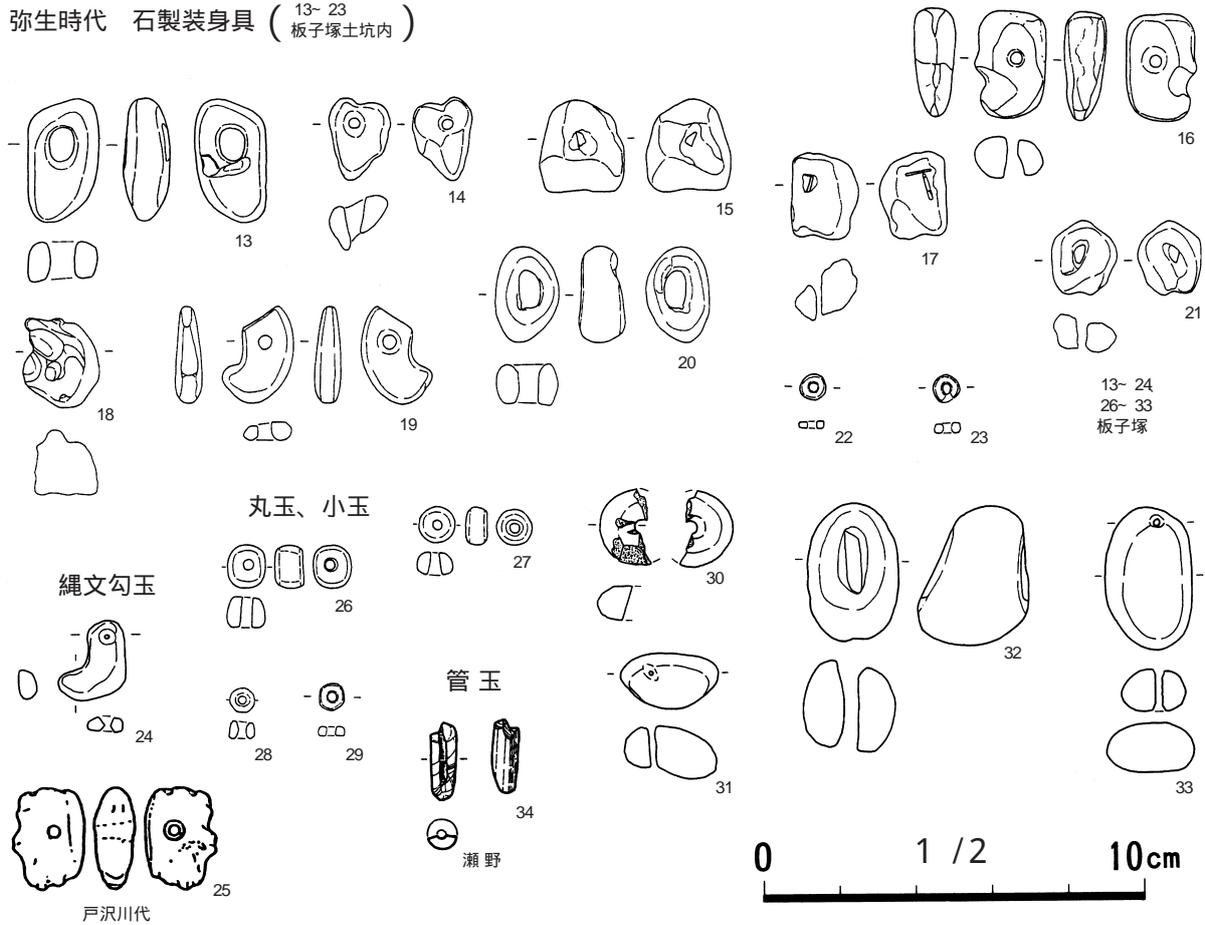


図版3 (下北地域3)

骨角製装身具



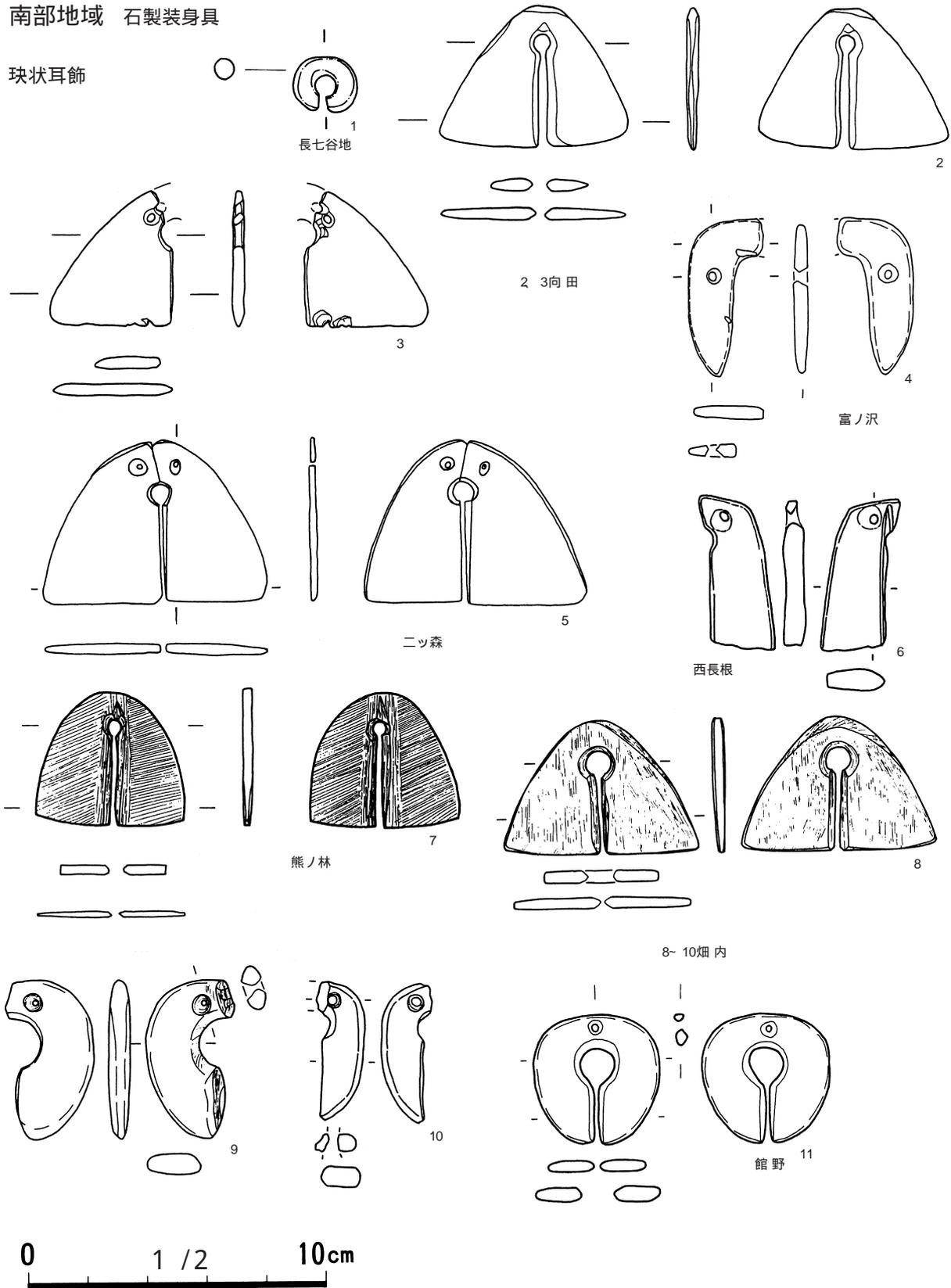
弥生時代 石製装身具 (13- 23 板子塚土坑内)



図版4 (下北地域4)

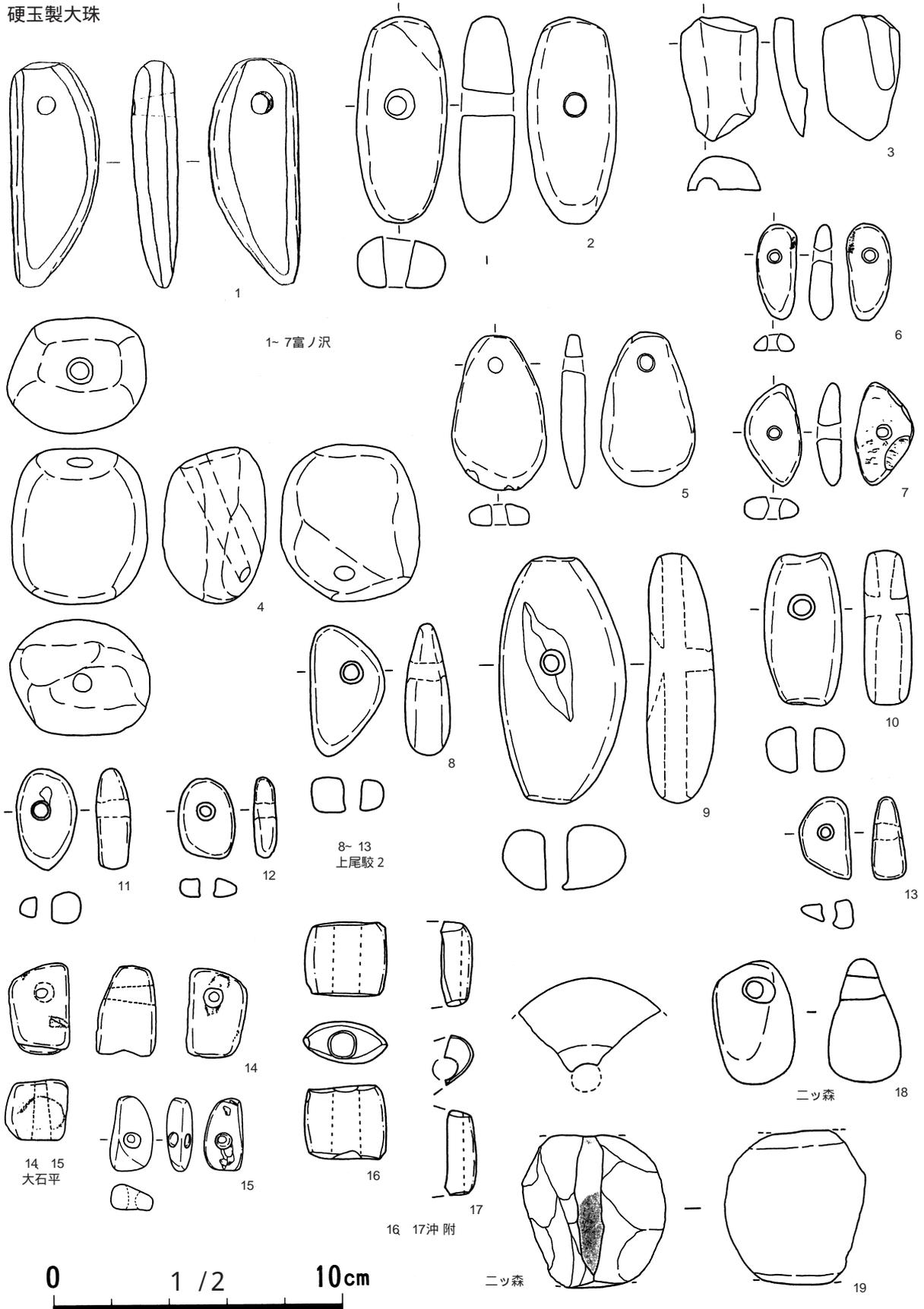
南部地域 石製装身具

球状耳飾

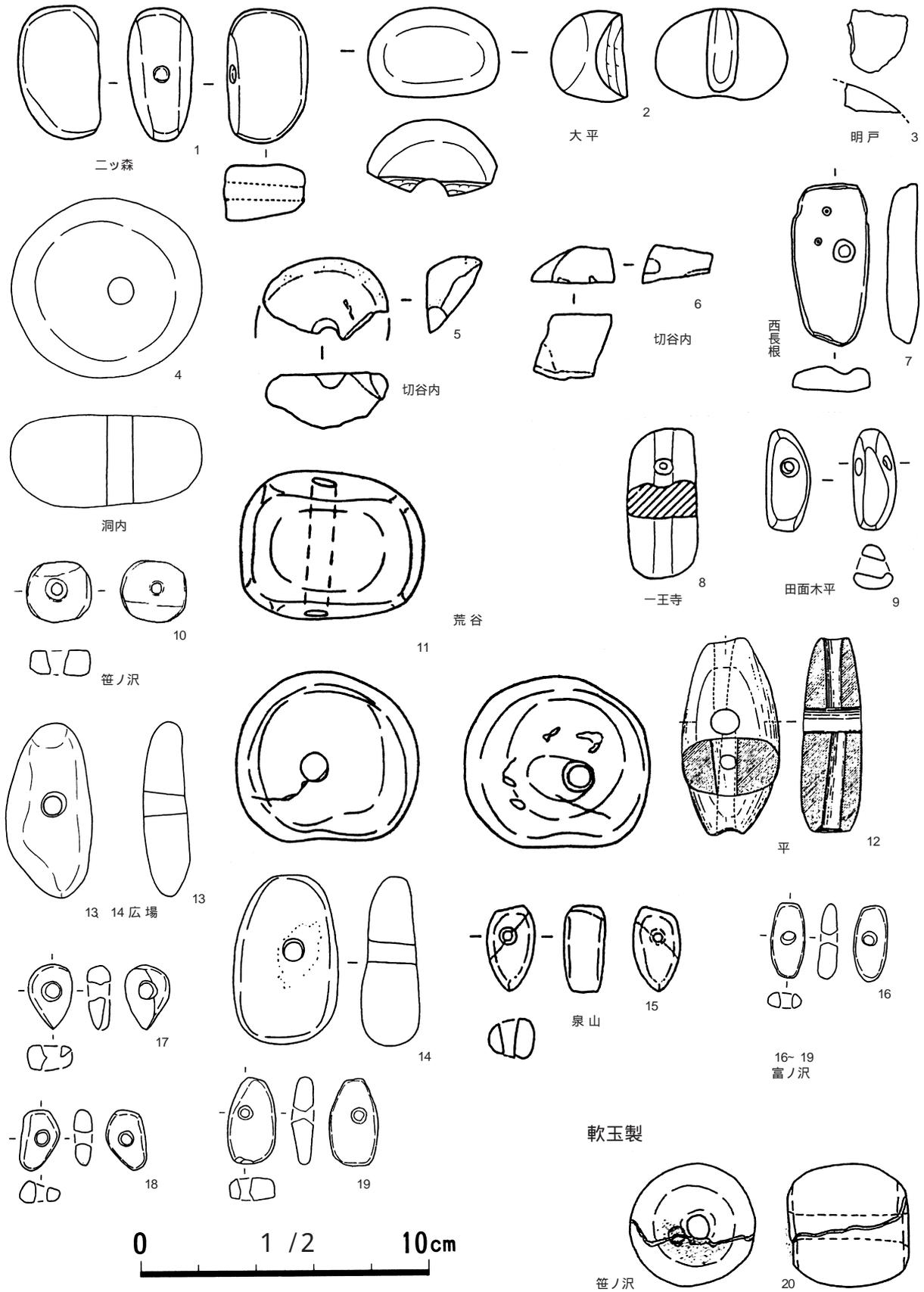


図版 5 (南部地域 1)

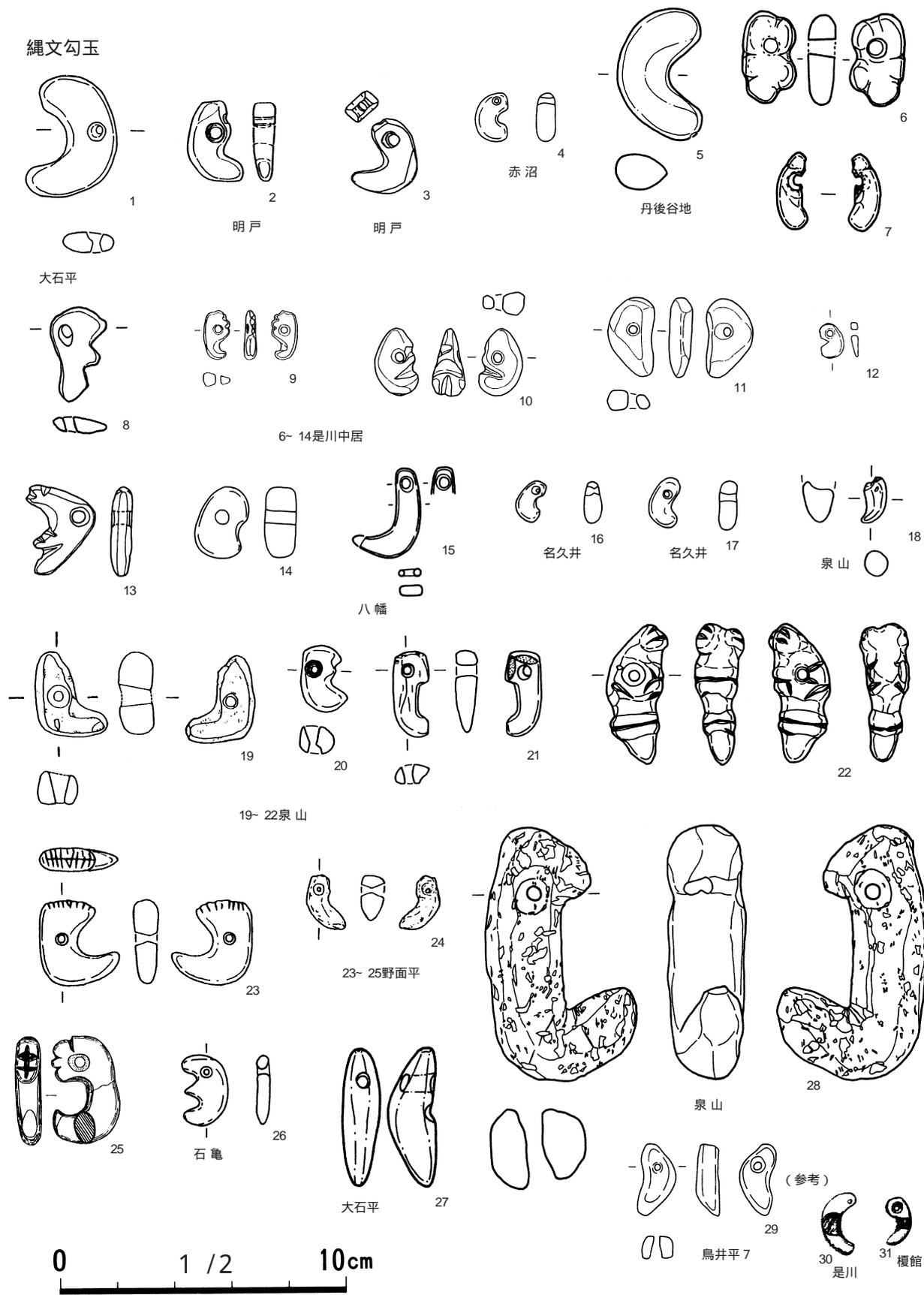
硬玉製大珠



図版6 (南部地域2)



図版 7 (南部地域 3)



図版 8 (南部地域 4)

(共伴櫛)



第 25号土坑

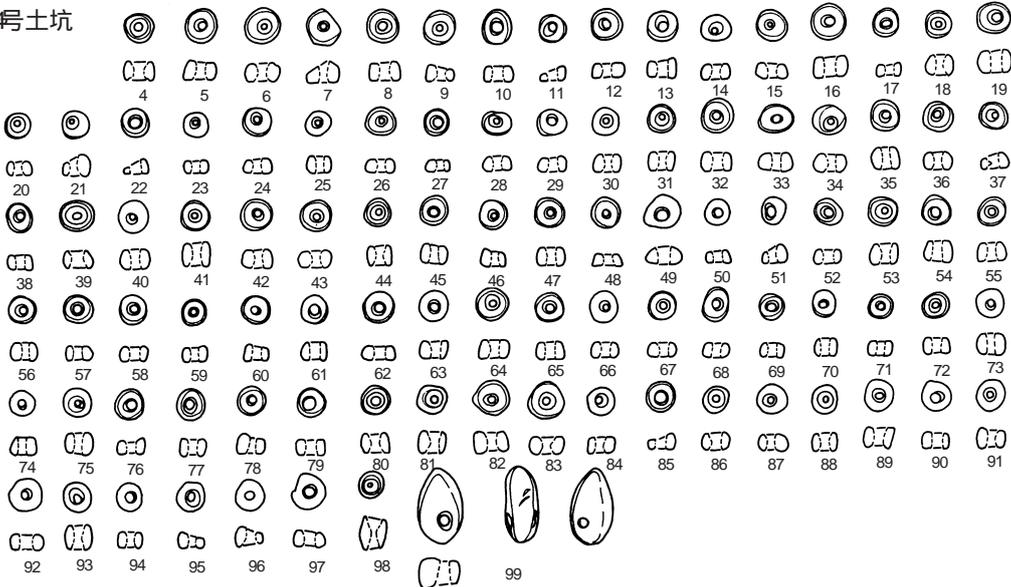
第 89号土坑

3

全て上尾駁(1)遺跡地区

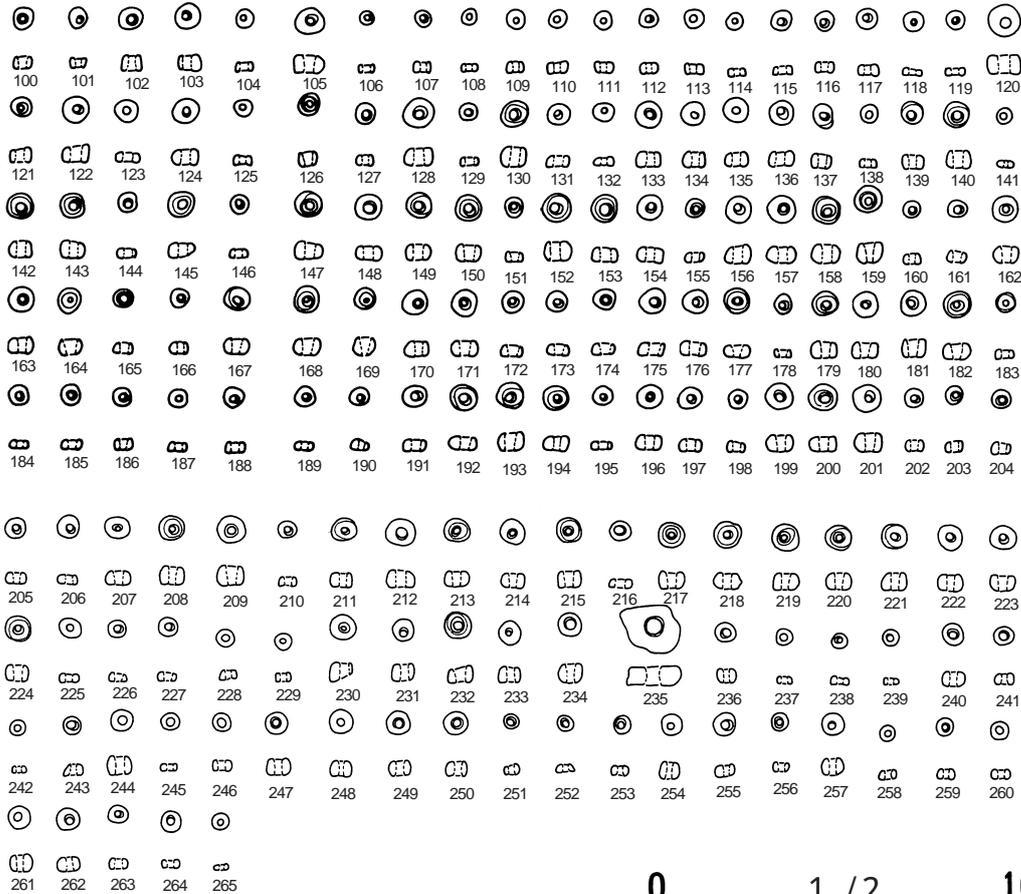
第 14号土坑

4-99



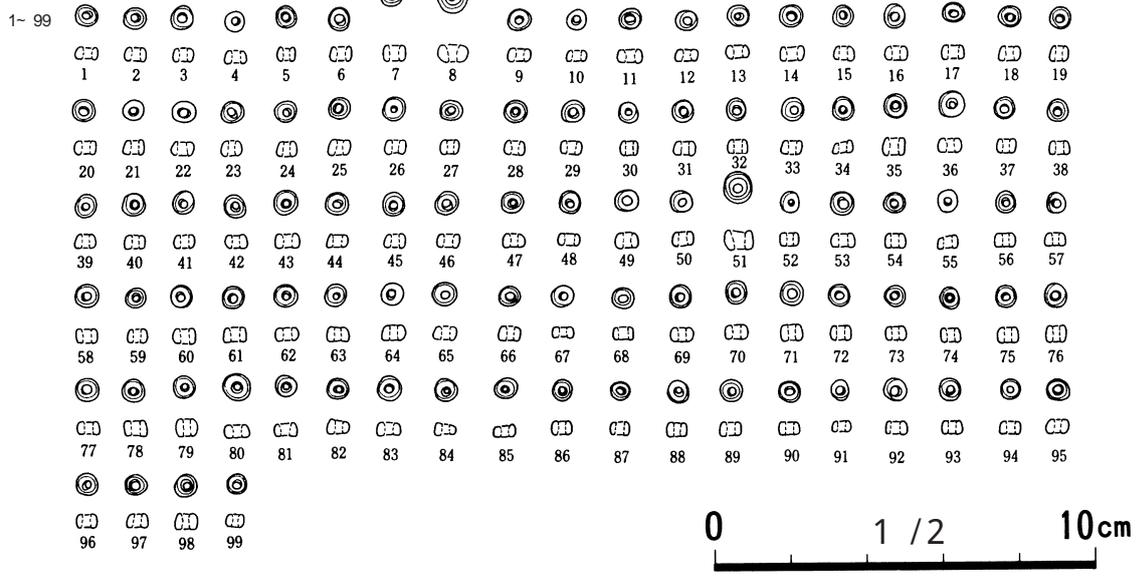
第 25号土坑

100-265

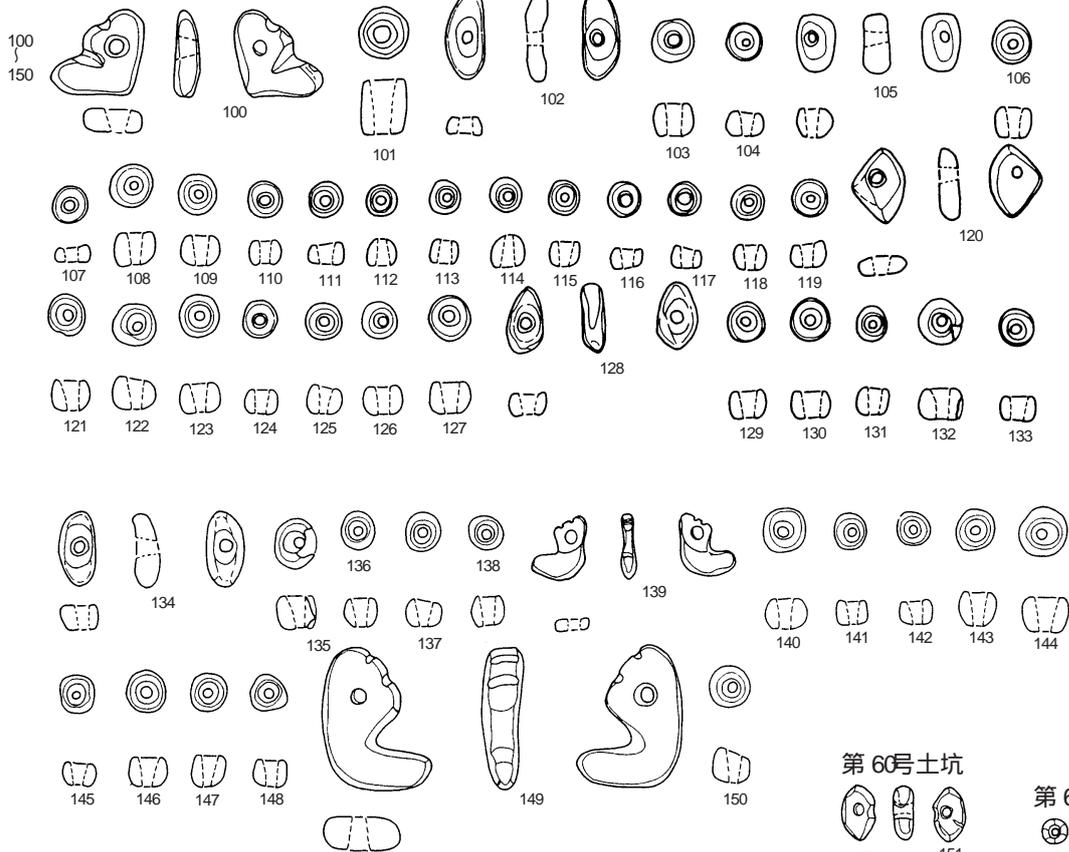


図版 9 (南部地域 5)

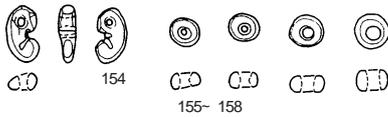
第 32号土坑



第 35号土坑

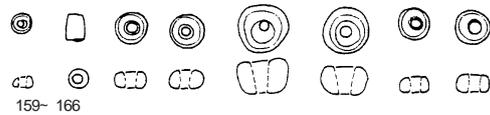


第 73号土坑

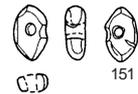


全て上尾駁(1)C地区

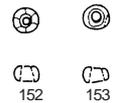
第 86号土坑

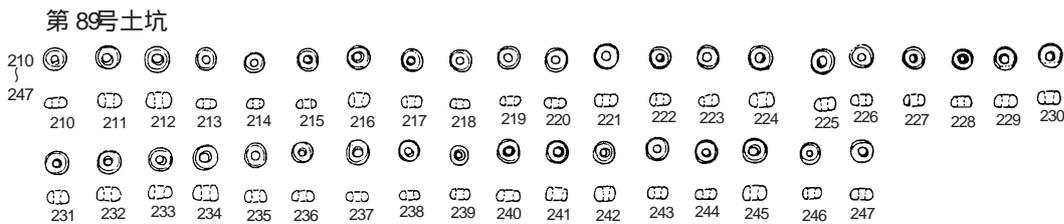
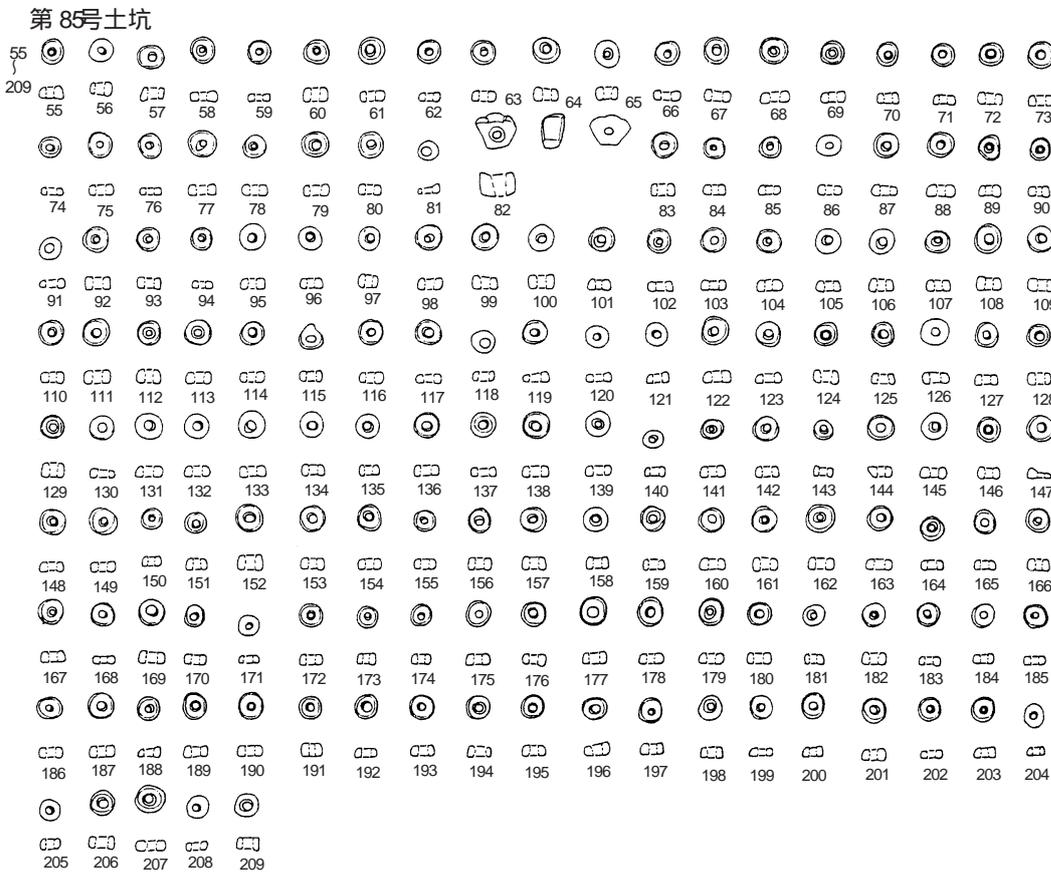
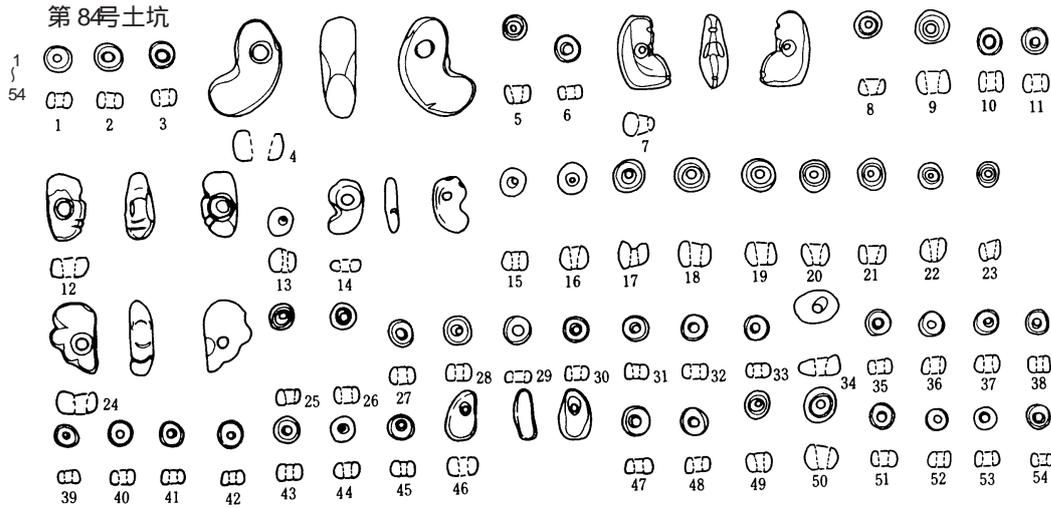


第 60号土坑



第 62号土坑

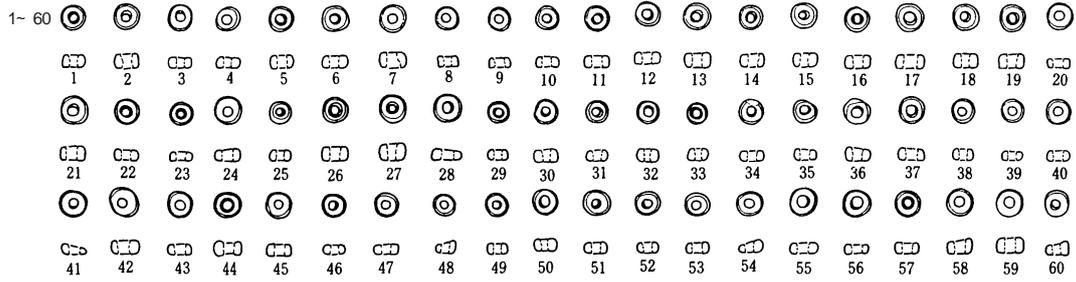




全て上尾駁 (1) 遺跡地区 0 1 / 2 10cm

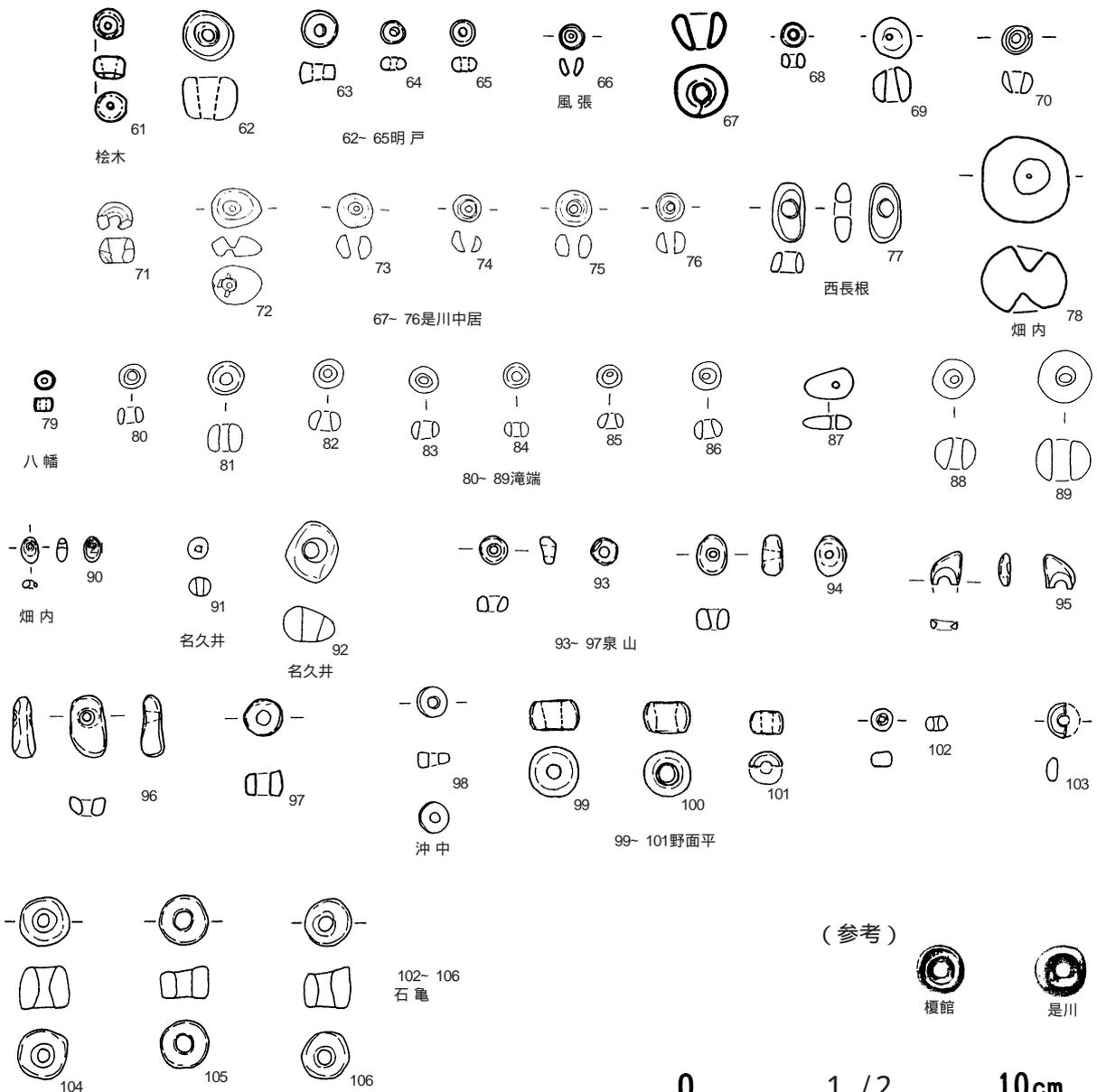
図版 11 (南部地域 7)

第68号土坑



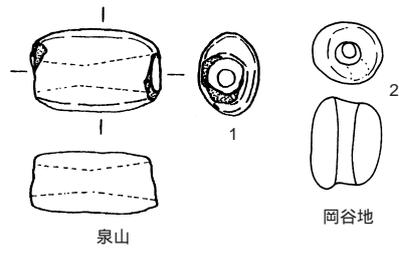
1~60上尾敷 1) 遺跡地区

丸玉、小玉

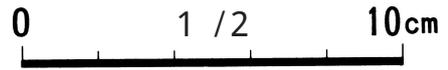
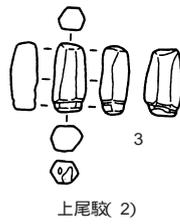


図版 12 (南部地域 8)

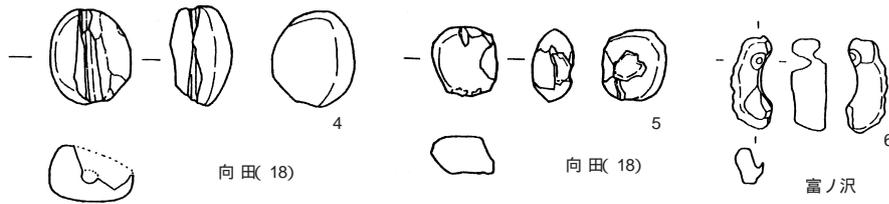
管玉



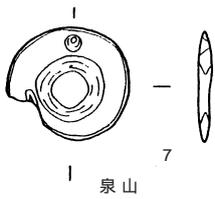
水晶玉



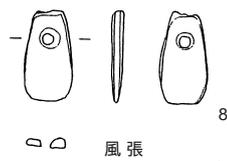
琥珀玉



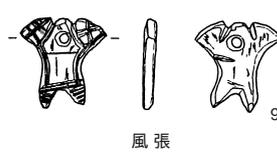
の字形



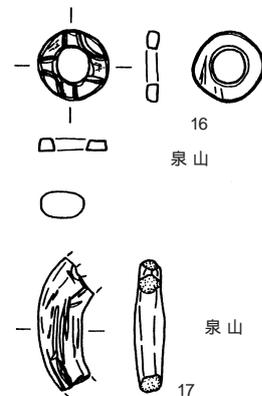
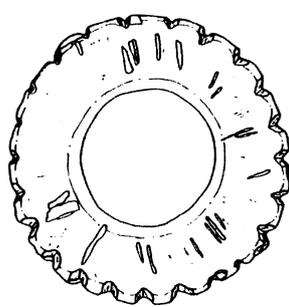
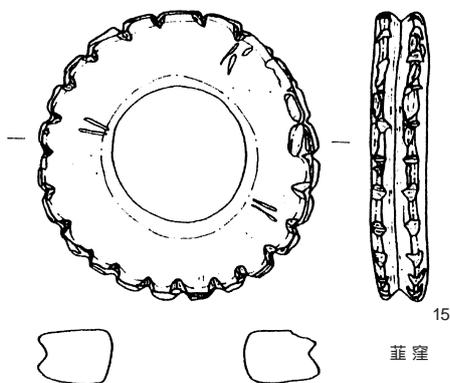
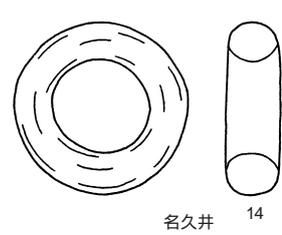
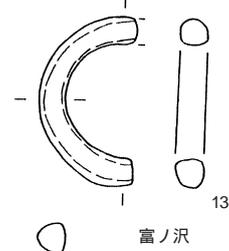
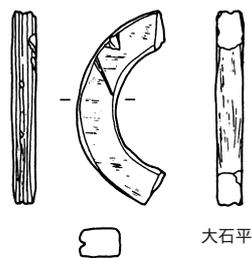
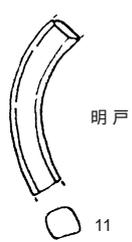
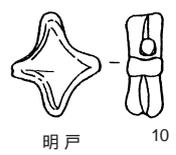
玉斧



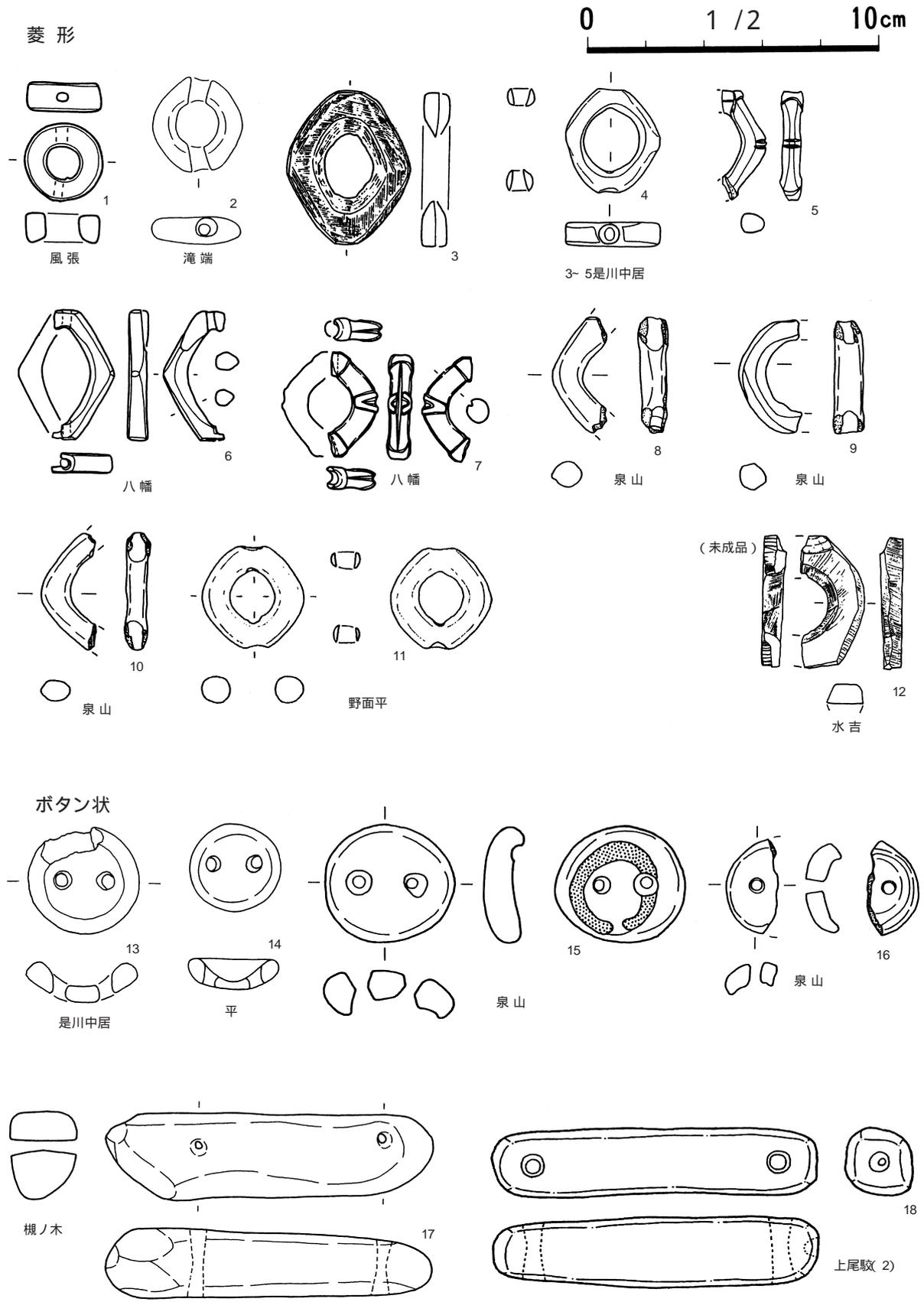
人形



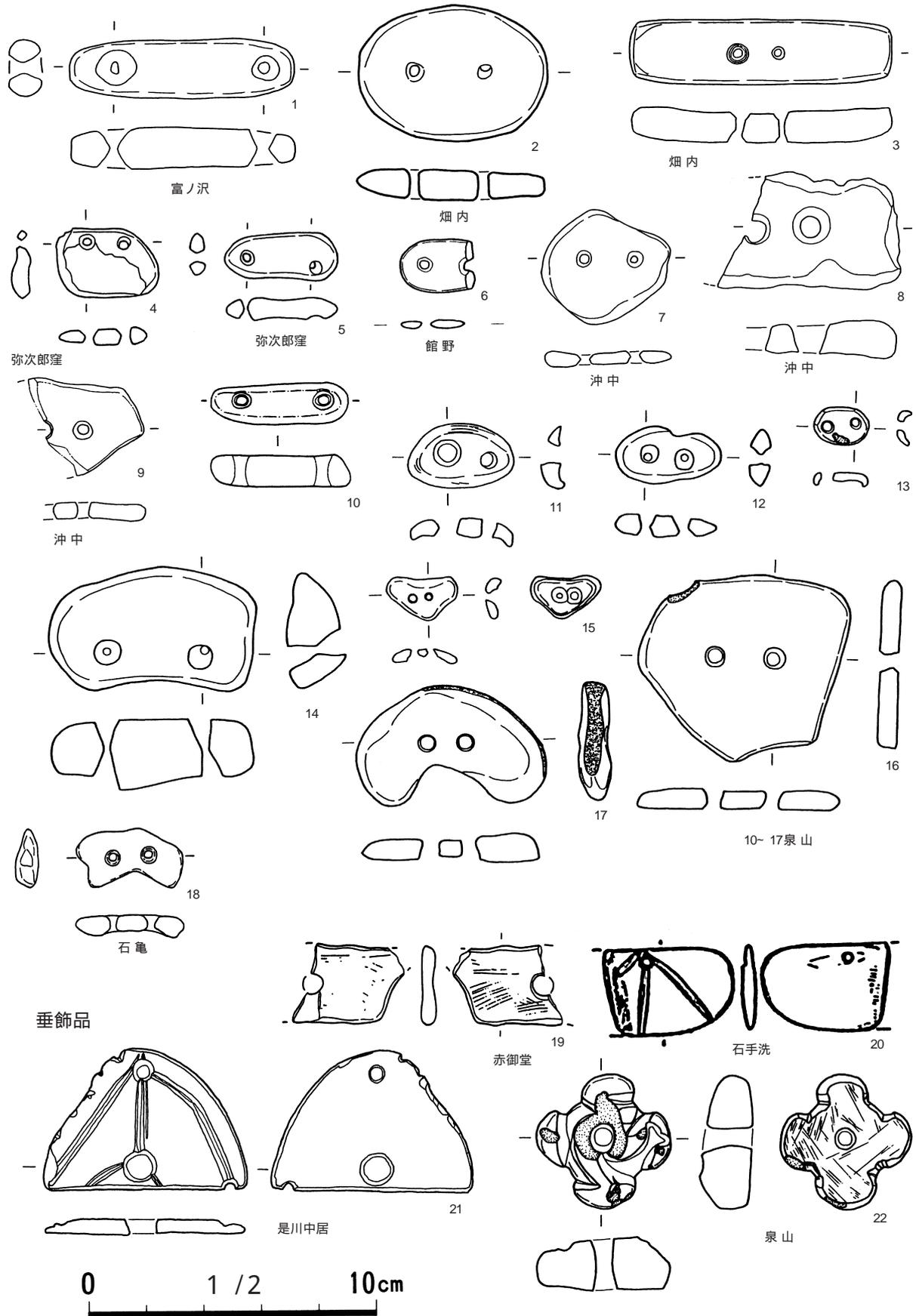
十字形



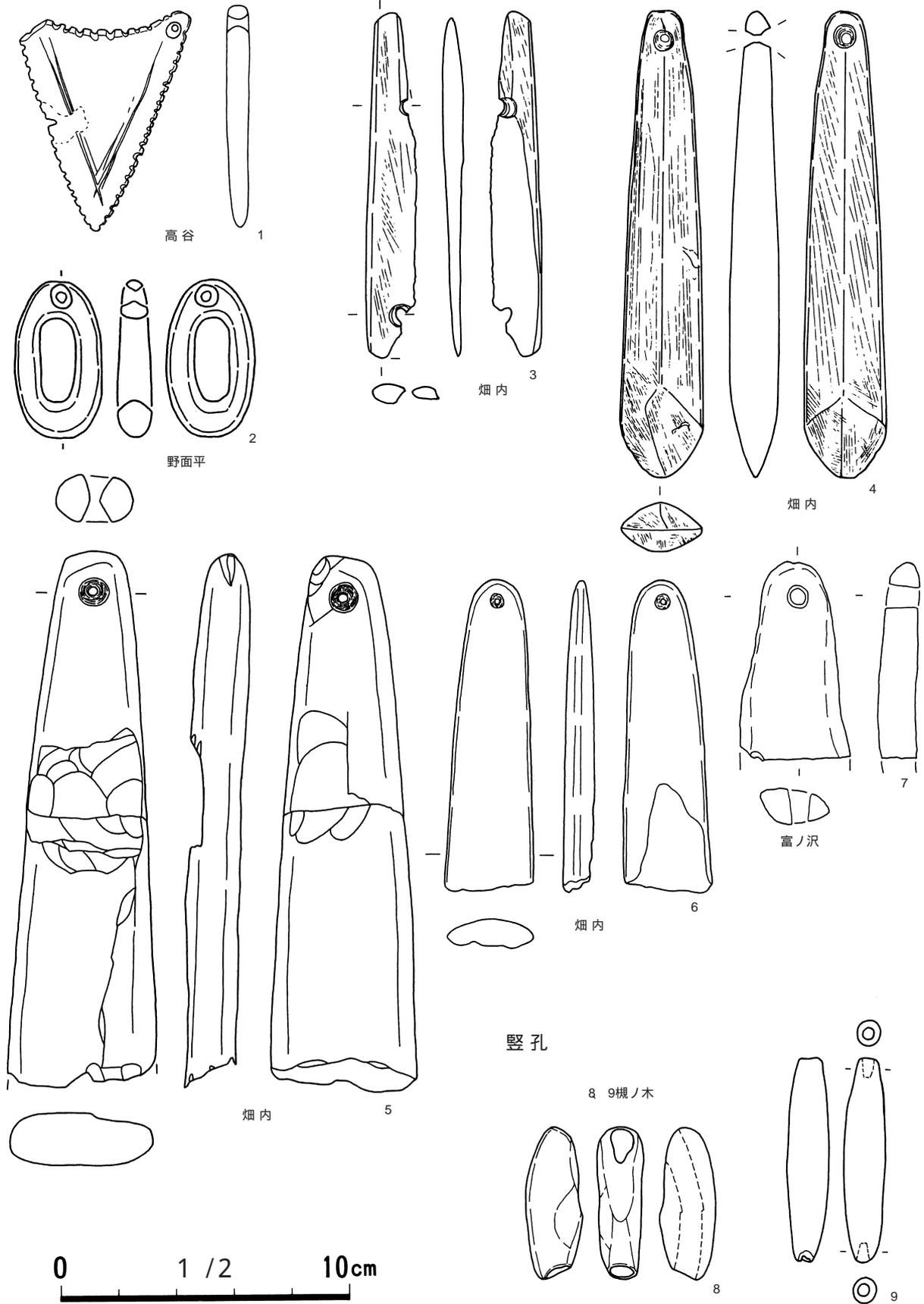
図版 13 (南部地域 9)



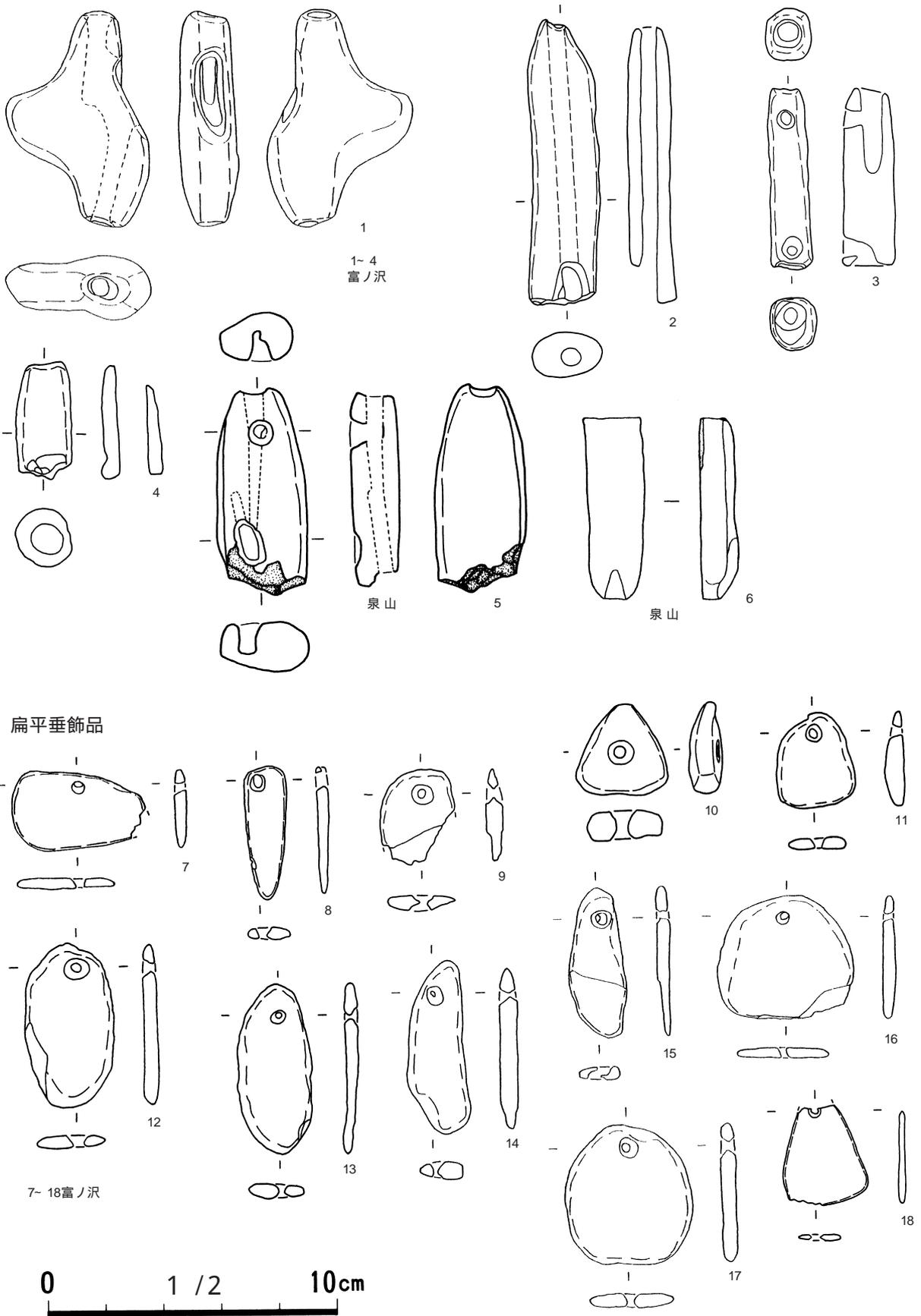
図版 14 (南部 10) 地域



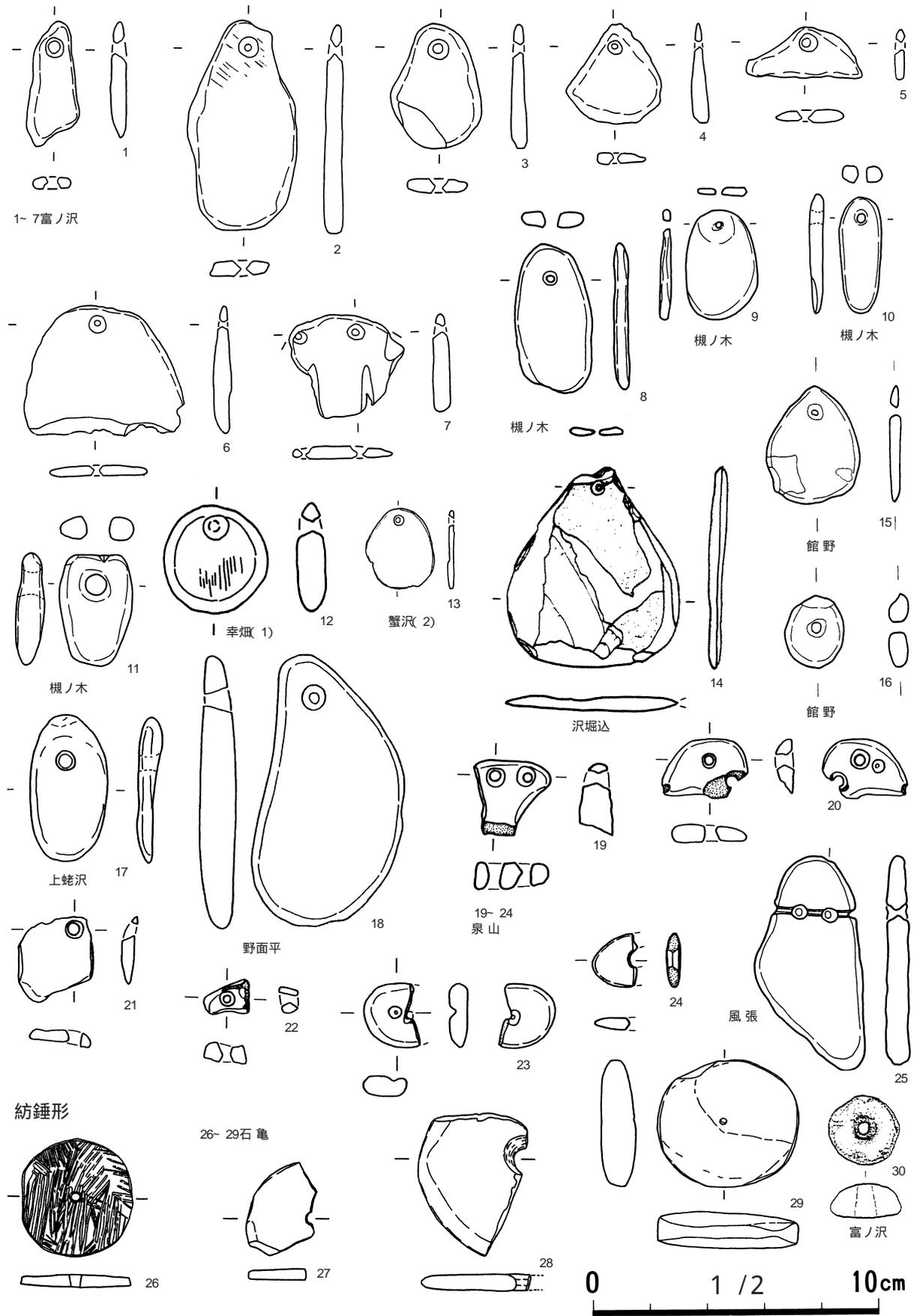
図版 15 (南部地域 11)



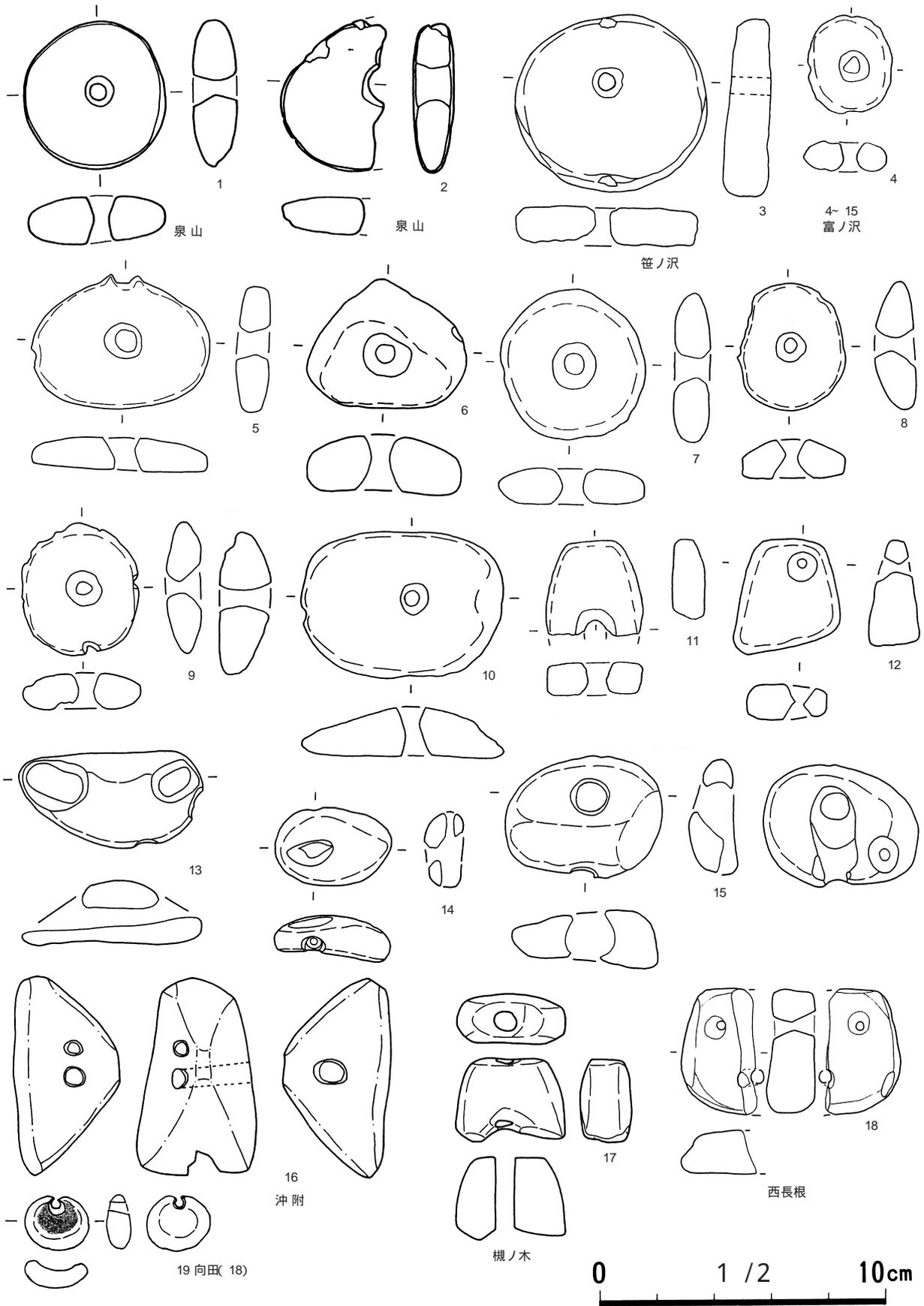
図版 16 (南部地域 12)



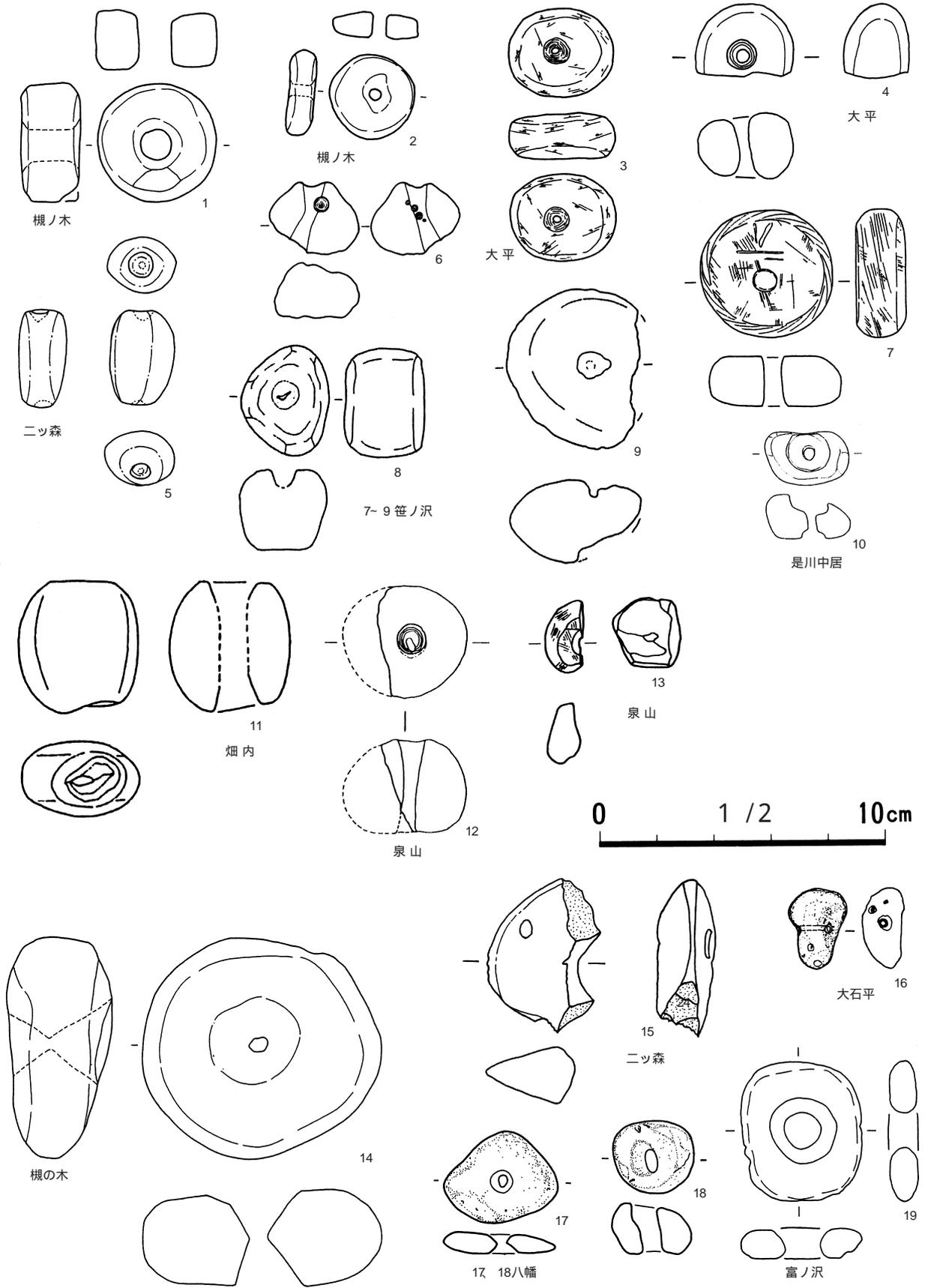
図版 17 (南部地域 13)



図版 18 (南部地域 14)

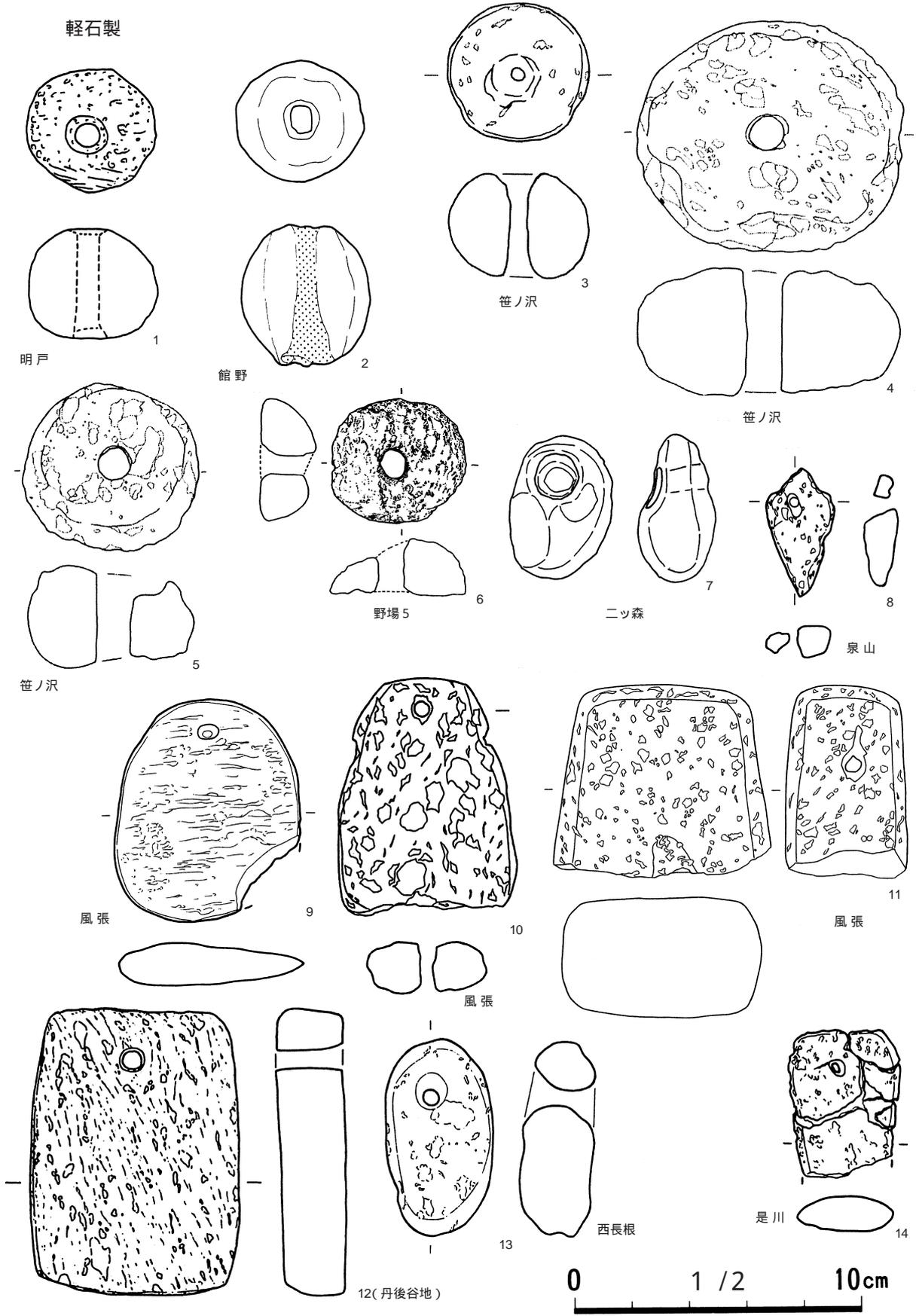


図版 19 (南部地域 15)



図版 20 (南部地域 16)

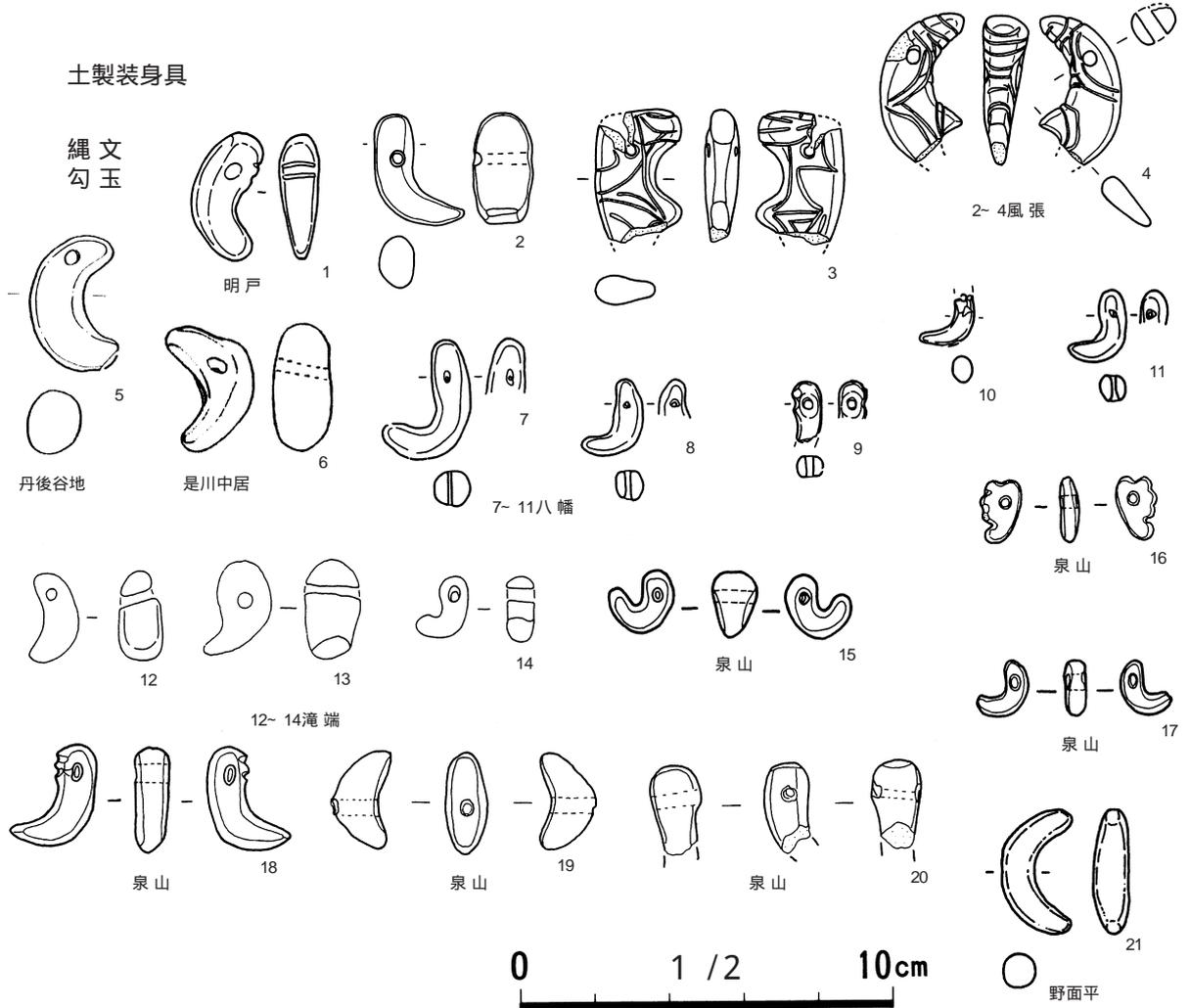
軽石製



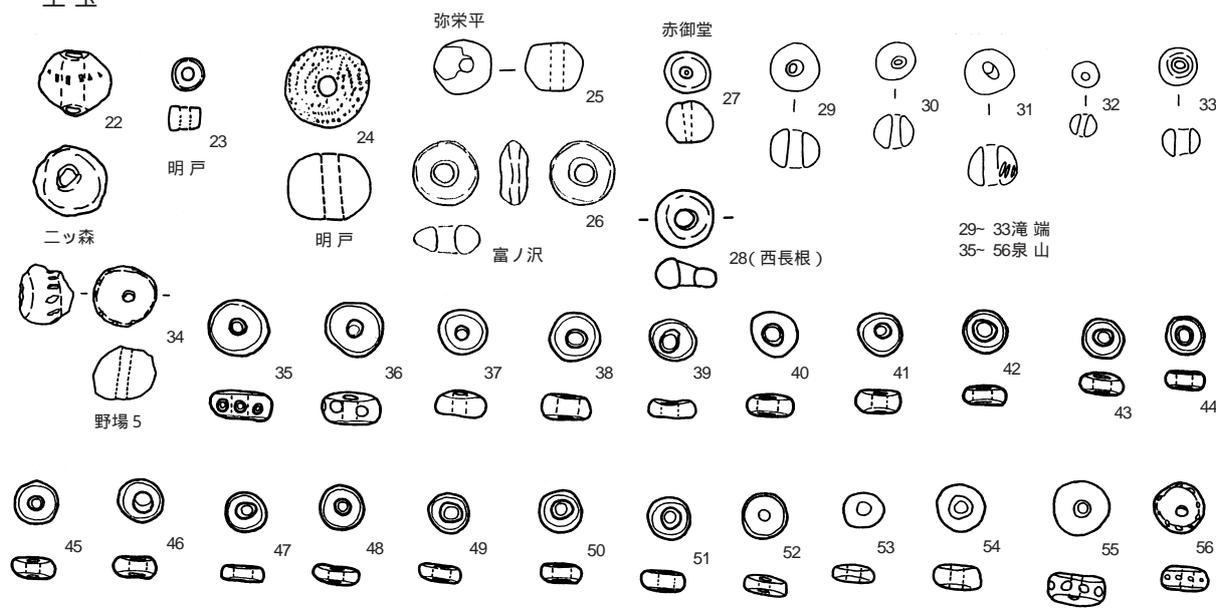
図版 21 (南部地域 17)

土製装身具

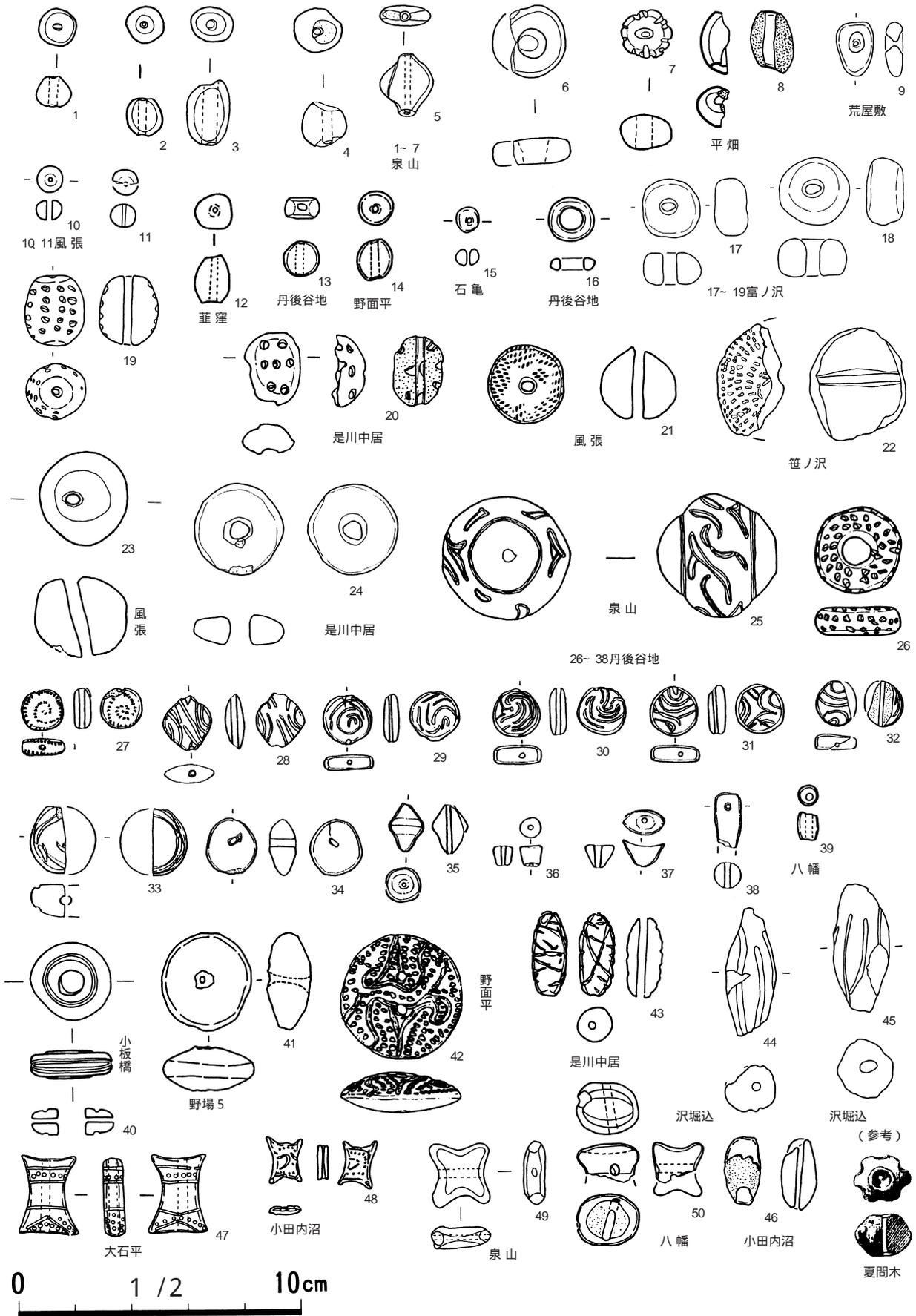
縄文
勾玉



土玉

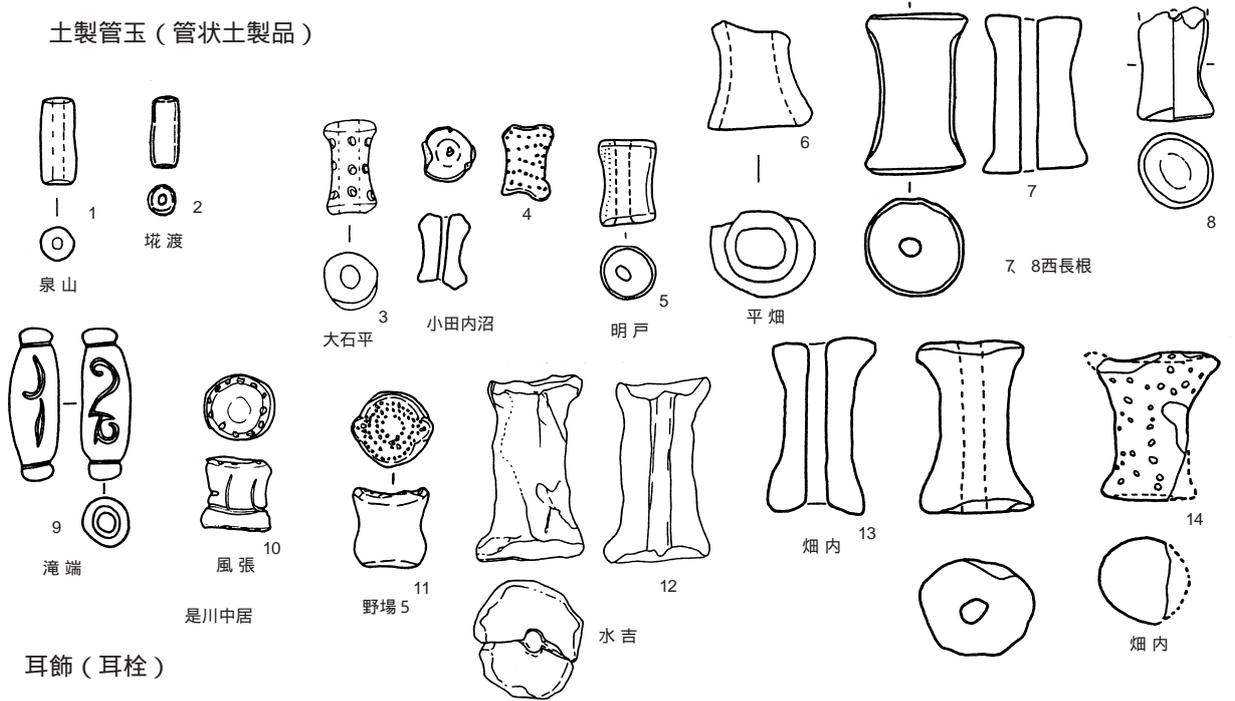


図版 22 (南部地域 18)

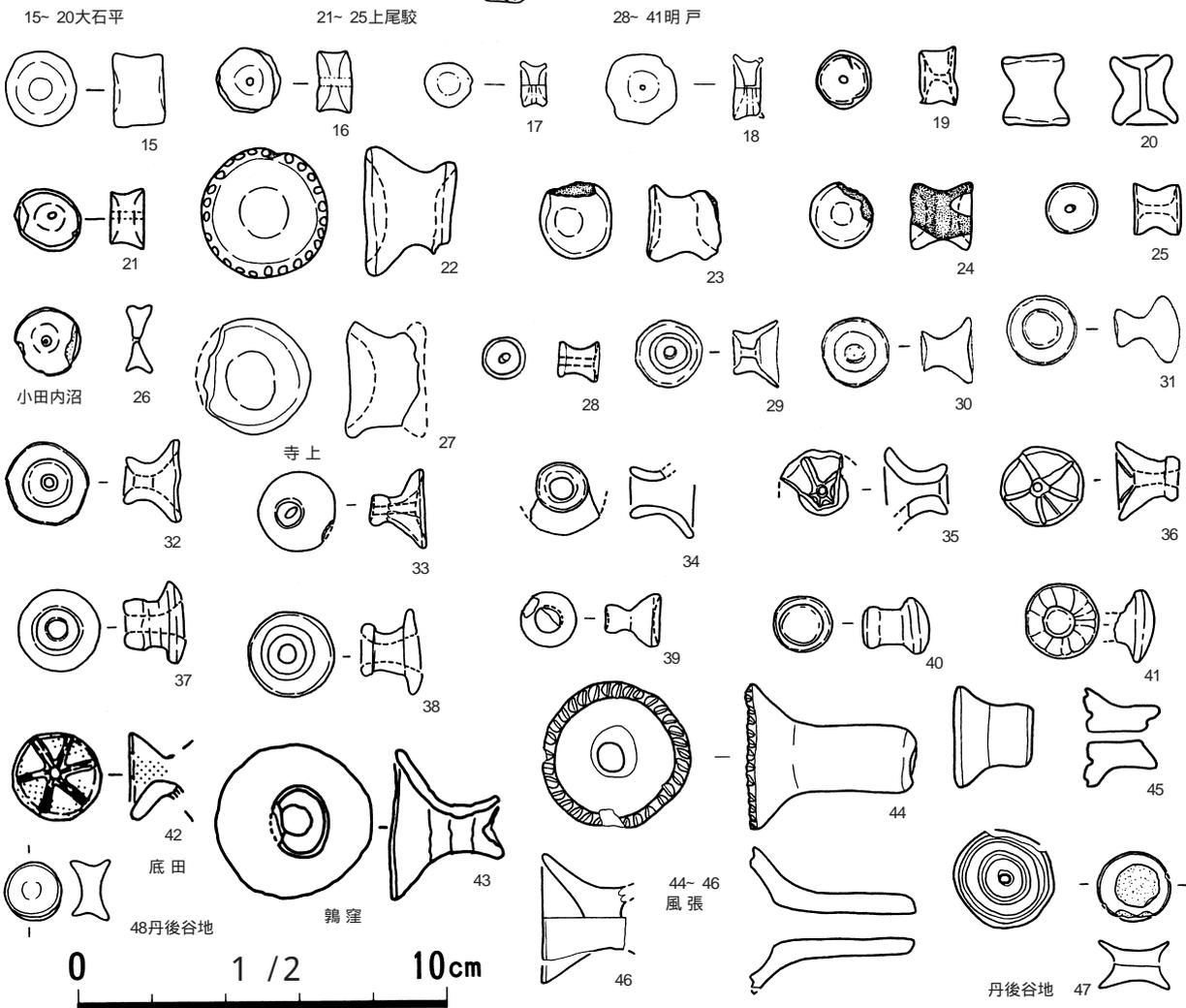


図版 23 (南部地域 18)

土製管玉（管状土製品）

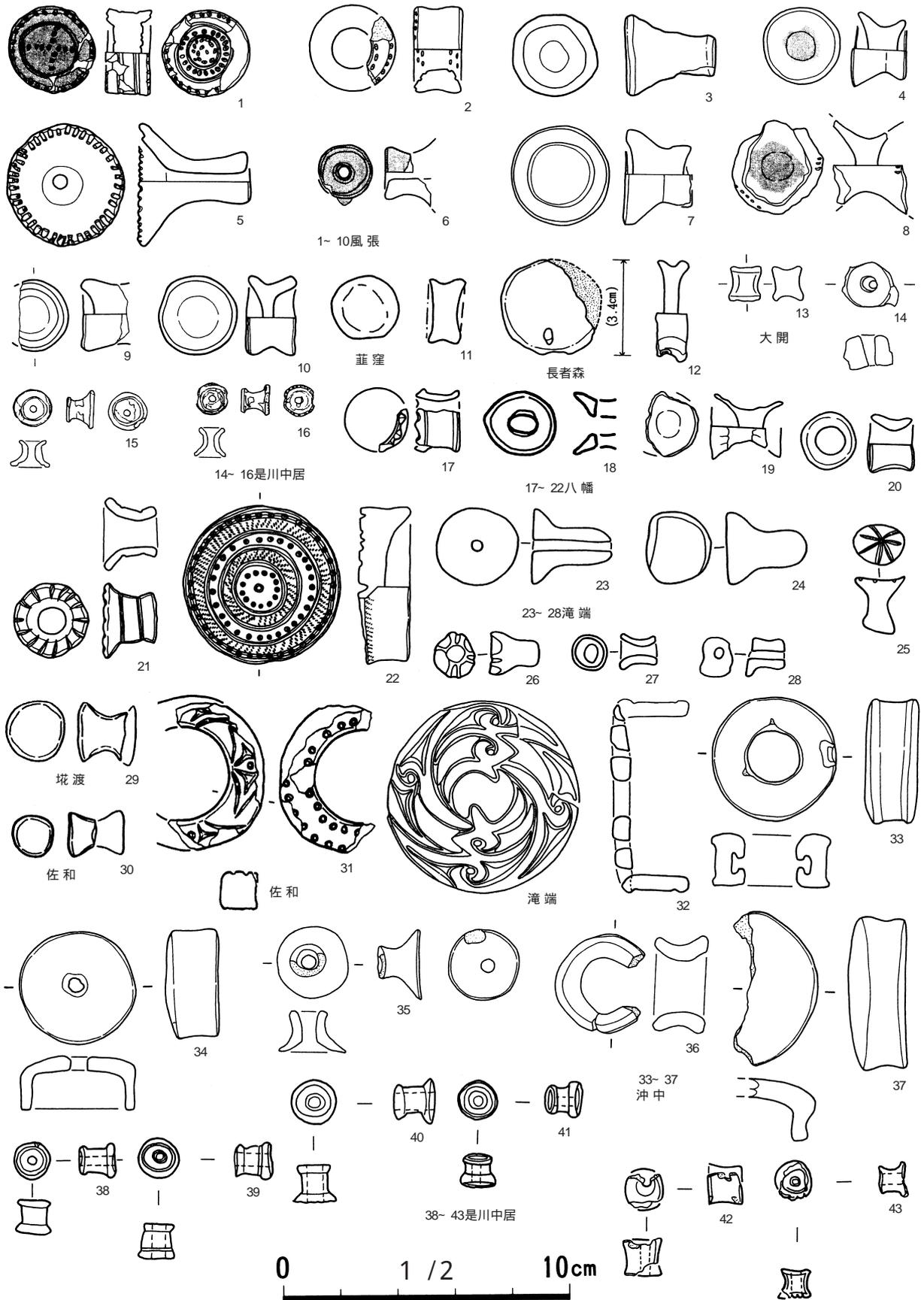


耳飾（耳栓）

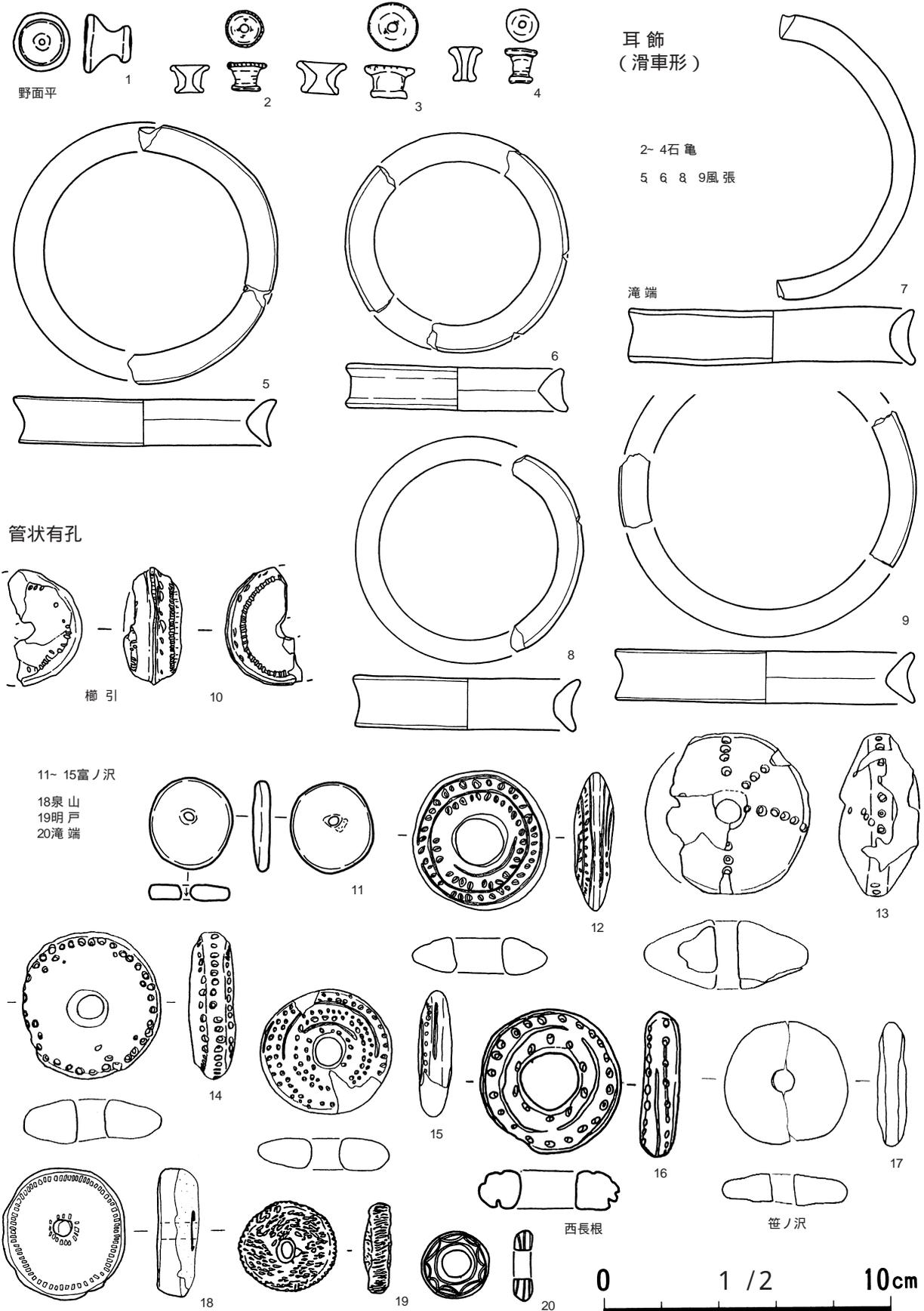


0 1 / 2 10cm

図版 24（南部地域 20）

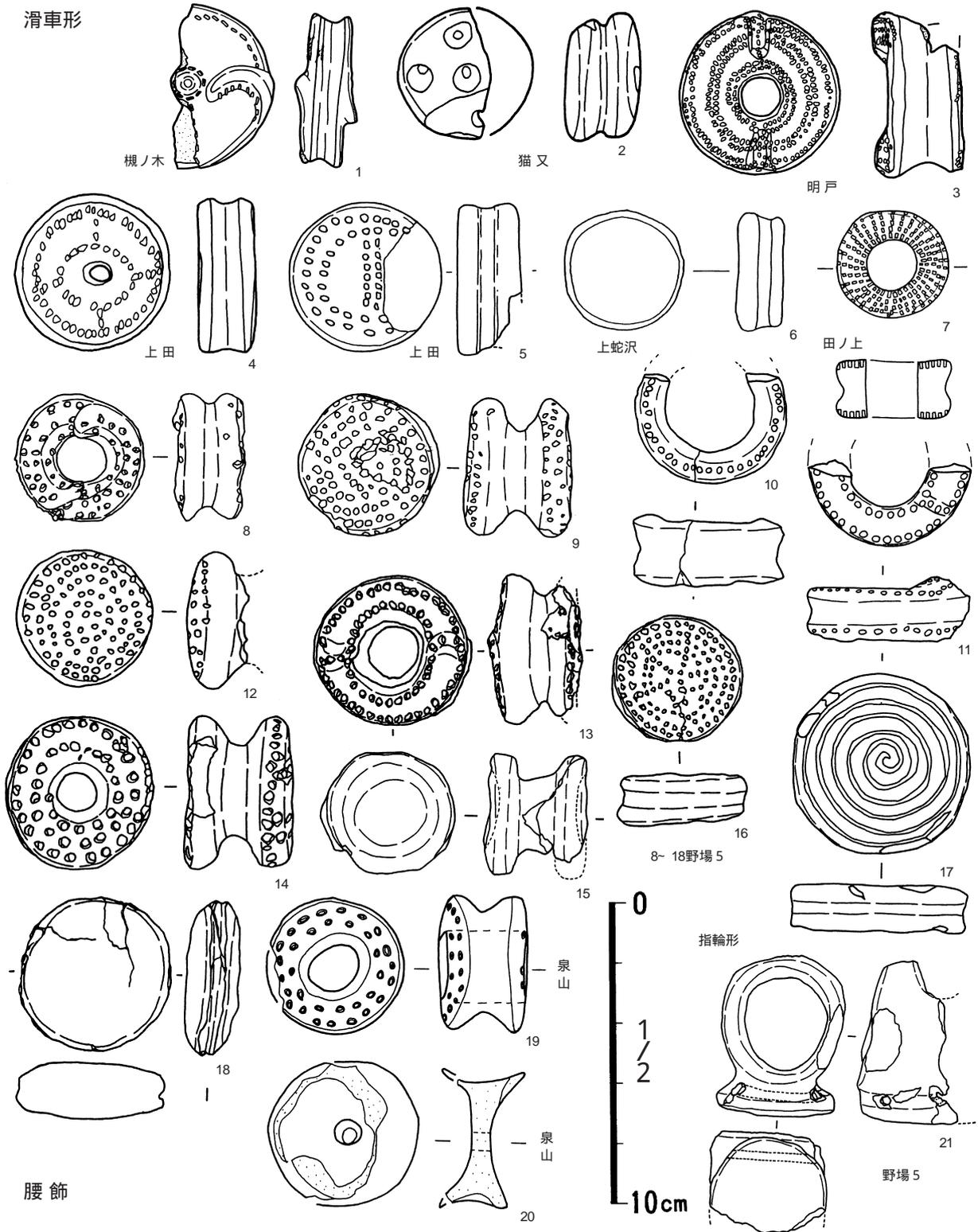


図版 25 (南部地域 21)

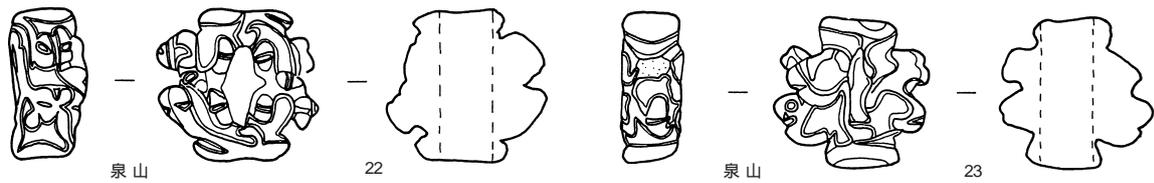


図版 26 (南部地域 22)

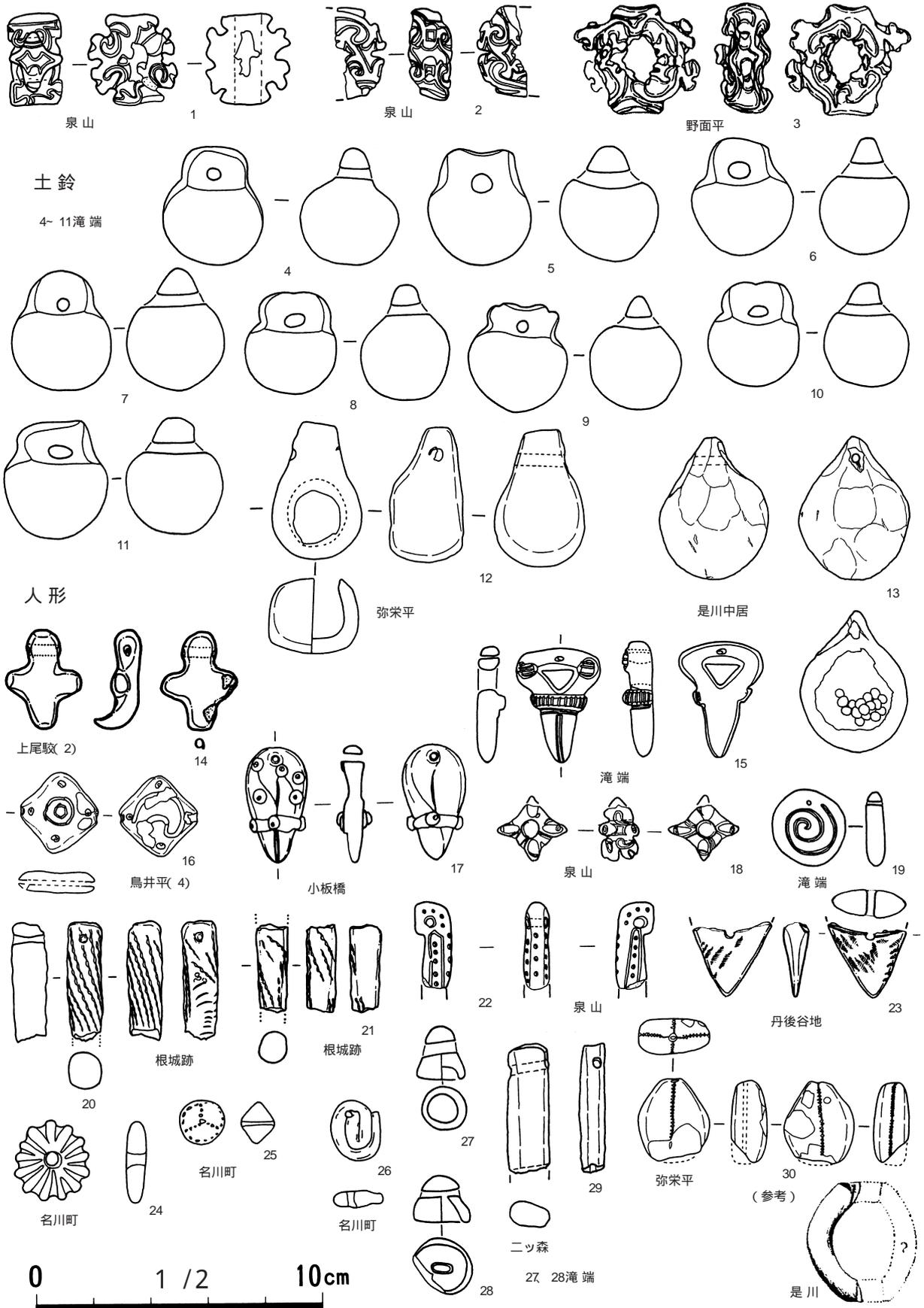
滑車形



腰飾



図版 27 (南部地域 23)

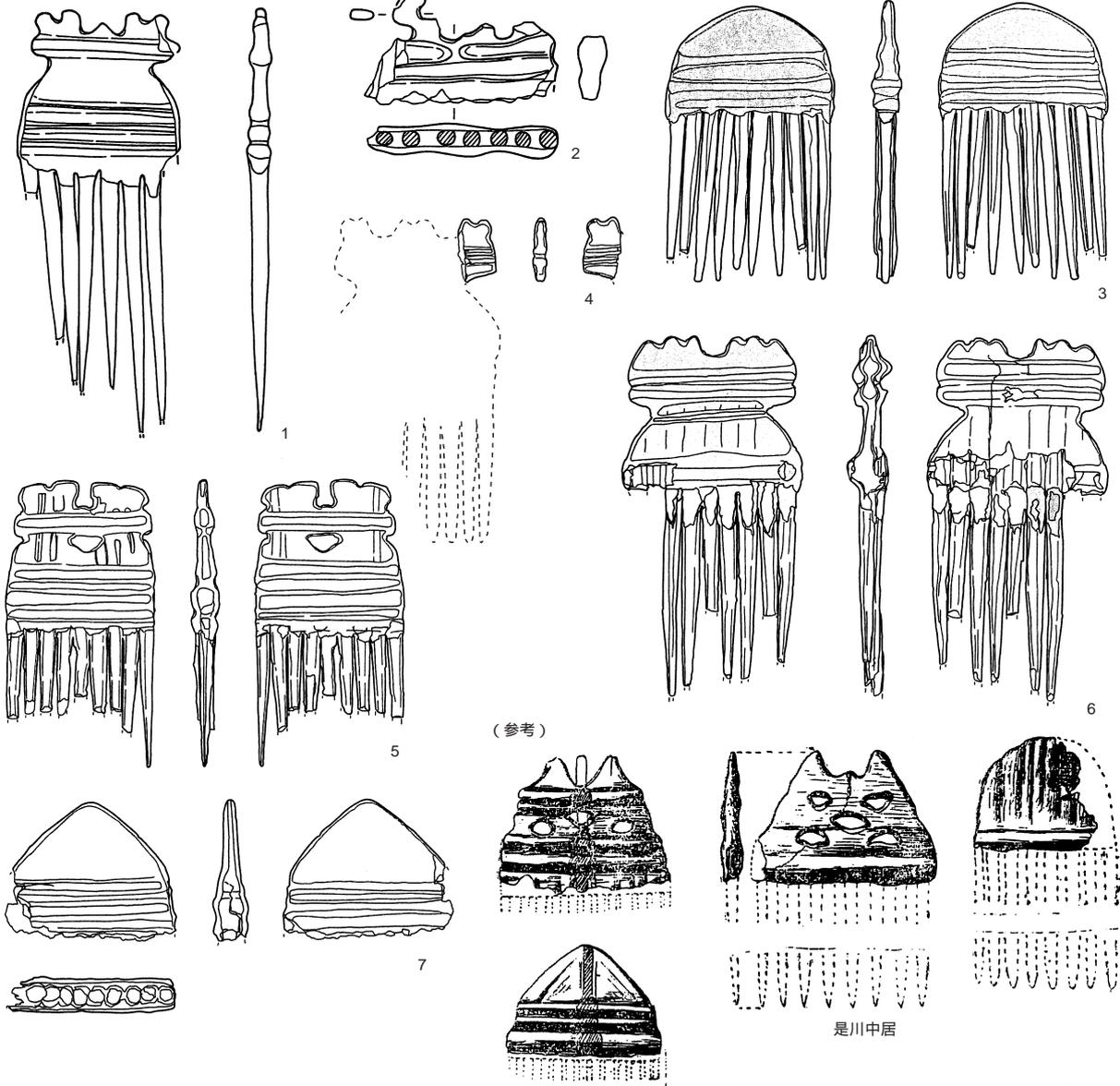


図版 28 (南部地域 24)

木製装身具

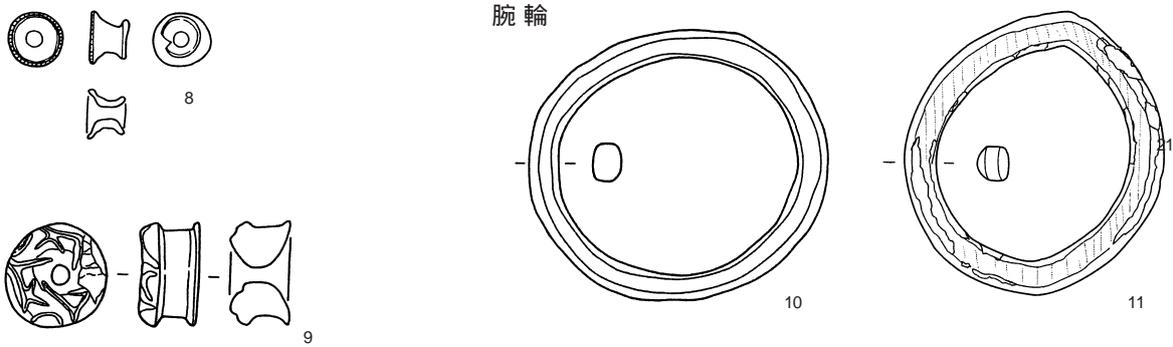
櫛

1- 11是川中居

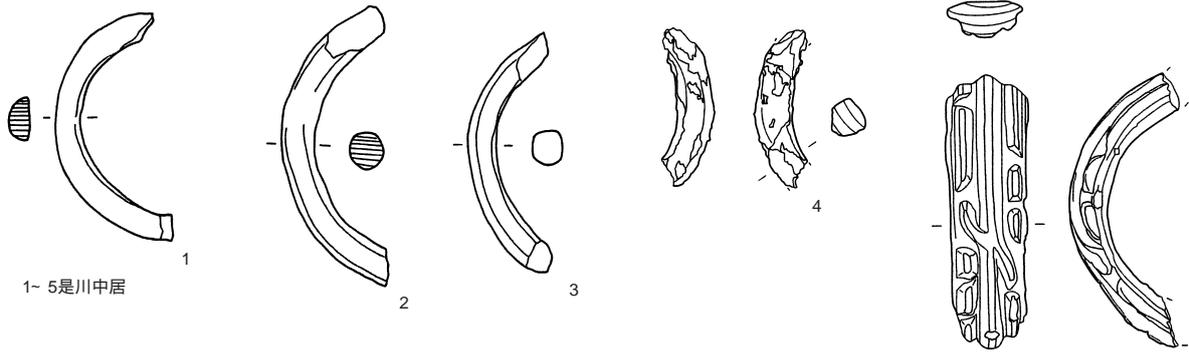


耳飾

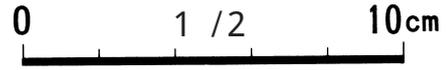
腕輪



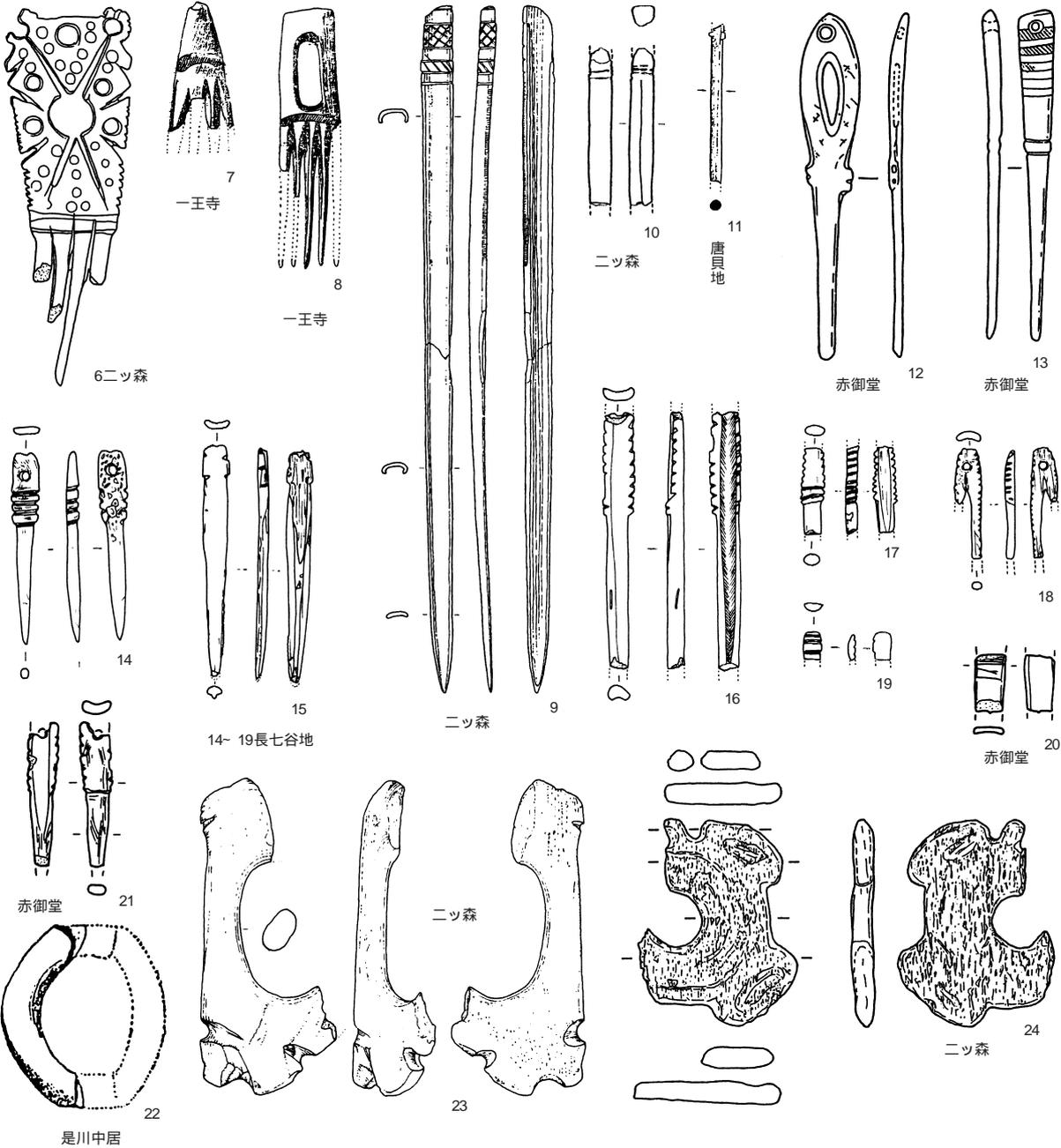
図版 29 (南部地域 25)



1- 5是川中居



骨角製装身具



一王寺

一王寺

6ニッ森

ニッ森

唐貝地

赤御堂

赤御堂

0

14

15

14- 19長七谷地

ニッ森

9

16

17

18

19

赤御堂

20

赤御堂

21

是川中居

22

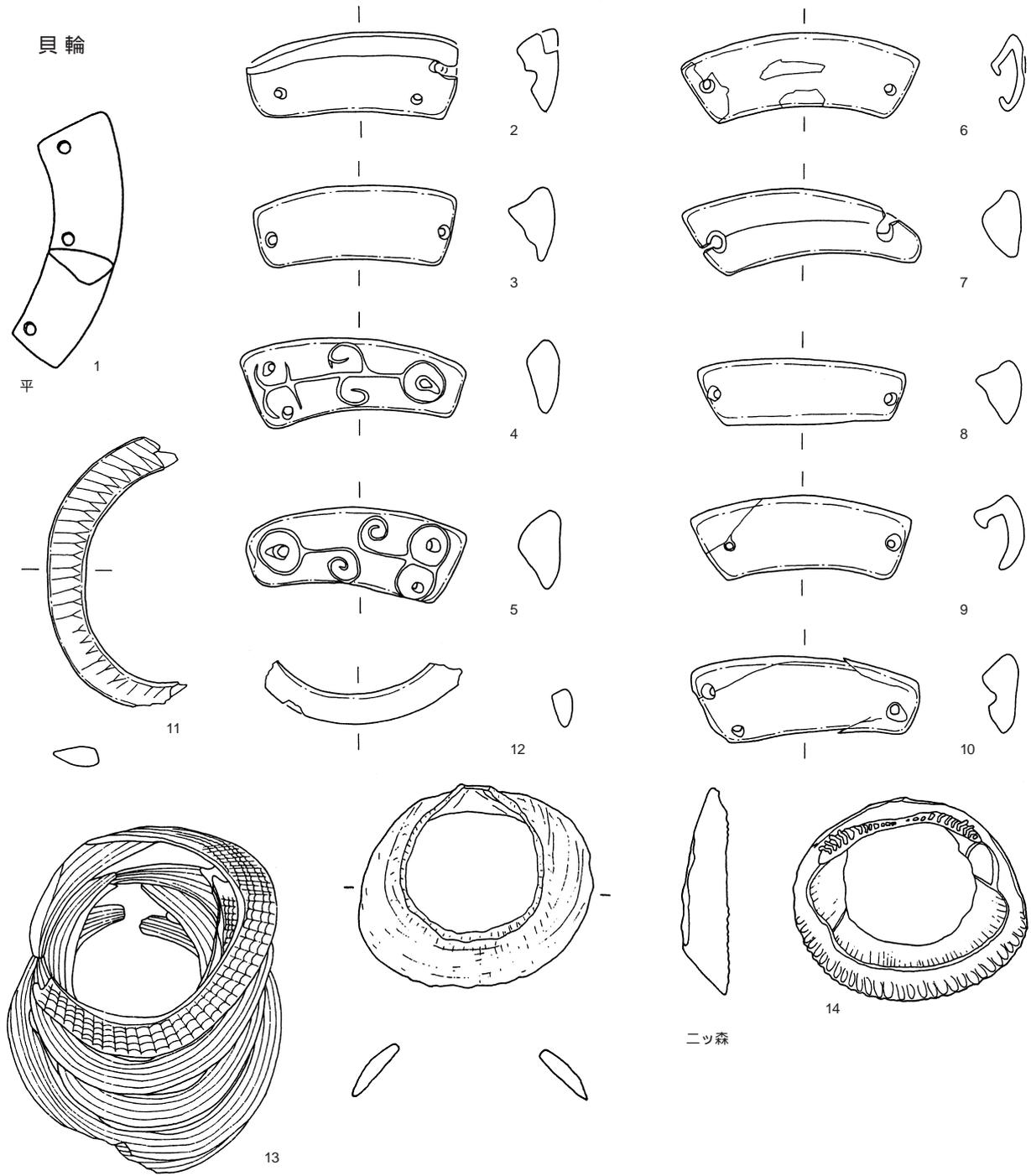
ニッ森

23

ニッ森

24

図版 30 (南部地域 26)



2- 13薬師前

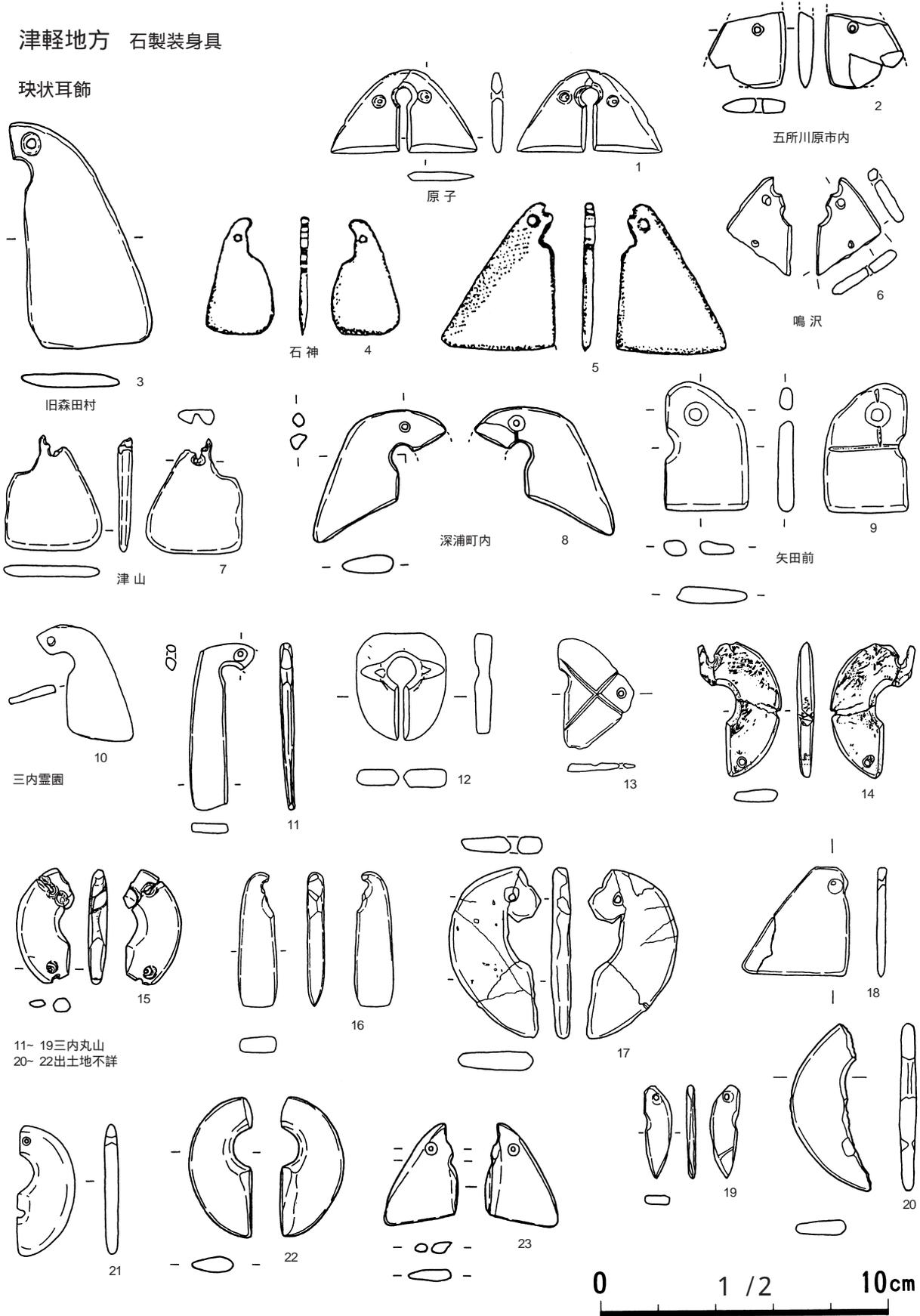
二ッ森



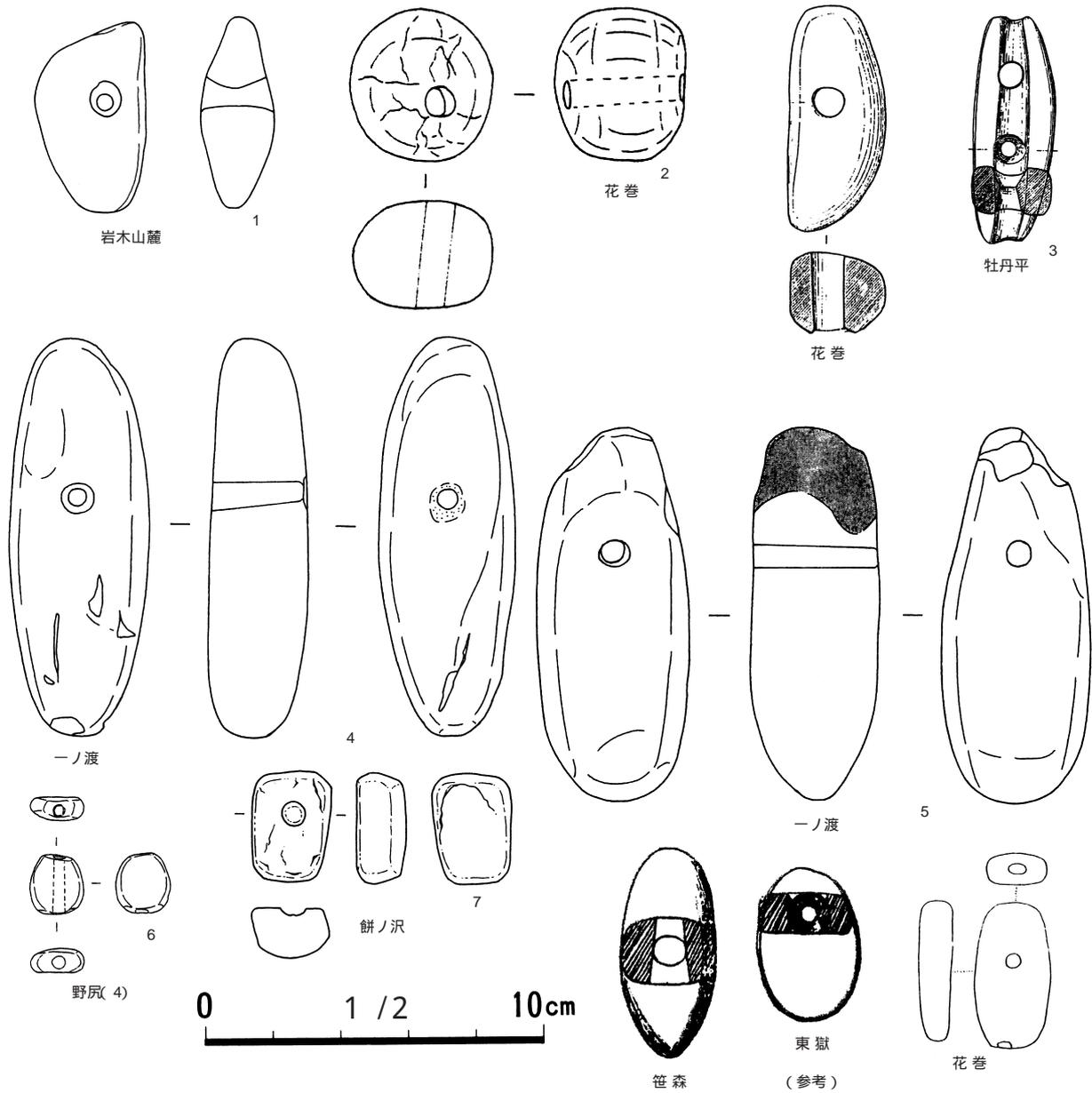
図版 32 (南部地域 28)

津軽地方 石製装身具

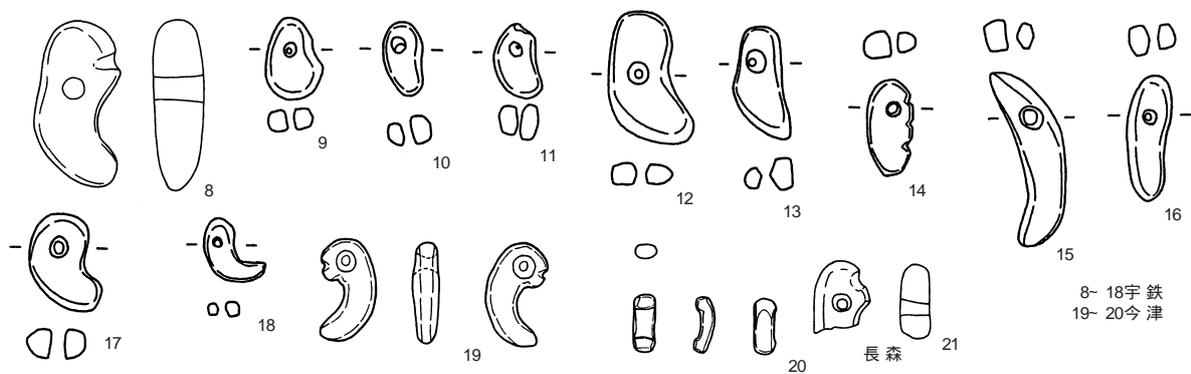
球状耳飾



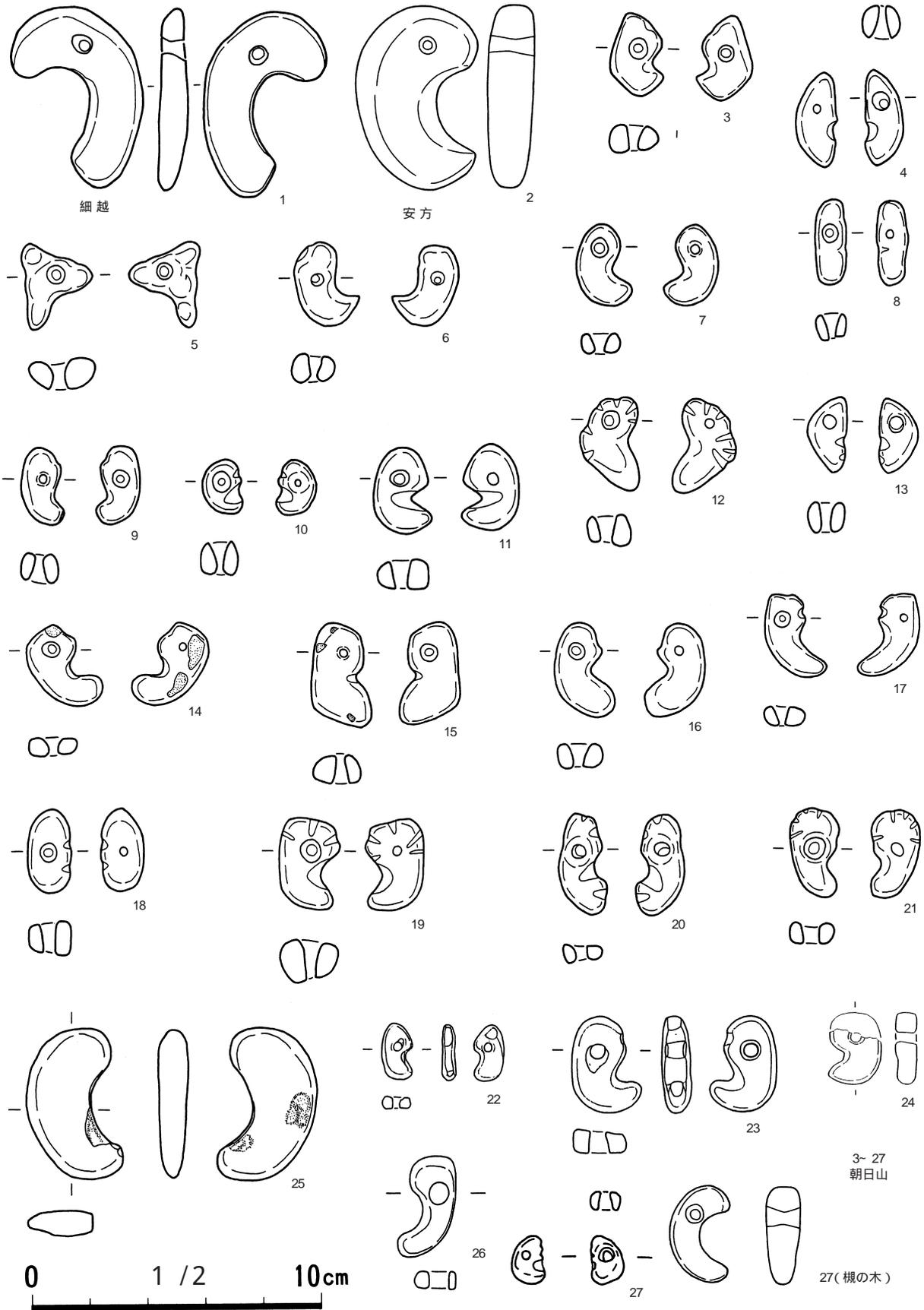
図版 33 (津軽地域 1)



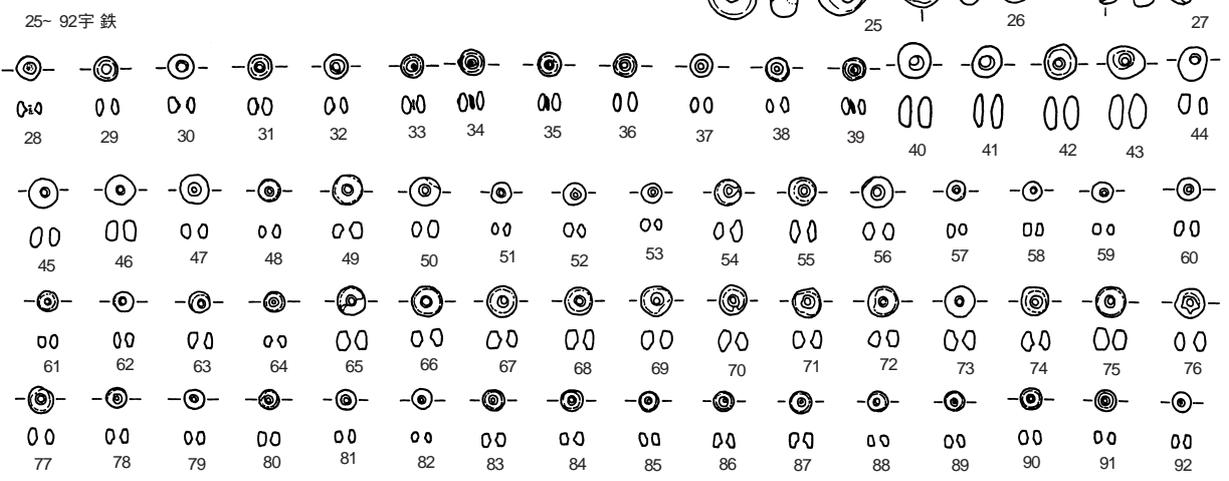
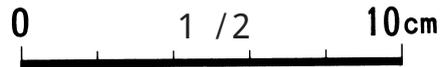
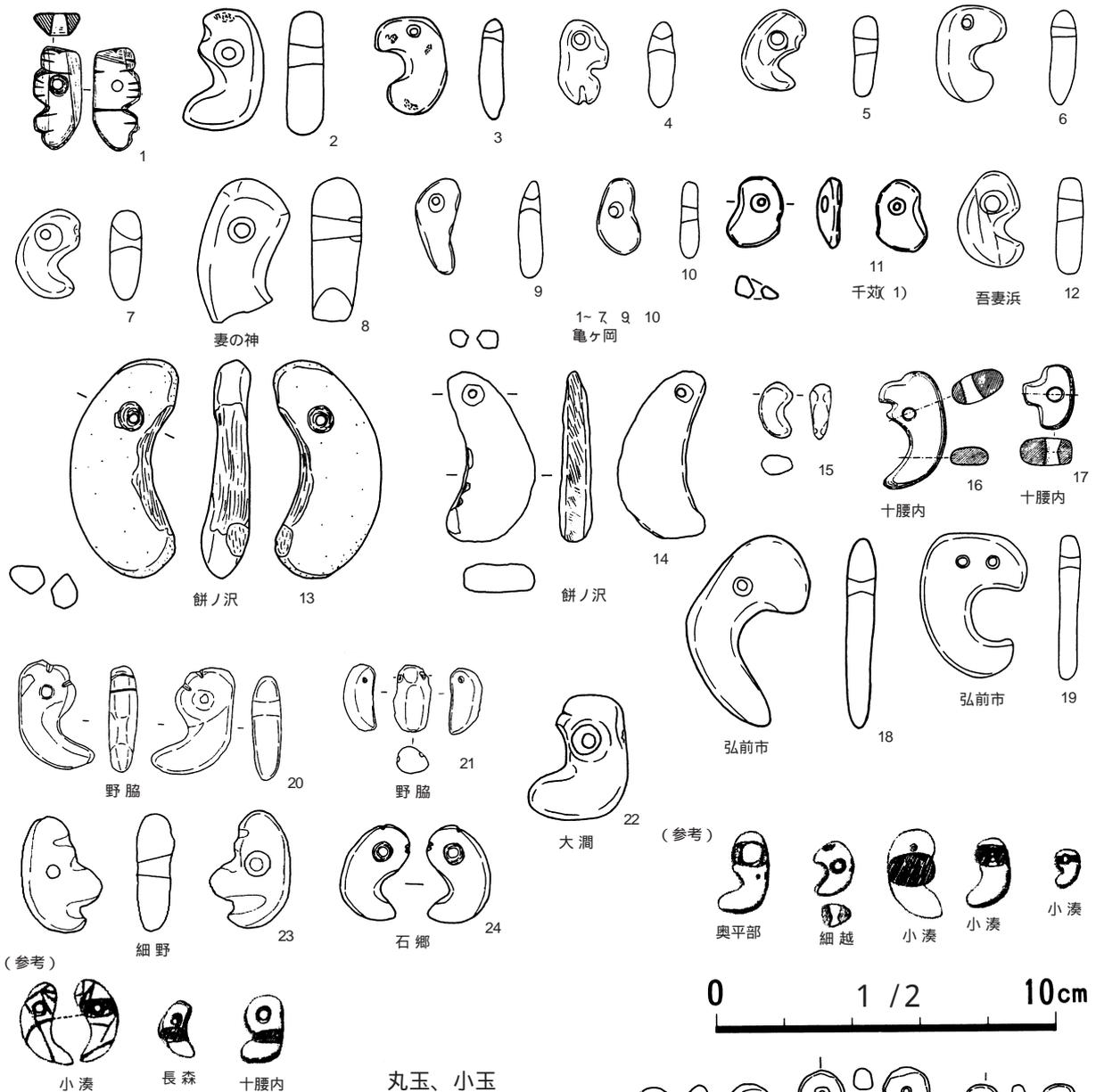
縄文勾玉



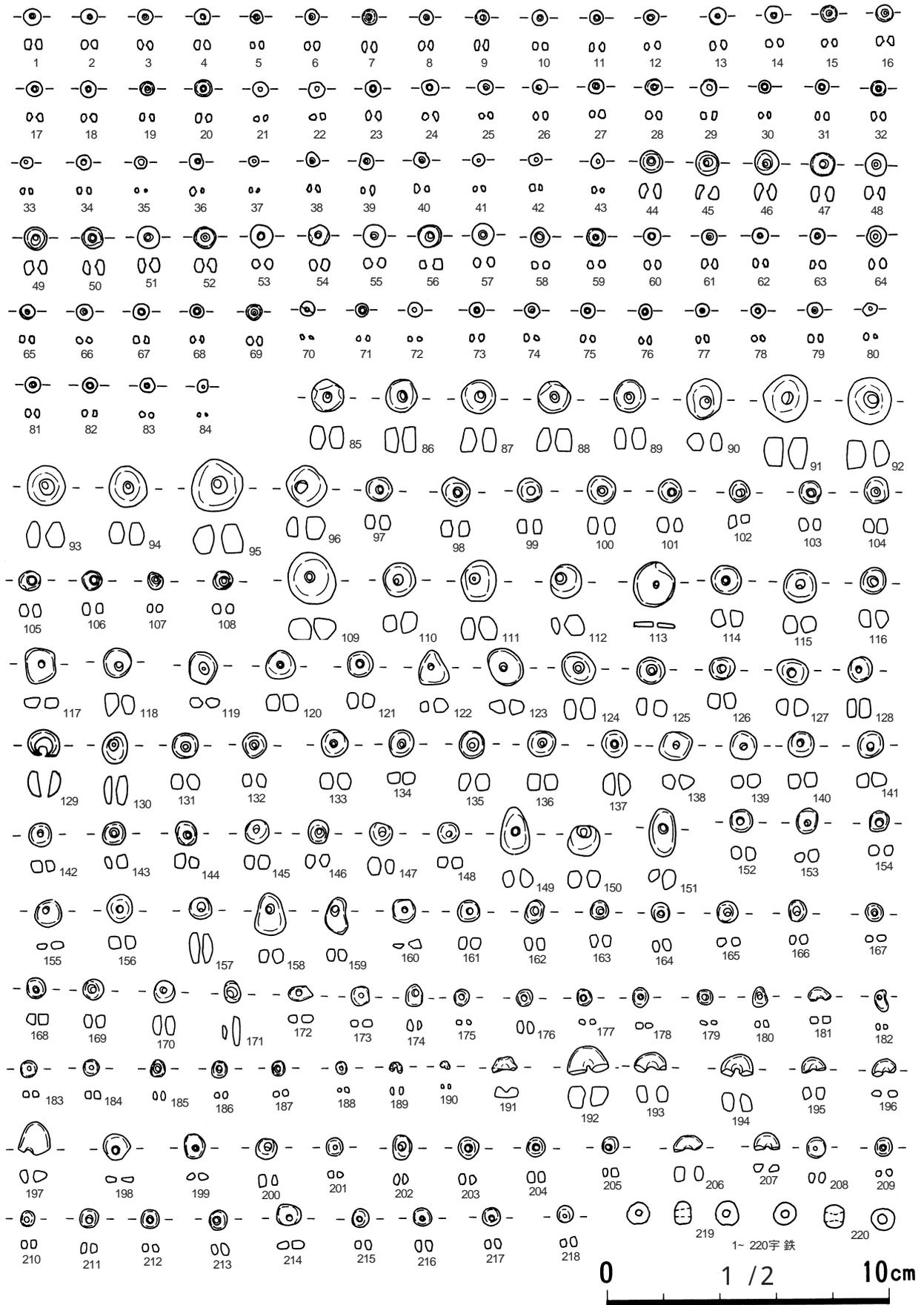
図版 35 (津軽地域 3)



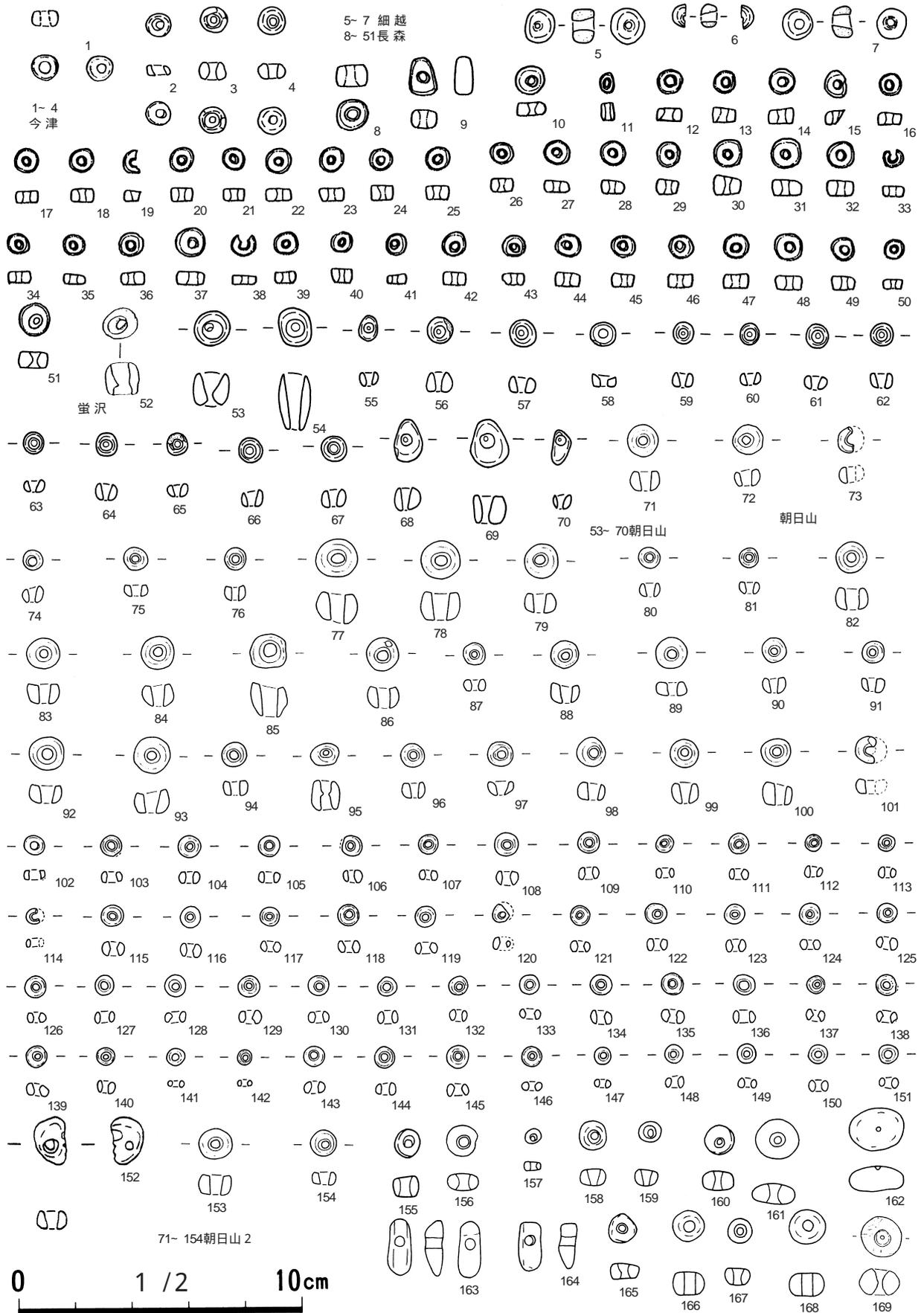
図版 36 (津軽地域 4)



図版 37 (津軽地域 5)

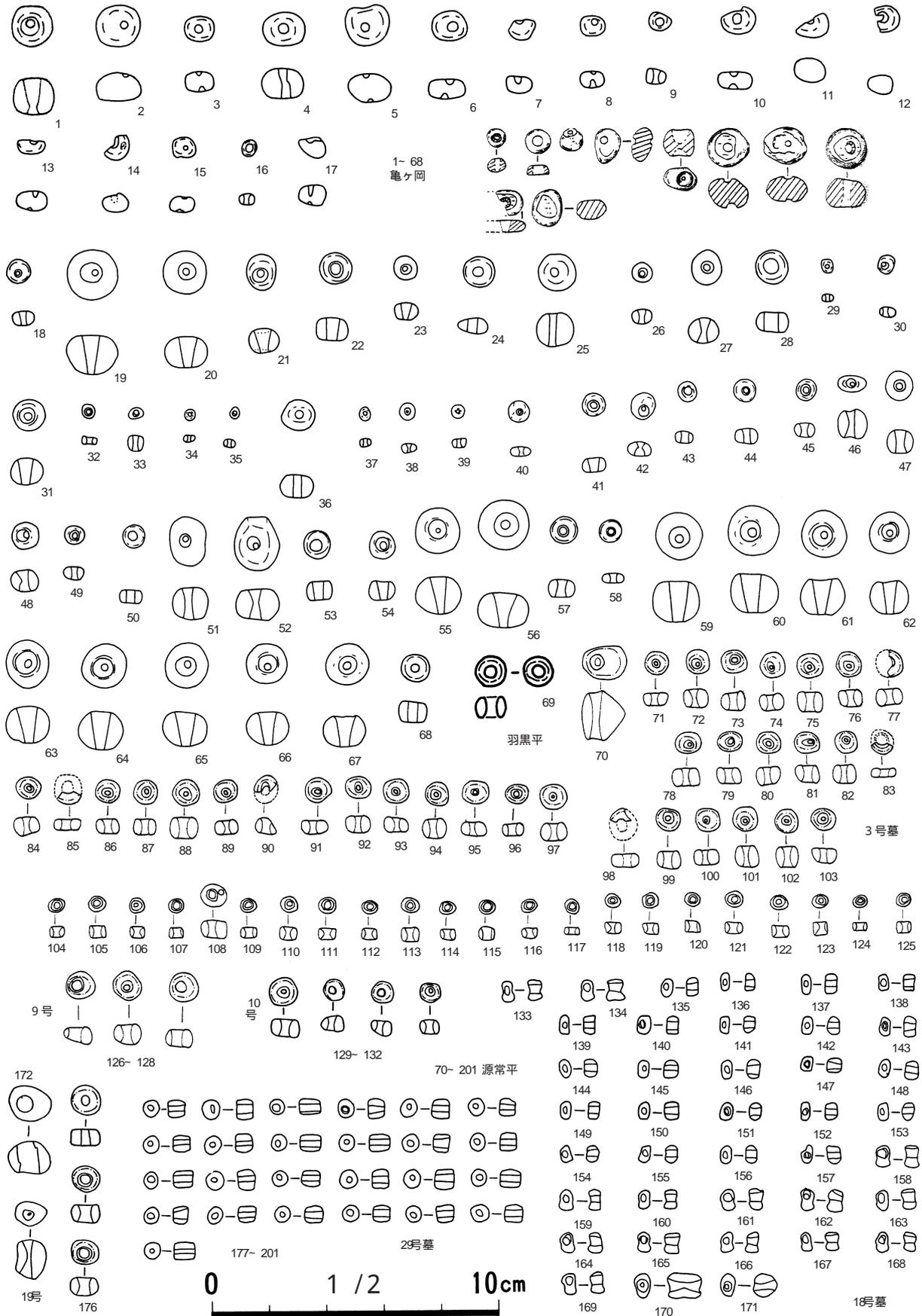


図版 38 (津軽地域 6)

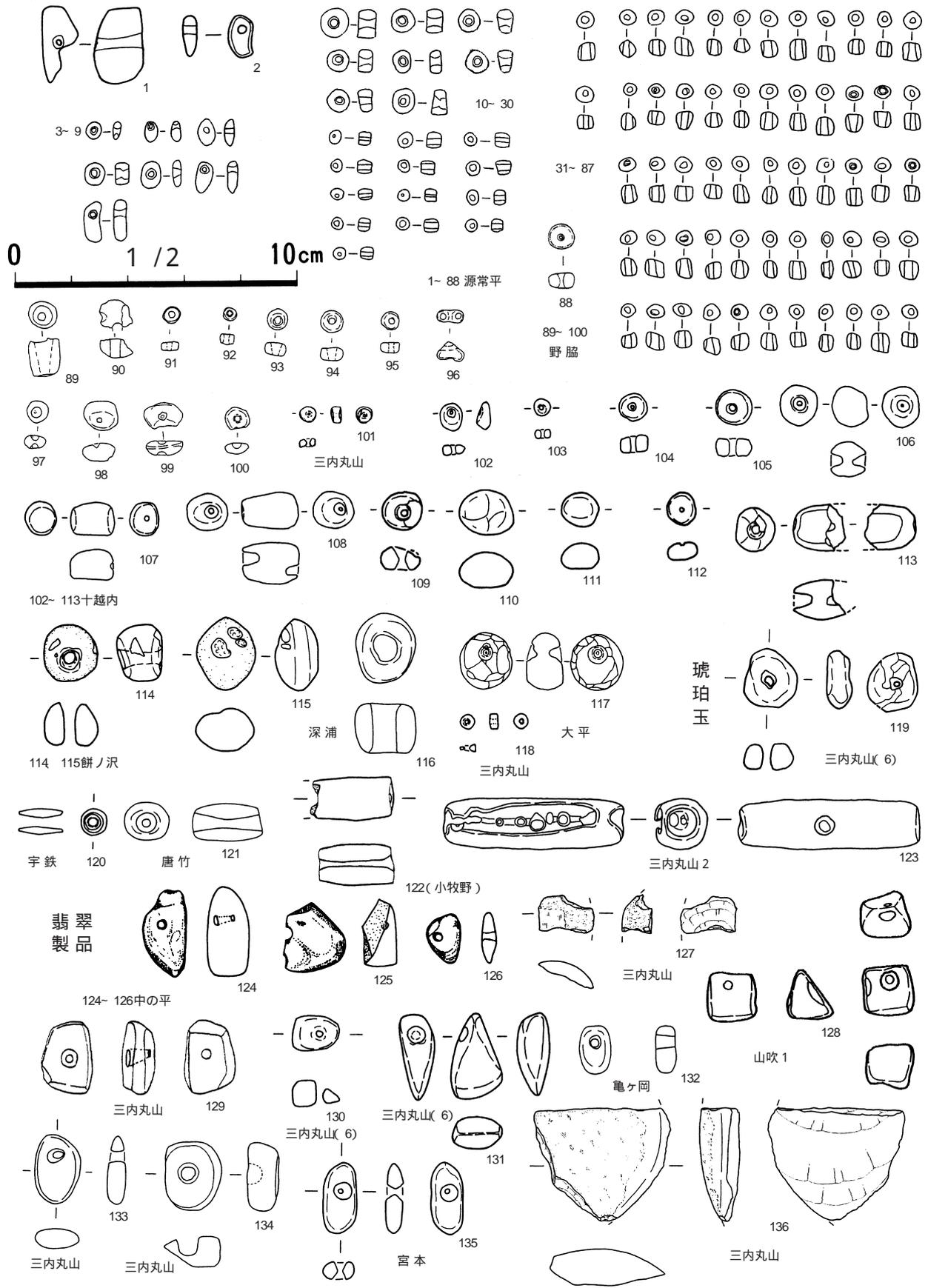


図版 39 (津軽地域 7)

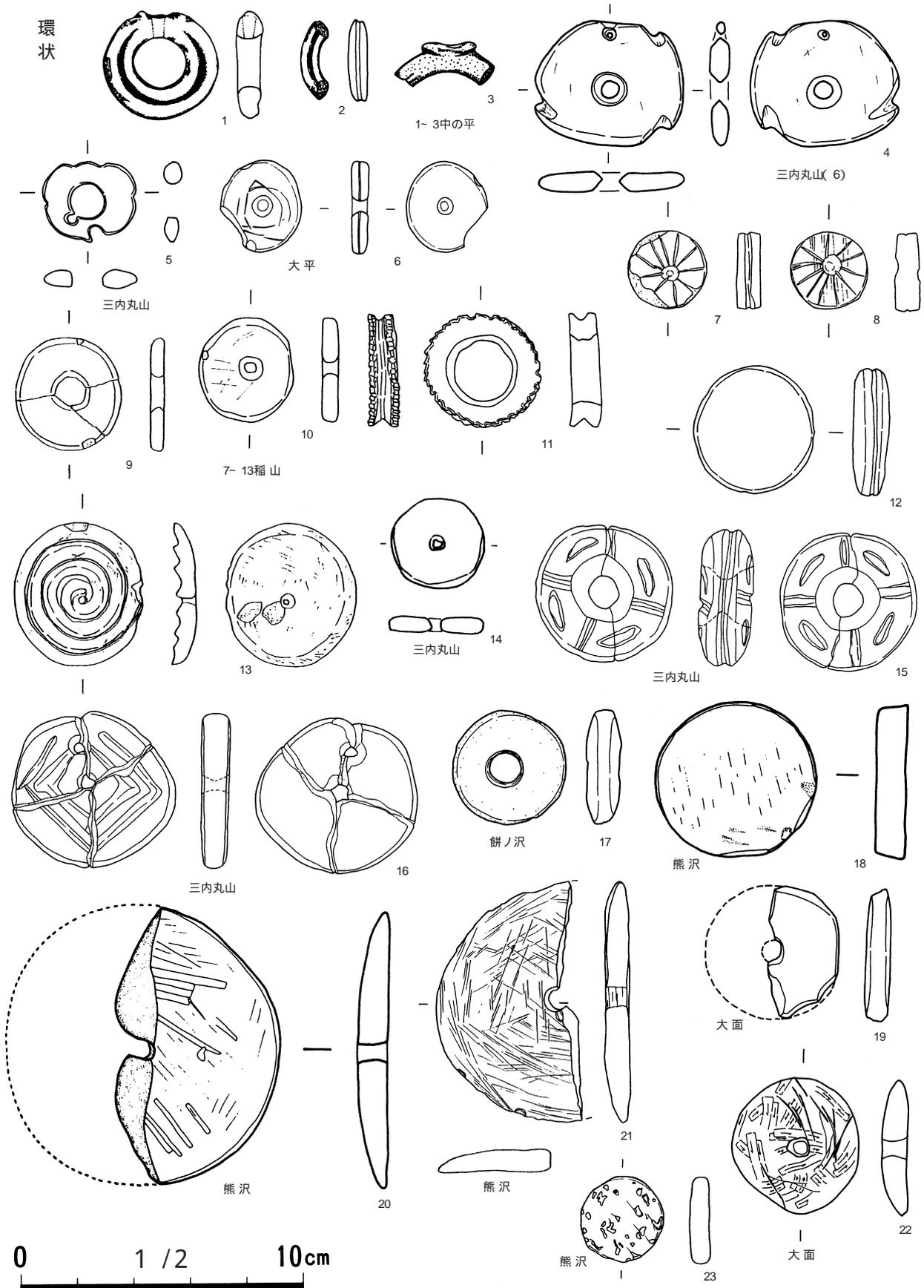
155-162 玉清水
163-167 槇の木
168 瀬辺地
169 野木



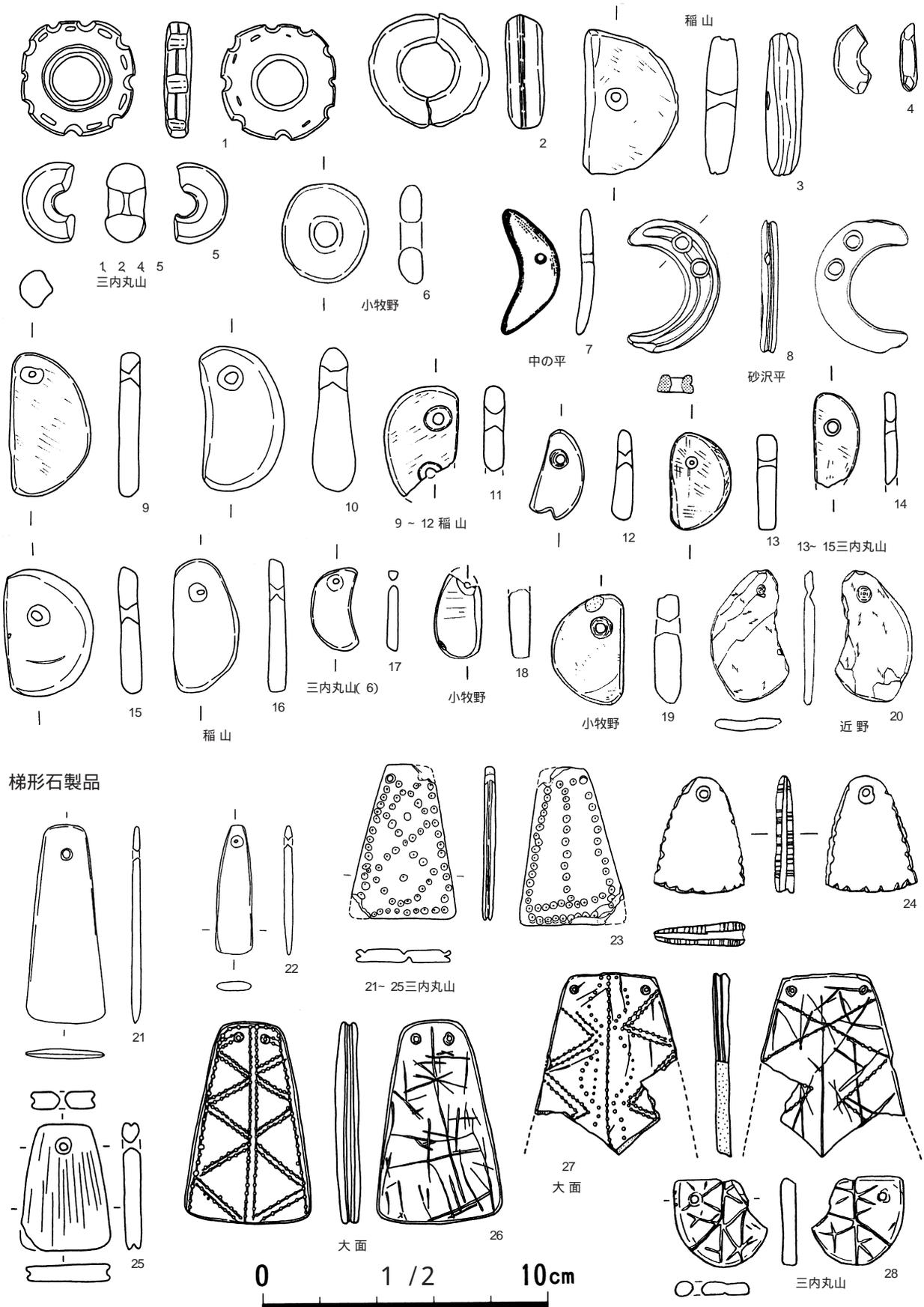
図版 40 (津軽地域 8)



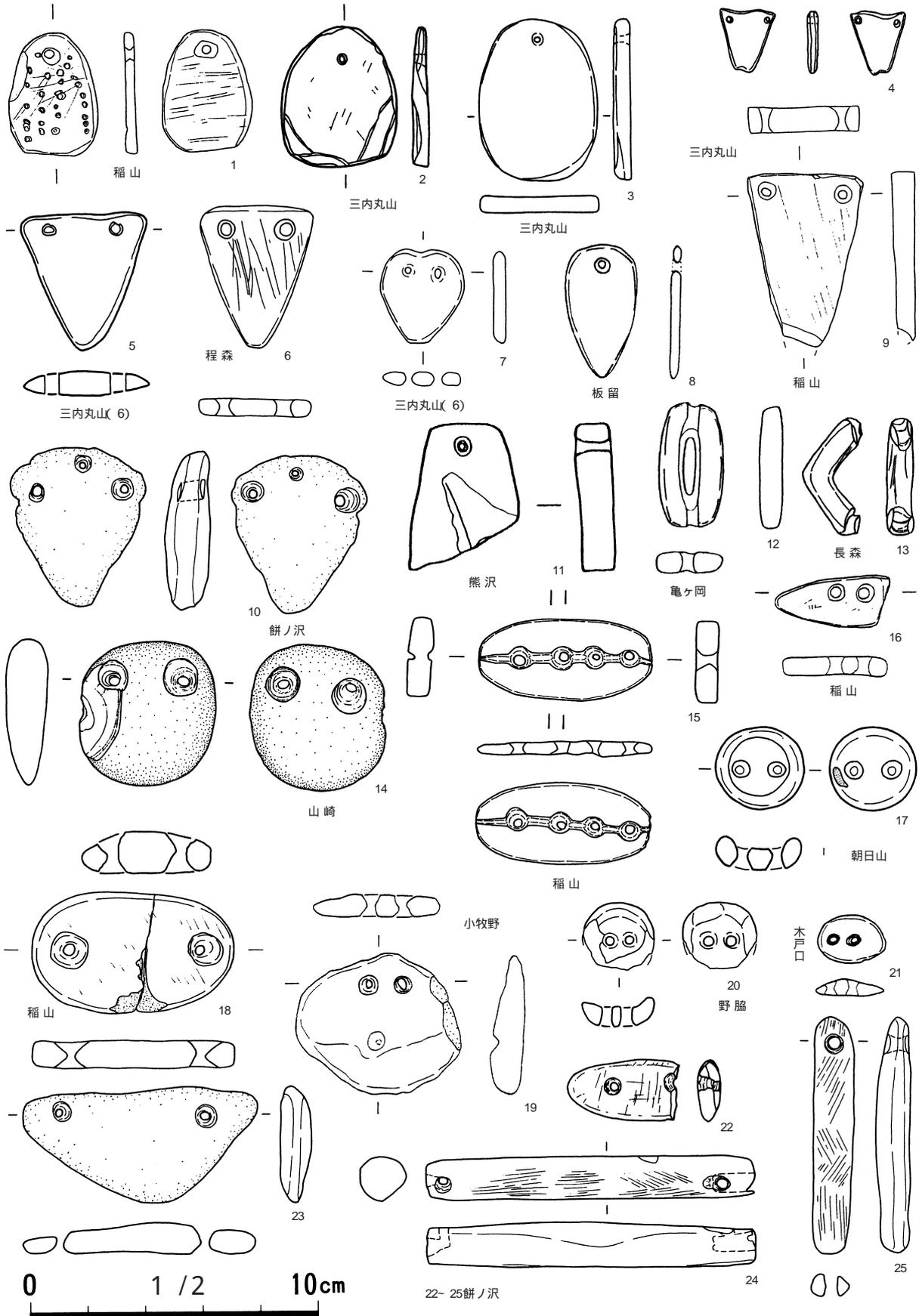
図版 41 (津軽地域 9)



図版 42 (津軽地域 10)



図版 43 (津軽地域 11)

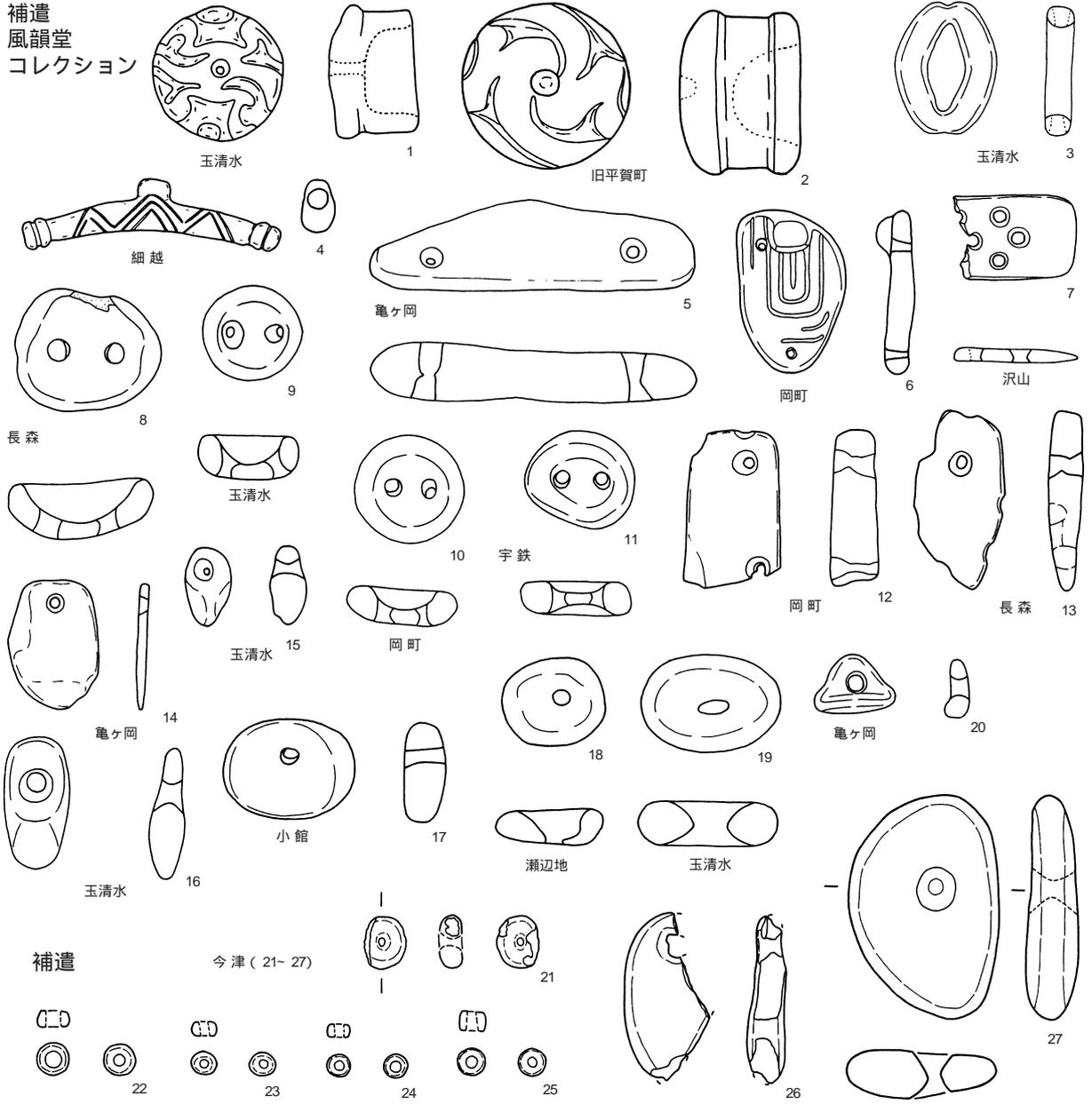


図版 44 (津軽地域 12)



図版 45 (津軽地域 13)

補遣
風韻堂
コレクション



補遣

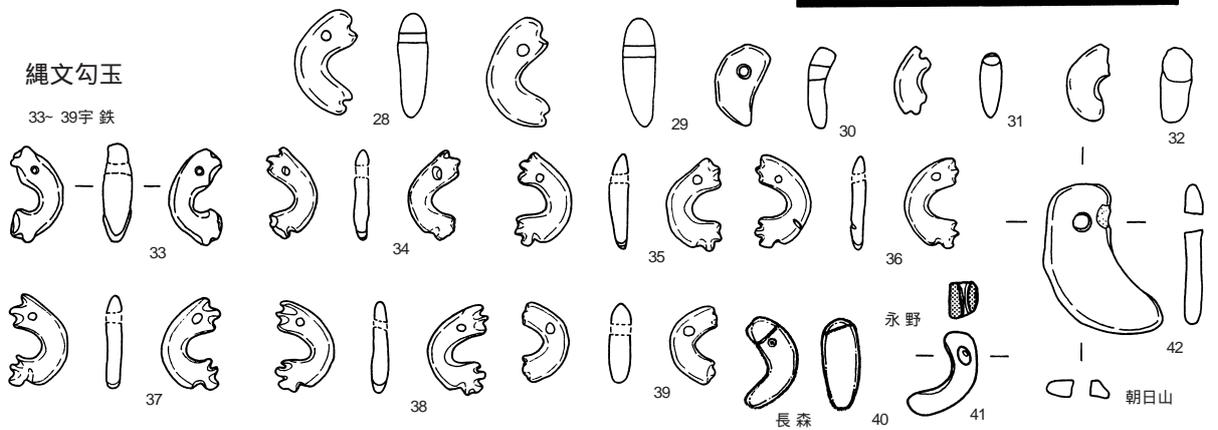
今津 (21-27)

土製装身具

28-32 亀ヶ岡 (風韻堂)

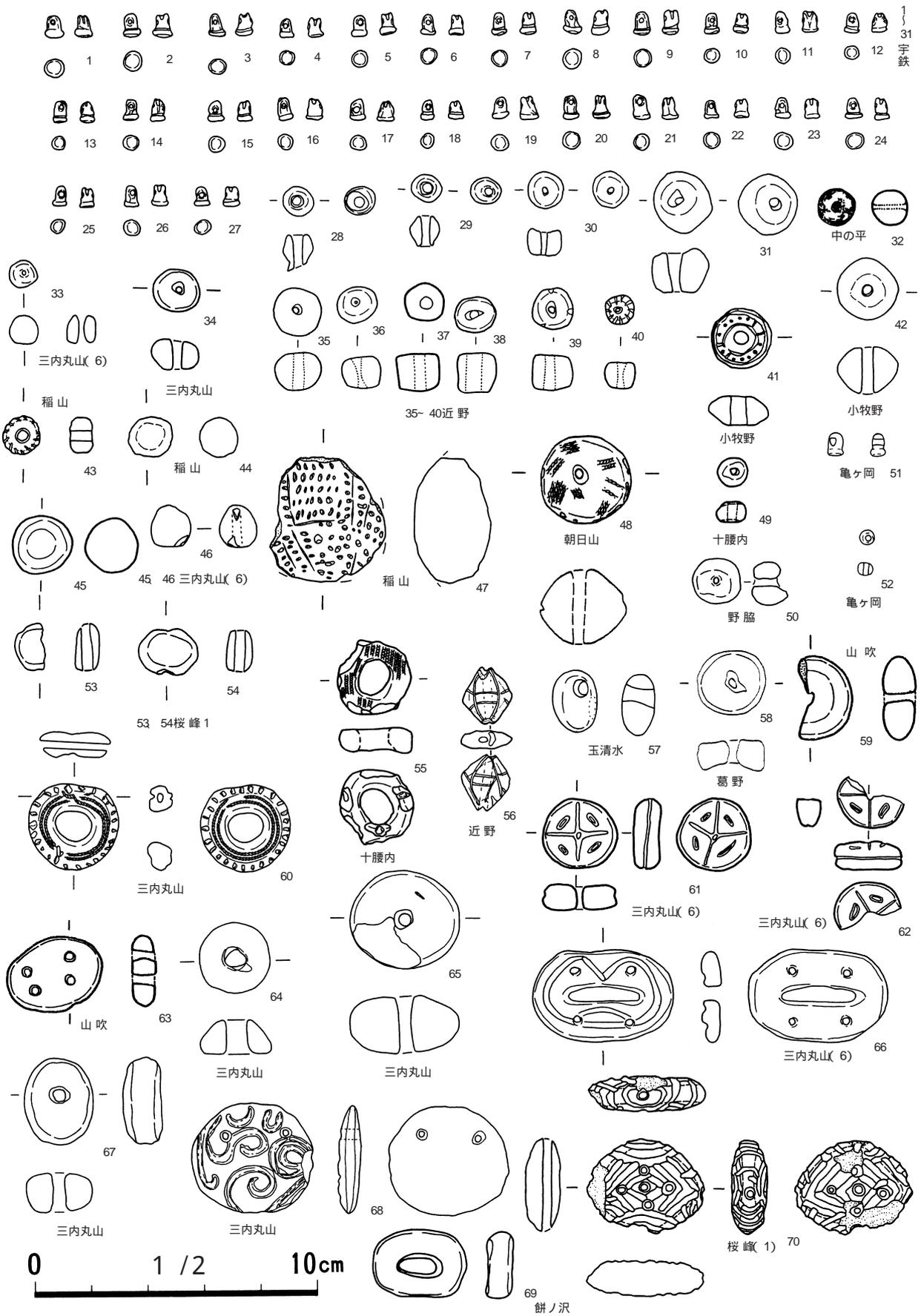
縄文勾玉

33-39 宇鉄

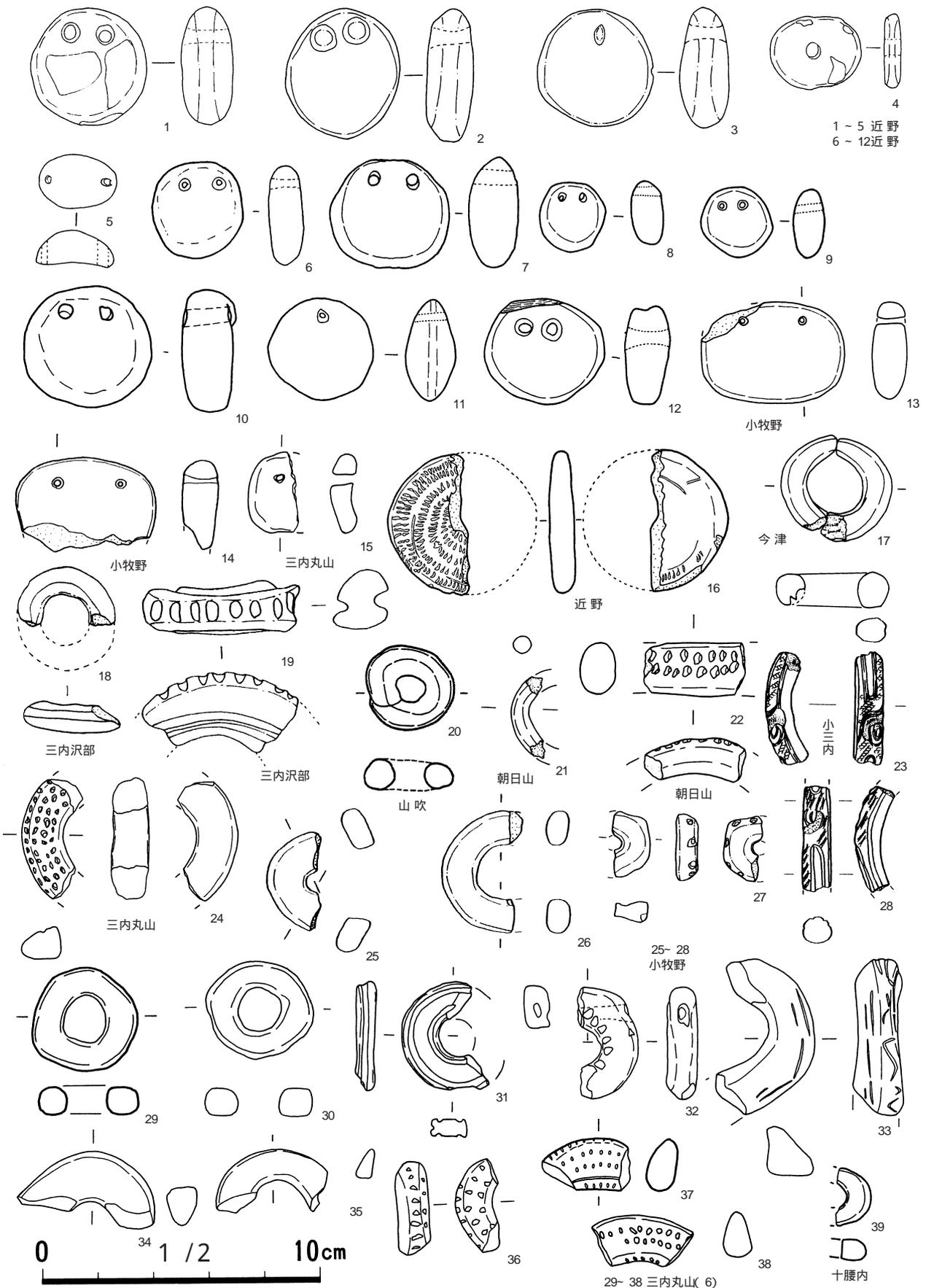


0 1/2 10cm

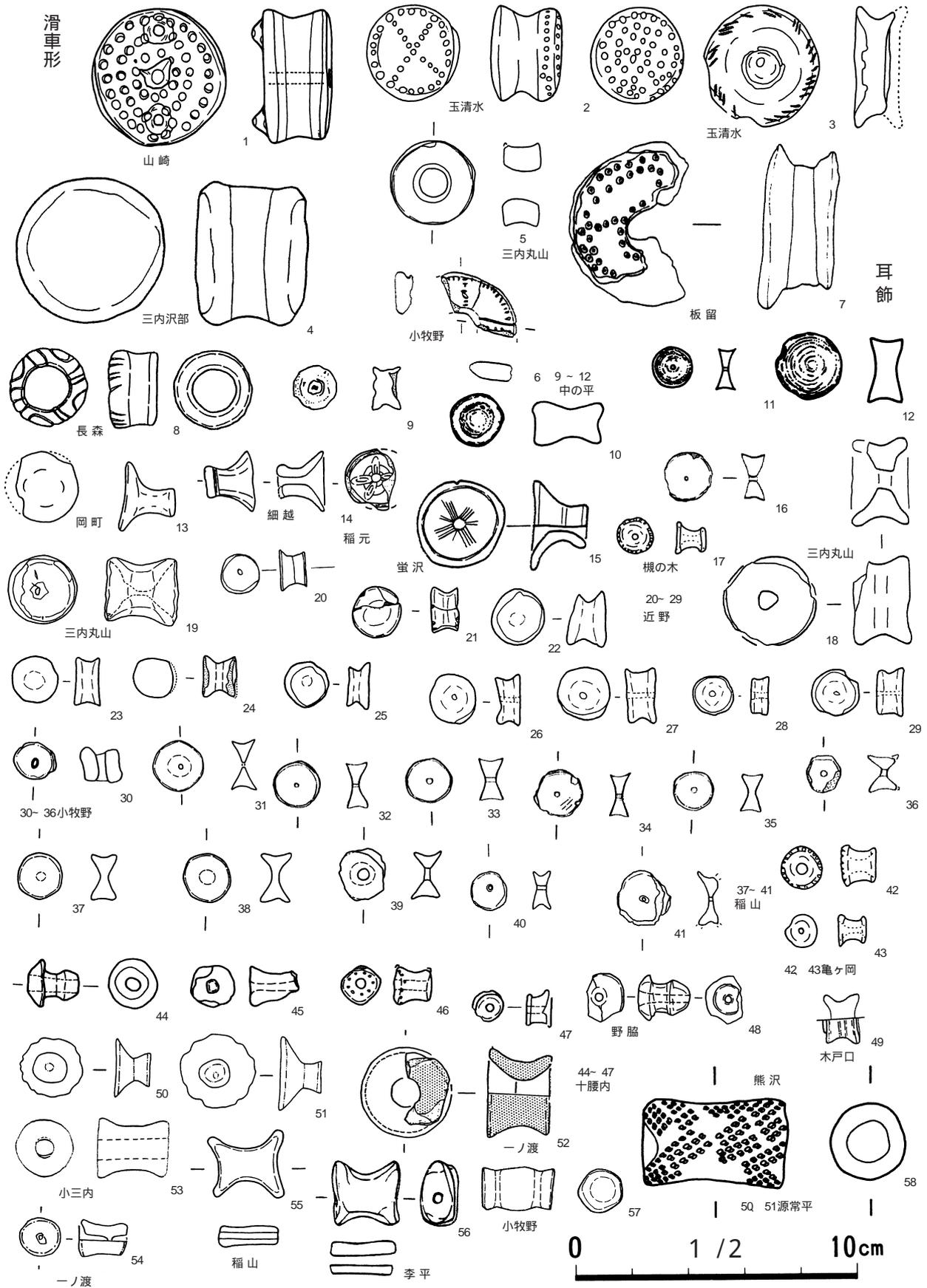
図版 46 (津軽地域 14)



図版 47 (津軽地域 15)



図版 48 (津軽地域 16)



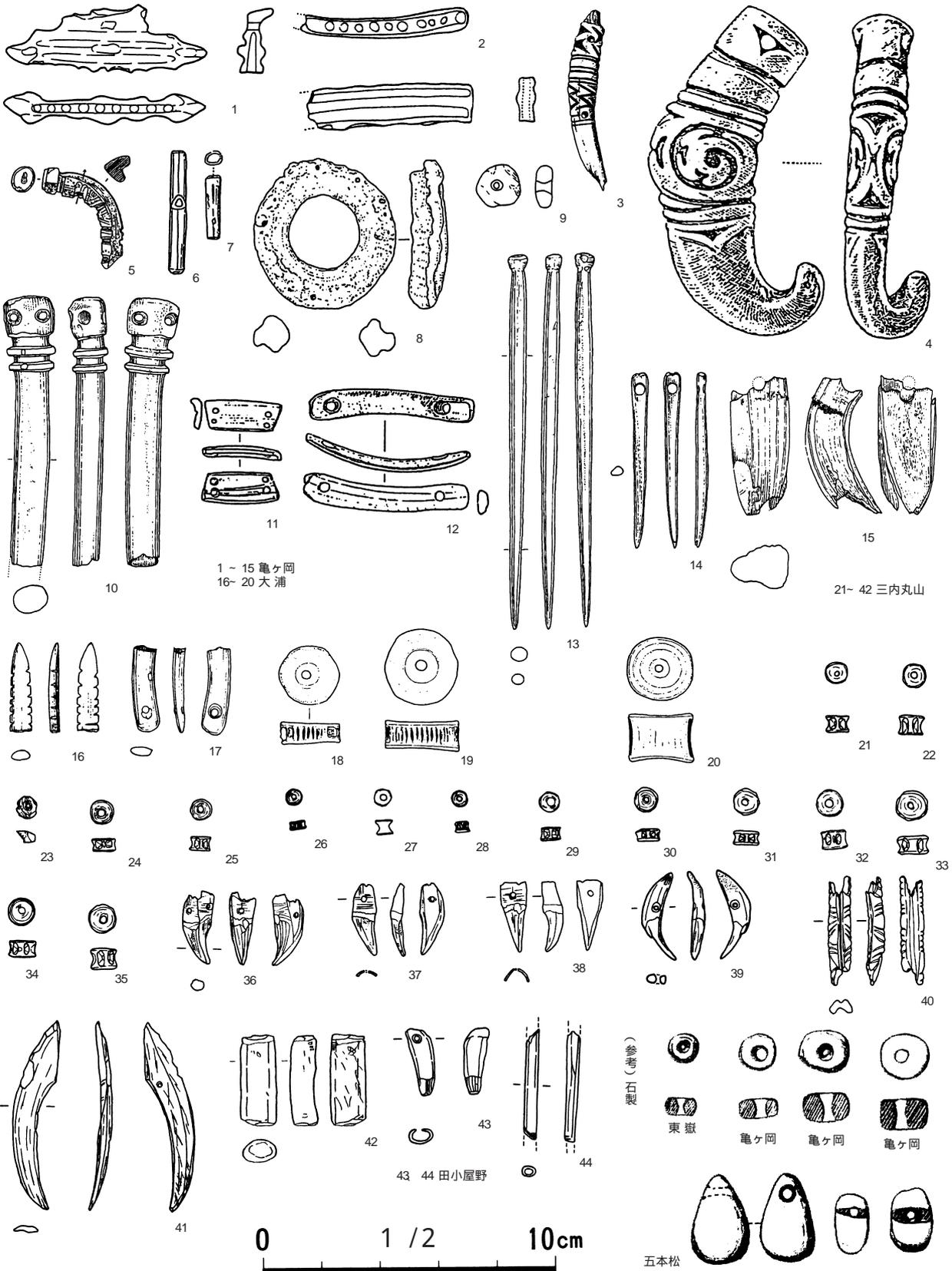
図版 49 (津軽地域 17)



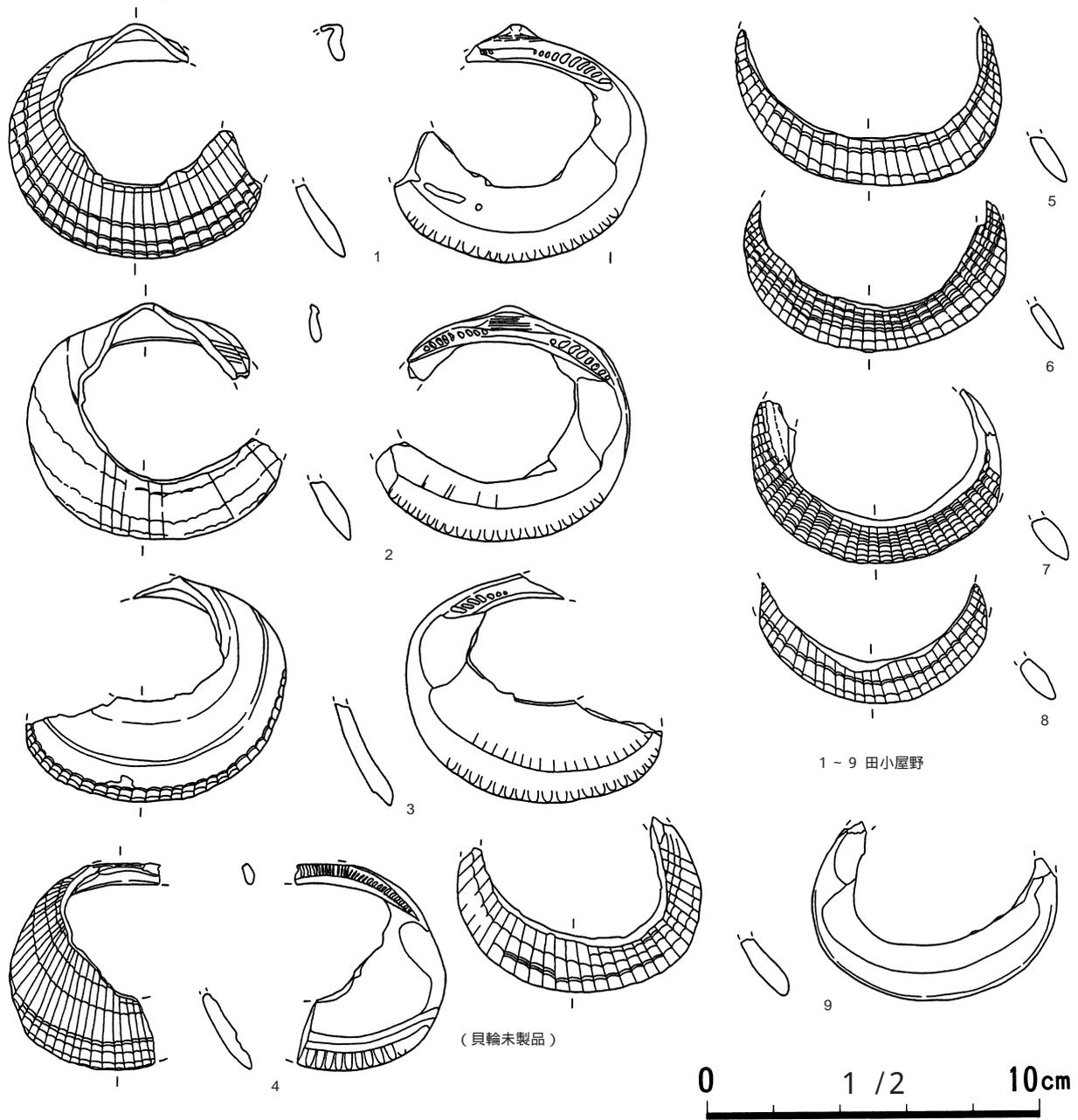
図版 50 (津軽地域 18)

漆製品

骨角製品



図版 51 (津軽地域 19)



図版 52 (津軽地域 20)

青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 第11号

発行年月日 2006年3月10日

発行者 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15
TEL (017) 788-5701 FAX (017) 788-5702

印刷所 青森相互印刷株式会社
〒038-0013 青森市久須志4丁目1-25
TEL (017) 766-5161 FAX (017) 766-5162